
愛と追憶の日々

おせろ道則

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛と追憶の日々

【Nコード】

N8489D

【作者名】

おせろ道則

【あらすじ】

自分がレスビアンなのかもはっきりしないまま、同姓の親友、香を愛する主人公、敬。その一方、敬には矢和田という彼氏もいた。彼は敬を愛するが、敬は香以上に彼を見ない。愛しているのに、相手は一番に自分を見てくれない。そんな者達の、それでも相手を愛していきたいとする、ひたむきな姿勢。それはやがて、すべてが素敵な場所におさまるよう、人生を方向づけていく。切ない日々の先に待つ、最高の幸せ。

プロローグ（前書き）

恋愛の中にサスペンスも織り交ぜています。読者の皆さんには楽しんで読んでもらえればと。

プロローグ

「おー、けっちゃん、久しぶり。元気やった？」受話器越しの香のカオリ声は明るい。いつも明るいけれど、今日はさらに。

「元気よ元気、香は元気だった？ 仕事はどう」私も明るく返事する。もうイヤー辞めたい、と、いつも通り、香がぼやく。それをきいて、私は笑う。私は自分の大学の様子を話す。レポートが八つもあつて、死にそうだと、弱音を吐く。

そんないつもの日常会話の後、私は、「で、どうしてまた急に電話を？」と、香に尋ねた。

「うーん、いや別にね……」

「ええ、どしたの」私はゆっくり向こうの反応を待った。

少し照れているような、戸惑っているような、そんな雰囲気醸し出しつつ、香は最後にするりと言った。

「見多ミタさんにプロポーズされた」

香の言葉は、瞬時に私の鼓膜から脳に伝わって、私はその言葉で、めまいと全身の脱力感を感じた。昔、大学受験で、絶対合格だと確信していた大学から、不合格通知が届いて、それを先生から知らされたときのような。言葉に詰まる以上に、息が詰まりそうになった。私はあわてて、大きく息を吸って、止めて、ゆっくり吐き出した。

「ちよつと待って」

すぐ側のアロマキャンドルに火を付けて、部屋をレモンガラスの空気に切り替えた。ガラスの器うつわ越しに、火が透けて見えて、とろとろと私の緊張をほぐしてくれる。

「突然すごいこと言うね」私は笑いながら香に言った。内心は全然楽しくないけれど。

「だって、けっちゃんに早はよ言わな、って必死やったんやで」香の言葉をきくほどに、私は混乱して、また頭が重たくなってきた。う

う。

「結婚、するん？」こは、もうきくしかない。

彼女は少し間を作って、私に言葉を届けた。

「向こうも、今すぐってわけじゃない、みたいなんよね。そうやねえ、だから、これから『結婚前提のお付き合い』を続けよう、ってことで」つまりOKしたのか！

「はあなるほど。つまり見多氏は婚約者に格上げされたわけやね」まあしかし、すぐにとどめがさされなくて、私は真剣に救われたと思った。もう一度、気持ちを落ち着かせてから、香にきいた。

「よかった？」

「うん、まあねえ。なるべくしてなったというか」

「……」『なるべくしてなった』そうか、そう思えるのか。

うまい言葉かけが見つからなくて、私は、うんうん、と相づちを打つことしかできなかった。

「けっちゃんの方はどうなん」香が不意に私の方に話を切り替えた。「いや、いたって仲良しよ。明日は矢和田^{ヤワタ}、マンションに遊びに来てくれるし」

「矢和田さん、大学ではむっつりした感じやけど、いい人よね」

「あの無表情を壊すのが楽しいんよな」いつの間にか、こっちの彼の、のろけ話になって、私はまた、ああ、やられた、と思った。香は話を換えるのがとても上手い。

話しながら、私はそれでも、ちくちくと痛む、頭の奥の何かを忘れなかった。ずっと近くにいた親友が結婚する。二十四年ちかく生きてきて、初めての経験だった。

*

その夜から、もう三日経つ。今日は日曜日。1月の京都は骨に沁

みる寒さだけれど、私はこの、つーんとした寒さの中で、窓を開け、朝一番の外の空気を吸うのが大好き。矢和田が来るまでにまだまだ時間がある。コーヒーを淹れて、少しのんびりしてから、部屋をもう一度整えておこう。矢和田の好きな観葉植物にもちゃんと水をやらないと。

午後に矢和田が私の部屋のインターフォンを押して、そのまま合鍵で玄関のドアを開けた。意味もなくインターフォンを押すのが、矢和田のお気に入り。私は台所でコーヒーを淹れながら、矢和田の持ってきてくれた、クッキー缶を開けた。

「わーい、おいしそう」

「俺、チーズの、三枚とって」隣の部屋で、矢和田がベッドに腰かけながら言っているのが分かる。矢和田は床にクッションより、ベッドの方が気に入っている。テレビもそこらが一番良く見えるし、ワンルूमマンションは、家具配置の工夫が大事。

「ビスコッティ、コーヒーに浸しながら、いいよね」

温めた牛乳を、ミルクホイッパーの、縦長な、ガラスの器に、ていねいに注ぐ。蓋をして、フィルターを上下させる。シャンシャンと牛乳が泡立つときの、音が好き。ミルクホイッパーは矢和田が去年プレゼントしてくれた。重宝してる。モカブレンドコーヒーが入った、二つのコーヒーカップに、泡だったミルクを均等に注ぐ。カフェラテ、できた。

クッキー皿とコーヒーをひとつ持って、部屋に行く。矢和田に渡して、自分のコーヒーをとりにもう一度台所に戻った。ついでにクッキー缶に残してある、ビスコッティをひとつ、つまんで。シナモン入りが私のお気に入り。

そうしたら、私はまた、おとといの電話の事を思い出してしまった。ああ、やっちゃった。ミルクホイップを作ったりしたからだ。単純作業は思い出さなくていいことを、フィードバックさせる。そしてまた、電話の話は矢和田に愚痴ってしまった。昨日、大学で報告したばかりなのに。

「結婚しても、時間を見つけて会ったりできるし。それじゃダメなのか。香ちゃんも、そう思ってるんじゃないか？」矢和田は、ポンポンと私の頭にふれる。あやされてるなあ。それじゃあ、と子供のように反論した。

「ダメとゆうか、何で見多^{みたし}氏なんやつて。ほんまに」

「見多さん、そんなにダメ男^おなんか」矢和田のかんだアーモンドクッキーが、ぱりんと気持ちよく音をたてた。

「小さいけど、銀行の店長だし、金銭感覚はしっかりしてるでしょうけど。二枚目やし、まあいい人じゃないの？」

「見多さんがダメなんじゃなくて、香ちゃんの彼氏はみんなダメなんだろ、ダメというか『イヤ』か？」あたり。矢和田、よく分かっている。

「結婚したらー『見多 香』になるのか……」言つて、堂々巡りになつてきてるのに気づいた。この辺でもう止めておこう。矢和田は優しいから、きっといつまでも私の話をきいてくれるけど、せつかく会っているのに、これは辛氣くさい。矢和田と居るときは、矢和田と楽しく過ごしたい。

「お茶、淹れ直そうか」カップを持って私は台所に行った。水道の水を出す。矢和田が部屋からきいてきた。

「香ちゃん、婚約か。いつプロポーズされたんだっけ」

「今週の月曜日だつて、確か。仕事帰りに、そんな流れになつて、すんなりと言われたらしいよ」矢和田がふいに私に尋ねた。

「俺たちも、流れにのつとく？」それは、とてもすんなりと。

私は蛇口を閉めて、水の音を消した。水の音で矢和田の声が小さくなってしまう。台所と部屋の境目に立って、私は矢和田の方を見た。最後の一押しをもらいたくて、私はもう一度、小さく尋ねた。

「も一回。何て？」

「俺と結婚しない？」

「する」

ハレルヤ

今夜は私が香に電話しないと、そう思った。香は多分、まず叫ぶだろうな。それで私は、言いながら、嬉しさと、どこか泣きたさを入り交じらせながら、明け方まで香と話し込むに違いない。

第一部 1

季節は、まだまだ寒さの厳しい、京都の2月。それでも1月の、骨にきしむような寒さはだいぶ和らいでいる。私はベッドの中から手だけ伸ばして、朝日のさしこむカーテンをさらさらと開けた。今日もいい天気だ。

ベッドから抜け出し、耳に響く金属音が鳴る前に、自分で目覚ましをONからOFFに切り替える。

ここ数年、目覚ましに、「音」で起こされた事はない。目覚ましが「鳴る」という心持ちだけで早起きができるから面白い。

お手洗いに行ってから、コーヒーをいれるために、やかんに水をためる。朝一番の水道水は、古い濁った水だから、二、三回はやかんに入れては出す作業を繰り返す。

やかんに水を八分目。ガスコンロの火を付ける。

お湯が沸く間に、コーヒーフィルターに薄茶色のペーパーをひく。ペーパーの底の部分は手で折っておく。こうすると、適度にコーヒーが濾過される、らしい。

お湯が沸騰したら、豆の粉をフィルターに八分目、落とす。そのまま沸騰したてのお湯を、少し高い位置からゆっくり注ぐ。ゆっくり。

粉が蒸れて、ふわっとふくらむ。このときの香りが一番好き。すぐくりラックスする。モカブレンドの甘い香りは特に。そのまま、お湯を何度かに分けて注いで、ゆっくりとコーヒーをいれる。アクがでないよう、粉を底に落とさないよう、気を付けながら。

朝のこの、コーヒーをいれる三十分弱の時間が、私の一日の中で一番おっとりした時間帯だ。あまり考え事をしないですむのも、この時間帯。とろとろと進む、朝の時間。

コーヒーがいれ終わった、ちょうどそのとき、それを待っていてくれたかのように、携帯のバイブがテーブルの上で震えだした。

メールかな？二回目のバイブの後、三回目のバイブが震えたから、着信だと分かった。三步でテーブルの前に行って、携帯をとった。

番号をまず確かめると、知らないところから。

携帯の番号じゃないな。誰かな。思いながら電源を押して、電話にでた。

「もしもし」

「あ、もしもし、敬ちゃん？」女性の声。誰だろう？

あ、もしかして。と思ったら、向こうが言ってくれた。

「おばちゃんよ、香の。分からなかったでしょ、ごめんね」

やっぱり、香のお母さん。

電話じゃ全然声のトーンが違うね、と笑った。それに、ちょっとおばさんらしくない雰囲気だったから。今も何だか、おばさんの声は、震えてるような。

「なんか、あつたんですか？」

香に、何かあつたんだ。直感でそう思った。

おばさんが、少し黙った。

「香がね、昨日、病院に入ったの。ちょっと入院になってね。それで、できたら敬ちゃん、病院に来てもらえないかしら、ねえ」

私の全身に、ぴりつと緊張が走った。おばさんの声が、さっきより、ずつと震えだしてる。私はそのまま、おばさんが話すのをきき続けた。

「あ、ごめんね敬ちゃん、こんな朝早くから。早く伝えないと思ったら。今何時？もお、何やってるのかしら、私は、ねえ、ほんとにねえ」

私の背筋が一気に寒くなった。香に、何かとんでもないことが起こってる気がした。

「おばさん、おばさん大丈夫？」

「え、ええ。ごめんねえ、おばちゃん、ちょっと今、不安で」

受話器から、組み合わせない単語が、文になって、おばさん

の声で私の耳に届いた。

「香、今、昏睡状態、なの」

寒さが一瞬遠のいて、というより、感覚が麻痺したようになって、頭の中が真っ白になった。ほんとに、雪山のホワイトアウトのよう

に。
我に返ったとたん、冷や汗が一気に吹き出してきた。私はただ、ここに立っている。おばさんに、返す言葉が出てこない。

もう一度、火にかけていたやかんが、『コトコト』と、音を立て始めている。

いつもの変わらない朝は、いつたどこにいった？

府立病院の待合室で、私は、おばさんを見つけた。私のコートは、凍る程に冷たいけれど、私自体は熱くて、セーターも脱ぎたい位だった。

病院の中は、妙に生あったかい。

それが私には落ち着かないあたたかさで、私はコートを脱ごうかどうか迷ったが、脱がずに、おばさんの方に近づいて、私はおばさんに声をかけるのを、待った。

おばさんは、長椅子に座って、背中を曲げて、ハンカチを目の下に押しつけていた。

私はそのまま、待った。五分位経って、おばさんが、はあっと息を吐いて顔を上げたので、私はゆっくりおばさんに声をかけた。

「敬ちゃん」

おばさんは、私に気づくと、笑って椅子から立った。

まじまじと私を見て、「大きくなったねえ。また美人になってー」

と、香の家で会うときと同じ、冗談めいた口調で、私の背中をぽんぽんと叩いた。私は少しほっとした。

「香は、今はどうですか」

「三階のね、集中治療室にいるの。今なら会えるし、十分だけだけ。敬ちゃん、香に会ってやってくれない？」

「私、ICUに入っているんですか」

「いいの、だって敬ちゃんだもの」おばさんは私の背中を押して、

「私からのお願い」と、付け加えた。

待合室から、一階の長い廊下を歩いて、突き当たりのエレベーターに乗り込んだ。

エレベーターの中は、かすかに消毒液の臭いがして、手すりは鈍

く銀色に光っている。

おばさんが、「3」のボタンを押し、（閉）も押す。エレベータの扉はシューーンと閉まって、ガクンと上昇し始めた。箱の移動する鈍い音が、今日はやけに耳障りだ。

「どうして？」

私は、おばさんに尋ねた。どうして香が昏睡状態に？

「香に会ってから、後でゆっくり話してもいい？」

おばさんは微笑んで、私に言った。

私はうなずいて、無理にでも微笑んだ。

私を見て、おばさんは、困惑してるような表情で、ポツリとつぶやいた。

「私も、まだ納得いかないことがたくさんで」

エレベーターを降りて、おばさんに従って、ICUのドアの前に立った。

「入って」

おばさんが私を促す。

私はここに来て、今頃になって、やっと、とてつもない実感がわきあがってきた。香が本当にICUに入っている、という実感が。

私の鼓動が速くなっているのが分かった。私はゆっくり、ドアノブを回して、部屋の中に入った。

本当にこの部屋のベッドの上に、彼女が、いた。

足が動かなくなった。本当に、がっかりと。

私の足が、地面に根をはった。硬直は手の指先まで浸透して、完全に固まってしまった。コードだらけの彼女が、私を全身、金縛りにして動かしてくれない。

「敬ちゃん」

おばさんの声で、呪縛が解けた。私は息を飲み込んで、はい、と返事を返した。

「もう少し、近くに行っても？」

私はおばさんにきいた。

おばさんは、もちろん、と手で促してくれた。

私は、ゆっくり、彼女に近づいて、右側から、彼女の顔をのぞき込んだ。呼吸器とコードにつながれた、彼女の顔を。

香。

花びらが舞っているような、薄いピンクの頬に、粉雪がつもっているような、細かな白い肌。

香の顔は、静寂に包まれて、ぴくりとも動いていなかった。

口元から、しゅーしゅーという音だけがきこえる。人工呼吸気は、こんな音を生ならすのか。

私は、この香を見て、それでも、これが事実だとは認められなかった。香が、「ふふっ！」と吹き出し笑いをして、起き出してくれないかと、少し待ってみた。

でも香は起きあがりはいしない。

待て、待ってよ。こんなのって。

私の心が揺らめいてきた。

香が「嘘でした」と言つて、私の心臓をバクバクさせてくれるのを待ちたかった。でも、香をとり巻く無数のコードと、『ぴっ…ぴっ…』と鳴る単調な機械音が、『そんなこと、あるわけないだろう』と、私を責めたてる。

「何で」

思わずつぶやいてしまつて、それから私の目の前がぼんやりと、そしてそのまま涙で、香が、見えなくなってきた。

香！

私が隣でへたり込んでも、香は表情ひとつ変えず、瞼は閉じたままだった。

病院内の公衆電話で、矢和田に連絡した。

ちようど大学はお昼休みで、矢和田はすぐにでてくれた。

病院の公衆電話は、待合室の隅にある、ダイヤルをぐるぐる回す、緑色のレトロなやつ。カードが入らなくて、硬貨でしかかけられない。五つあるけど、今使っているのは私だけだ。

香が、病院のICUに入ったことや、意識不明な事を、とりあえず、簡潔に説明した。

「それで、香ちゃんは今は安定してるのか」

「うん、急な発作とかは今のところ。でも、意識が戻る兆しもないし」

「状態が落ち着いてるなら、今は安心だな」

矢和田がゆっくり返事する。

「うん、でも、香、寝たままで」

「うん」

「今は落ち着いてるって言っても、そんなの」

「敬」

「発作って、いつ起こるか分からないのが発作でしょ」

「そうだな」

「そうだよ!」

「十円玉、まだ充分ある?」

ぶふっ!

私は一気に吹き出してしまった。

電話の前で、けらけらと笑った。お腹が痛くなるまで。そしてそのまま声を殺して泣き出してしまった。

「矢和田、どうしよう」

「今日は午後に会議もあるから、それからになるけど、俺もそっちに行くよ」香ちゃんのお家の方が、いいって言っなら。と矢和田は

付け加えた。

「多分、いいと思うよ。一応きいて、またメールするわ」

「病院の外で待ってもいいし。とにかく会いに行くから」

「矢和田、ありがとう」

目をこすりながら、私はまた泣きそうになった。

電話の向こうで、矢和田の背中から、講義開始のチャイムの音がきこえた。

「矢和田、次、法律概論の講義じゃなかった？」

「今、気持ち、落ち着いてきたか？」

矢和田がゆっくり、心配そうにきいてくれた。

「うん、大分落ち着いた」

涙も引いてきて、確かに気持ちも少し落ち着いてきた。

病院で、たくさんの患者さんもいるのにとり乱しちゃったな。

私は急に恥ずかしくなって、少し周りを一望した。

彼の姿が、偶然目に飛び込んだ。彼が、見多氏が、病院の自動ドアから入って来たのが見えた。

紺のスーツに、グレーのコート。濃いベージュのマフラーを巻いていた。

香の病室の方へ、そそくさと歩いて行く。見多氏は角を曲がって行って、もう見えなくなった。

見多氏だよね？

「矢和田、じゃあまた、連絡するね」

矢和田が、先に電話を切るのを確認してから、私は、緑の重たい受話器を降ろした。

がちゃん、と受話器が、アルミのつってに、ぴったりはまって、次の使用者をまた、静かに待つ。

私は、少しぼんやりしたまま、見多氏の後ろ姿をもう一度、記憶の中で確認した。

見多氏。意識不明になっていた香を見つけた、第一発見者。

見多氏は、ガラス越しから、香をじつと見ていた。今日はもう、集中治療室の中に入ることはできない。私は、見多氏の後ろ五メートルくらいから、見多氏の背中を黙って見続けた。香の婚約者は、黙って、ガラスに手を添えて、香をずっと見ている。少し猫背で、いたずらをして、お母さんにしかられて、しょんぼりしている子供のよう。声をかけようか少しためらったけれど、後ろにずっといたことを不信がられては困るから、向こうが気づく前に、私から声をかけた。

「やあ、……^{アサキ}朝来さん」見多氏は、確認しながら、私に返事を返した。軽い会話を織り交ぜながら、私達は、家族控室に向かった。

控室には、おばさんと、おじさんと、そして香の弟の晃君^{コウ}が居た。おじさんが私に気づいて、「お、敬ちゃん」と、疲れた顔で笑ってみせた。おじさんの声で、顔を下に向けていた晃君が、顔をゆっくり上げて、「敬ちゃん」と、ぼんやり言った。晃君の目がすごく赤い。陸上部で、がっしりした体つきだけど、今にも倒れそうな、もろい雰囲気。見多氏が、おじさんとおばさんに挨拶をして、「今、香に会ってきました」と話を始めた。

ここに居ない方がいいかな。私はそう思って、「何か飲み物でも買ってきますけど、何かいりますか？」と、皆に尋ねた。

「お母さん、俺、何か飲んでくる」晃君が不意にそう言って、私に行こう、と、目で促した。

「しばらくここに居るから」おばさんは微笑んで、そう言った。私はうなずいた。

控室の扉を閉めて、私は晃君と並んで、売店の方に向かった。病院の隅に、ちょこんと添えられているような、人気の少ない売店で、私はコーヒー、晃君にはパンとコーヒーを渡した。

「お金、払うよ」晃君は遠慮したけれど、払わせてよ、と私は笑って、晃君の財布をポケットにしまわせた。晃君はありがとう、と言って、疲れた顔で小さく微笑んだ。

「ここ、息苦しくない？」晃君が小さく言った。

「そうだね、私も。ちよつと外に出ようか」売店の裏のドアから外に出ると、そこは、病院の精神患者病棟の入り口近くだった。あ。どこかで私の頭が、くらりと揺れるのを感じた。

すぐ側に、ベンチがあったので、二人でそこに座った。木製で、鉄の脚がモダンな造りになっている、ちよつとおしゃれなベンチ。建物から出ると、はく息が白くなる。冬の名残が残る京都の空は、私の頭をきーんとさせる。でも病院の中より、ずっと居心地はいい。晃君はぼんやりと黙ったまま、熱いコーヒーをゆっくり飲んだ。私もコーヒーを少し口に含んで、右に居る晃君を眺めた。

「それ、ミルク入り？」私はきいた。

「え。ううん、ブラック。砂糖は入ってるけど」晃君が下を向いたまま答える。淡々と。

「こっちはミルク入りで、砂糖なし」私は微笑んで、「おいしいコーヒーの店、最近見つけたんだけど、今度一緒に行かない」と言つて、あいてる右手で、晃君の背中に二回、ぽんぽんと触れた。晃君がぴくりと揺れた。

「勉強しないと」晃君が声を少し震わせて、言った。

「そうか、今年、晃君受験なんよねえ」

「うん、うん、」晃君の背中が縮まった。晃君は、言葉にならない声で、うう、と言って、顔を下にうずめて、コーヒーの紙コップを握りつぶした。ボクサーが、しっかりガードを固めるときのような姿勢。晃君は何かに必死で耐えるみたいに、うう、と、かすかにつぶやきながら、身体を縮めて、身体全体を小刻みに揺らした。下唇を噛みしめて、私は右腕で、晃君を引き寄せた。晃君の肩幅は広いけど、今日はすっぱり、私の腕に収まる。晃君の後頭部に、私の右頬を付けて、左手で晃君の頭を包んだ。

「大丈夫」私は言った。自分にも言いかけながら。
「きつと全部上手くいくよ」晃君を抱きしめたまま、目に涙を浮かべたまま、私は空を仰いだ。うつすらと、白と水色の層を織りなす薄雲が、空全体をおおっていて、私がいいた白い息も、視界に入ってくる。大丈夫だ、きつと全部上手くいく。私は願った。信じなくちゃ、希望はない。

院内に戻って、二人で、控室につながる廊下をゆっくり歩いた。

晃君は、目がまた赤くなっただけで、さっきより、すっきりした雰
囲気になっている。

「ぼろ泣きしちゃった」晃君が恥ずかしそうに言った。

「うちもさっき、香の前でぼろ泣きたよ」私も晃君に告白した。
おんなし、おんなし。晃君は下向き加減に少し笑った。

「今日は、姉ちゃんには、会わなかったんだ。明日は会って、励ま
すよ」

「うん、いいね」私は、晃君の肩をぽんぽんと叩いた。家族があん
な姿になったら、直視するのも辛いだろう。

控室に戻ると、見多氏はもういなかった。

「見多さんは、今日はもう帰ったわ。お仕事の合間に来てくださっ
たから」お婆さんは微笑んで、晃君を手招きして、「何か、食べれ
た？」と尋ねていた。

「敬ちゃん、今日はこれからどうするんだ？」おじさんが私に尋ね
た。

「この後、矢和田さんが、こっちに来てくれるので、まだ病院には
います」

「私たちも、今日は一日、ここにいろわ。でも、今日はもう、香に
会えないし、また明日、ゆっくり話したい」お婆さんは、申し訳
なさそうに言った。お婆さんを見て、確かに、今日はもう詳しい話
はきかない方がいいなと思った。みんな精神的に、ぼろぼろになっ
てる。私も多分、相当疲れてるみたいだし。承知して、明日の午後
一時にまた会う約束をして、私は控室を出た。

控室を出て、矢和田との待ち合わせ場所の、病院の受付前に行こ

うと廊下を曲がった。曲がってすぐ、左の壁から扉が出っ張った。ドアから、白衣の、見覚えのある医師が私に横顔を見せた。そしてこちらに顔を向けて、私に気づいた。

「敬ちゃん？」

「石詰先生」私の方からも、先生に近づいた。

「久しぶりだね」

「ええ、お久しぶりです。先生、お元気でした」

「医者が病氣してたら、見本にならないだろう、え」先生は笑って、きれいな歯並びの歯をにかつと出して、そして「今は暇？　むこうでコーヒーでも飲まないか」ときいた。

矢和田のメールを思い出して、矢和田が来るのに、あと一時間くらいかかるなあ、と確認してから、「三十分くらいなら」と石詰先生に答えた。医者は予約時間をあつさり延長する。

「じゃあ、向こうで」石詰先生はにつこり笑った。

職員控室に入ると、中には誰もいなかった。

「適当にかけていいよ」先生は、奥の給湯室に行つて、「コーヒーでいいかなあ」と叫んだ。

控室は、何となく落ち着かない。それでいて、なぜか、どこか懐かしい。懐かしいのは、昔、よくここで一人遊びをしていたからだ。落ち着かないのは、今はもう、できれば来たくない場所だから。かすかに医師達が醸し出す、インテリ系の雰囲気と、消毒液の醒めた清潔感が漂うこの場所。一時間が限界だなど思った。先生は、両手に、紙コップのおさまったプラスチックのコーヒーカップを持ってきた。

「熱いよ」と言つて、湯気の立つコーヒーを、私にひとつ手渡して、先生は、椅子に座りながら、コーヒーを一口すすった。

「今もお忙しいんですか」私は少し微笑んで、先生にきいた。熱いコーヒーの香りが、少し私の緊張をほぐした。

「そうだねえ。うん、忙しいねえ」先生は、うーんとうなつて、め

がねをかけ直した。医者にしては派手な黒ぶちめがね。石詰先生は、自分の近況や、医学界の話をして、私はそれを、うなずきながらきいた。

「敬ちゃんのほう、最近どうだい？」先生が、つるりときいてきた。「元気ですよ。お母さんも。元気でやってます」私は微笑んで答えた。

「そうかあ」先生は椅子の背もたれを少し傾けて、ほっとしたように、小さく「よかった。いらぬお世話だけど、心配だったんだ」と言った。私は、今度はほんとに、顔をほころばせて、先生にお礼を言った。

「色々お世話になりました」

「じゃあ、今日は、どうしてここに？」先生は近くの棚の引き出しを開けて、クッキー缶を出して、私にすすめた。

「友達が、昨日ここのICUに入っただんです」私は、少し目を伏せて言った。

「昨日？ それって布瀬^{ぬのせ} 香さん？」先生がコーヒーをごくりと飲んで、言った。

「せんせ」私は、先生の手元に置いてある、患者のカルテに、ぱつと目を落とした。

「そうかあ。彼女、敬ちゃんの友達か」石詰先生は、脳外科医担当だ。先生はたくさんカルテから、香の名前の入ったカルテを見せ、
「俺の担当の患者だ」と真顔で言った。

「詳しい話は、基本的には、家族にしか、しない決まりになってるんだよ」先生は、私が詰め寄る前に、予防線を張った。

「友達だけど。ごめんな敬ちゃん」

「知ってますよ」私は、はやる気持ちを抑えて、先生に微笑んだ。小さな絞りクツキーをひとつつまんで、残りのコーヒーをじっと眺めた。それを、カップごと、ゆらゆら揺らして、「すぐききたいですけどね」と軽く訴えた。ききわけが良さそうで、私はしつこい。

一秒の沈黙。

「先生、当たり障りのないところまでだけでもダメですか」

私は懇願した。

「大事な友達だから」だから、医者からの率直な見解をききたい。

先生は、しかめっ面で、何も言わず、香のカルテをその他のカルテの中に戻した。とんとんと、もう一度それらを、きれいに整頓して、そして、口を開いてくれた。

「俺から見て、布瀬さんが、今日、明日でどうにかなるっていうことは、今のところ、無いと思うよ」全身の力が抜けた。安心からの脱力。

「布瀬さんに会った？」

「今日会ってきました、すごい、きれいなままだった」私は少し鼻をすすってから、先生に香の印象を答えた。

「うん、あれは、ほんと、珍しいと思うよ。呼吸も、正常に近いくらい安定しているし。内蔵の方もこれといって障害はないし」

「ということは、頭だけ、やられているっていうことですか」私は慎重にきいた。

「一番やっかいなところがね。昨日から、ずっと脳波を調べたんだけど」先生が言葉を止めた。私と先生の、間一メートルの空気が、

すうつと冷めた。そして、ずしんと、重力が増したように、周りの空気が、私の肩にのしかかった。

「目覚める見込みが少ない」少し目を細めて、先生は言った。

私の喉が、こくりと、音を立てた。

「香の家族には？」

「さつき控室で話してきた。強いご両親だったな。『眠ったままの可能性も、目覚める可能性もあるんだから、まだ、この子を見守っていきます』って、即答したよ」

「あの家族は、私も尊敬してる」私は先生に言った。

言って、腕時計で、時間を確認した。そろそろ矢和田がこっちに着く頃だ。

「先生」ん、と先生は黒ぶちめがねの奥から、私を見た。私は微笑んで先生にきいた。

「医者の世界じゃ、香は面倒くさい？」先生は、少し右上に視線を移して、言葉を探しているようす。先生は言った。

「俺は、患者をやっかい者だと思ったことは無いよ」その言葉は本当だ。私は確信することが出来た。石詰先生は、稀にみる誠実な先生なんだから。

「ただ、今後の治療方針は、相談に応じて、どう変わるかは、俺には分からないよ。残念だけど、患者にとって、生きてる方が辛いときもあるだろう」石詰先生は、うなるように言った。私は小さく何度もうなずいた。うん、そうだね。私は言った。

「香にとって、一番いい治療をしてあげて」それが、何より大事だろう。

職員控室の前で、先生と挨拶をして別れてから、受付前に顔を向けたら、矢和田が見えた。手で「ここだよ」と、言っている。

「今の医者、香ちゃんの主治医？」矢和田がきいた。

「うん。石詰先生」私は、もうひとつ付け加えた。「それに、お父さんの生前の友達」

「へえ。偶然だな」矢和田は、穏やかにそう言って、それ以上はきかなかった。私が、死んだお父さんの話はあまり、口にしたくないことを知っているから。私は、矢和田の気遣いに感謝しながらも、ひとつ、言えなかったことについて、少し胸を詰まらせた。

やっぱり疲れてたんだ。病院を出ると、急に体がぐったりしてきた。何だか気持ち悪くなってきた、吐き気を感じた。

「具合悪い？」矢和田が私の顔を覗きこんだ。

「少し」

「車で来たけど、敬、送ろうか」私は矢和田のコートの袖をつまんだ。

「嫌。一緒に居て欲しい」自覚してなかったけれど、私も相当、精神的に参っていたらしい。悲しみとか、疲労とかが、大きいほど後にくるんだった。

矢和田のマンションまで、車で三十分。矢和田の隣の助手席で、私は、ぼんやり、外の景色と矢和田を交互に眺めた。外は、大分薄暗くなっていて、いろんなお店のネオンライトが目立ち始めている。赤やオレンジの暖色系のネオンライトも、京都の寒い街中じゃ、寒色系のネオンライトと、何ら変わり無く見える。今は、何色の光も、みんな寒く見える。

こんな気分のせいだ。私はぼんやりそう思った。

矢和田のマンションの駐車場に着いた。ガレージは暗い。何台か、他の住人の車が停めてある。矢和田は丁寧に、バックで矢和田の駐車スペースに車を収めた。エンジンが止まると、辺りはしんと静かになった。

ドアを開けずに、矢和田が私の方を見た。無言。

「どしたの」と、私がちよつと笑って、きいた。

「今日はお疲れな一日だったな」矢和田がぼんぼんと頭に触れた。私の緊張の糸は、矢和田にあっけなく切られた。私はそのまま、矢和田の方に傾いて、矢和田の胸に顔をうずめて、声を出して泣いた。そのまま、咳き込みながらも、私は泣き続けた。矢和田はずっ

と無言で、私の隣に居てくれた。車のヒーターは、もう止まっていたけれど、全然寒くなかった。

矢和田の部屋は、ほっとする雰囲気で、好き。玄関の靴箱の上には、ひそやかに観葉植物が飾られている。奥の部屋で、私は灰色のチェアに座り、矢和田が着替えてくるのを待った。少し離れた机の上には、六法全書が一冊と、民法の本が何冊もあった。そういえば、今月は、民法を教えるって言うてたなあ。大学教授も予習は大変だ。矢和田が、きめこやかな模様が編まれたグレーのセーターと、深い蒼色のジーンズで帰ってきた。手に二つのマグカップを持って。レモンの穏やかで、さわやかな香りがした。矢和田はハチミツレモンをいれるのが上手。

「ありがとう」

「暖房、入れたばかりだから、寒くないか」矢和田が隣に座る。

「あつたまる、おいしい」ゆっくり飲みながら、大丈夫、と矢和田に返事した。

私は、香がどうして、ああなったのか、矢和田に話した。

おばさんからきいた説明は、こんな感じだ。

香が病院に運ばれたのは、昨日の夜中の十一時頃。病院に運ばれたときには、もう意識は無かったらしい。十二時頃、おばさんの家に、病院から電話がかかってきた。見多氏から、「香が今、救急センターで、措置を受けている」との電話が。香を病院まで運んだのも、見多氏。その日は、朝から一日中、雨だった。その夜、香と見多氏は、銀行で残業していたらしい。見多氏は一階で、精算額の確認を。香は二階で、書類の整理をしていたらしい。二階から、何か大きな音と一緒に、階段から、「何か」が転げ落ちる音がきこえたそう。すぐに音がした方へ行つて、落ちた香を見つけた見多氏は、すぐに香を抱き起こしたが、香は、ぐったりして意識が無かったらしい。彼は、すぐに病院の救急センターに電話して、そのまま自分の車で香を運んだ。そして、病院に着いてから、おばさんに電話を

した。

その夜、階段は雨の湿気で、ずいぶん滑りやすくなっていたらしい。

見多氏の銀行の階段は、かなり急だ。閉店した銀行は、使っている部屋以外、ライトは付かない。薄暗いオレンジ色の豆電球だけ。香は、薄暗い廊下で、ぬれた床に足をとられて、階段を落ちた。そして今、ICUに入っている。

「落ちながら、頭を強く打ったんだって」私は淡々と話した。

「そっか」矢和田がゆっくり返事する。

やりきれない。口には出さないけれど、私の頭の中は、それでいいだった。

「今日は、もう、ゆっくり休もう」矢和田が言う。

「うん」私はうなずいた。今日はもう、これ以上考えても仕方ない。明日、またおばさんに会って、色々話もするし。

「泊まってく？」矢和田がきいた。

「いい？ 明日朝イチでマンションに戻るから」

「いいよ、着替えはでかいけど」私はぶぷつと笑った。今日は、もう何も考えないで休もう。また明日だ。

朝、起きて、矢和田も起こした。「今日は午前中から、講義があるから起こして」と言われていたから。でも矢和田は二度寝が好きだから、ベッドから、簡単に起きてはこない。朝ご飯は食べないで、私は水を一杯だけ飲んだ。洗顔をして、軽く外に出られるくらいの化粧をして、昨日の服をもう一度着た。部屋を出るとき、矢和田がまだ少し眠たそうな声で、今日、時間あつたら、夜、一緒に飯を食おう、と言った。

「うん、メールするわ」そう言つて、私はドアを閉めた。ばたん、かちやりとマンションのドアを閉めると、妙に寂しい気持ちになった。でも、朝の空気は、新鮮で、気持ちいい。

帰ろう。私は階段で、マンションの下まで降りて、最寄の駅から電車に乗って、私のマンションに帰った。

マンションに着いて、部屋に入ってから、今日はお母さんに会う日だったことを思い出した。手帳でも確かめたら、やっぱり今日。お母さん、もう起きてるかな。私は時計で、九時を確認して、もう少ししてからお母さんに電話をかけることに決めた。その間に、コーヒーをいれて、飲みながら朝ご飯を作った。食欲は無くなつてなかった。よかった、食べられるときに、食べておかないと。

十時過ぎになったので、私はお母さんに電話した。

「はい、朝来です」お母さんの落ち着いた声が、電話に出た。

「お母さん、おはよう。敬だけど」

「ああ、おはよう、どうしたの」

「今日、ご飯食べようつて言つてたけど、ちょっと駄目になりそうなの。香が、ちょっと、病院に入院したの」ためらいながら、お母さんにも、香のことを話した。お母さんは最初、驚いた声を一度だけあげたけれど、その後は、すごく冷静に私の話をきいて、「香ち

やんの状態は、今はどうなの？」ときいてきた。私は、石詰先生からきいたことを、そのまま話した。

「大変ね」お母さんは、深く、ゆっくりそう言った。

「うん、だから、今日はごめん。会えない」

「いいのよ、またゆっくりできるときに会おうね」お母さんは穏やかに言った。

「何か相談したいことがあったら、いつでも言ってきてね」お母さんが言った。

「うん」私は少し考えて、お母さんにきいた。

「お母さん、お金のことだけど、ICUって、一日、幾らくらいかかるのかなあ」お母さんは、しばらく考えているようで、そうねえ、と言っていた。

「細かくは分からないわね。二桁いくか、いかないくらいじゃないかしら」やっぱ結構かかるんだ。私は少し黙って考えた。

「ありがと、お母さん。今日は、じゃあまた」

「ええ、またね、体に気をつけなさいよ」私は受話器を静かに置いた。そして、少しあごをあげて、ふうつと息を吐いた。

私の定期貯金、幾らあったかな。頭の中で大まかに、貯金総額を確認してみた。

おばさん達は、昨日からずっと病院につめているらしいから、私なりに日常生活で要りそうなものを買っていった。

「何も出来ないけど、これだけでも」私が、タオルや靴下の袋を渡したら、おばさんは、ありがとう、と嬉しそうに微笑んでくれた。病院内の喫茶室で、おばさんは、今の香の状況を細かく教えてくれた。

「昨日より、体に反応も出てきたみたいで、このまま良好だったら、あさつてには普通病室に入りましょうか、って」おばさんは、ほっとした表情で話していた。昨日より顔色もいいし、そんなおばさんを見て、私も少しほっとした。今日は晃君と、香の親戚が面会するから、私は香には会えなかった。ICUには、一日二人だけ、十分間の面会だと決められているのだそうだ。

「明日は、私とお父さんが会うから、あさつて、普通病室に移ったら、また香に会ってもらえる？」

「もちろん。病室が変わったら、また教えて欲しいです」私は鞆から、メモ帳とペンを出した。

「私の電話番号と、ついでにアドレスも」急いで書いたら、雑な字になっちゃった。けど、読めるだろう。

「晃君も確か私の番号、知ってると思うし」

「ありがとう、連絡するわ」おばさんは丁寧に、バックの内ポケットに私の渡したメモをしまった。病院の、面会時間終了に近づいたので、私はおばさんと別れて病院を出た。おばさん達は、今日も家族控室にいて、夜遅くまで香を見守る。

家族だからできるんだなあ。いいなあと思っただ。私も香の側に、もっと居たかった。見多氏は、まだ香と家族じゃないから、病院には長くいられないのだろうな。私はこんなときにしか、多分思い出すこともないだろう、あの、見多氏の姿を思い出した。見多氏

も私みたいに、もどかしくしているのだろうな。

その夜は、矢和田と私は、行きつけの和食のお店に行った。鳥の照り焼き定食を口に運びながら、私は香の状況を話した。

「そっかあ、よかったなあ」矢和田も、ほっとした表情を浮かべた。「うん、ちょっと安心した」焼酎を少し飲んで、私は微笑んだ。

「これから、もし、香の入院費とか、経済面で、おばさんが苦しいなら、そっちの方でもサポートしようと思って」お昼に考えていたことを、報告として矢和田に言った。

矢和田がちよつと言葉に間を作った。

「香ちゃんの治療費、敬も払うのか」

「おばさんは何も言っていないよ。私もまだ話していないし」私は言った。

「もし、そんな状況になったら、いつでも援助したいってこと」私は、添え物のおひたしをつまんだ。

矢和田は返事しない。

「何」矢和田が黙るから、少し不安になった。

「いや、敬は、ほんと友達を大事にするんだなあ、って思ってた」矢和田が口を結んだまま、笑って、「いいな」と付け加えた。私は何だか照れてしまった。そのまま二人で、何気ない会話をつづりながら、楽しい夕食を過ごした。

病院の最寄り駅に電車が着くと、私は誰よりも最初に出て、そこから病院まで走った。朝、晃君から電話がかかった。香の状態が悪化した、と。

「とにかく、来て」晃君は、声を震わせて言っていた。香の病状が悪化って、あれ以上の悪化の先には、「死」しか、私には思いつかない。

病院に着いて、すぐに、まず家族控室に向かった。控え室の前でおじさんを見つけて、すぐに声をかけた。私は、相当焦っていた。おじさんは私を見て、「敬ちゃん、大丈夫だよ」と、教えてくれた。香はとりあえず、また安定したそうだった。

「今、先生からきいたから。大丈夫だって」おじさんは言いながら、私を見て、「走ってきたのか、敬ちゃん」と、言って少し微笑んだ。私は乱れた息を整えながら、「よかった」と、きこえないくらいの小さな声でつぶやいた。ほんとに、持ち直してよかった。

「おばさんと、晃君は控室に？」私は控え室のドアを見て、おじさんに尋ねた。

「いや、今、先生と別室で話をしてるよ。晃は、親戚のおばさんと一緒に飯食いに行かせたよ」おじさんは付け加えた。「見多君がいるよ」

おじさんも、話をきくために、おばさんのいる別室に向かった。香には、今日はもう会えないらしい。「今日は、かけつけて来てくれて、ほんとに感謝してるよ」おじさんは、そう言った。

私は、家族控室のドアを開いて、見多氏を見つけた。小さな家族控室に、見多氏一人が、ちょこんと椅子に座っていた。顔を下に向けていたけど、人が入ってきたのに気づいて、ふっと顔を上げた。そして私だということが分かると、「やあ。朝来さん」と言った。

見多氏と、売店近くの自販機のところでコーヒーを買って、そこで少し話をした。当たり障りの無い会話。私の大学生活や、見多氏の銀行での仕事や。話の内容どうこうより、これだけ長く見多氏と話していることに、私は驚きさえおぼえた。それだけ、見多氏と私は、遠く離れた存在だったから。香を通してしか、見多氏を認識していなかった、とも、言えるくらい。コーヒーを飲み干して、見多氏は、ふうつと息を吐いた。疲れているみたいだ。顔が少し青い。「今日は、ほんとに大変でしたね」私が言くと、見多氏は、え？といった顔をした。

「ああ…うん、ほんとに」そう言って、見多氏は控室の方に顔を向けた。

「まだ、控室で待ちますか？」

「ああ、今日は銀行を休んできたしね。朝来さんも？」見多氏は紙コップをつぶして、くずかごに捨てた。

「ええ、おばさんに会ってから、帰ろうと思うので」私も紙コップを捨てて、見多氏と控室に戻った。

控室で、見多氏から、今日、香に何が起こったのか話してもらった。

「香のお母さんと僕とで、集中治療室の香を見てたら、彼女の体が急に揺れだしたんだ」見多氏は両手で顔をおおって、はあっと息を吐いた。

「すぐに主治医が来て、そのまま措置を看護婦と。身震いがしたよ」見多氏は言った。

発作が起きたのか。私の背筋は寒くなった。私は、甘く考えすぎていた。脳外科医の先生から、「目覚めないかもしれない」とまで言われていた香が、いくら今は、安定しているからって。

私は昨日の話で、「これからも安定のはずだ」と思ってた。時間はかかるかもしれないけれど、香はきつと、元気に目を覚ますだろうという、根拠の無い予感しか持ち合わせてなかった。甘過ぎた。私は楽天的過ぎた。香は、『生』より、確実に『死』に近い場所に

いるんだ。

「ちよつと、お手洗いに」私は、涙がこぼれる前に、ここを離れようと思って、控室を出ようとした。控室を出ようとしたそのとき、私の背中の方から、見多氏の台詞が、ぽつりときこえた。

「やってられないな」見多氏が、そう言葉をもらした。

私は体を止めた。今の台詞、見多氏自身、気づいて無いかもしれない。でも私はきいた。とっさの、人の本音をきき逃さなかった。ドアの向こうには行かずに、私は見多氏の方に向き直した。ここから三メートルほど、離れて椅子に座ったままの見多氏に、私はきいた。

「今、何てことを言っただんですか」

見多氏が、きょとんとした表情で、何？ といった表情で、「え」と、言った。

「何が『やってられない』んですか」もう一度、言った。

少し、間が空いた。見多氏自身、やっぱり、無意識で言ったみたいだ。私の質問の意味が、やっと分かったのか。それとも、自分の言ったことを今更に自覚したのか。見多氏が、それこそ、はあ、やってられないな、というような苦笑を私に見せた。その見多氏を見て、私の頭が、すうつと冷める感覚になった。そしてどこかで、血が、こぼりと沸騰するのを、感じた。座ったまま、見多氏は、両の手ひらで、わけの分からないしぐさを始めた。言葉を搜しているようで、あごに手をあてたり離したり。口を微かにゆがませている。「―だって、そうだろう」見多氏が、言い放った。見多氏は苦笑して、眉間にしわを寄せている。そんなに責めるなよ、といったような、どこか懇願しているような表情。見多氏を見て、私の感情の湖に、確かに波が立ち始めた。

「今の香は、何も話さない。僕の話もきこえてないかも。感覚も何もかも無い状態かも。もう起きる保証も……今はゼロだし。つまり、『植物状態』なんだよ」一語一語丁寧に、脈絡無く、見多氏は私に話す。そして、ふい、と、私から目をそらして、悲しさと、わずらわしさを混ぜたような表情で、明らかに別の場所にいる香に向かつ

て、彼は言った。

「これじゃ意味が無い」

「意味が無いって何だ」自分でも驚くほど、声は、大きく、高ぶっていた。

私を見て、見多氏は動じず、冷笑を返してきた。何だこいつは。

私は、気持ちを抑えた。でも、体の震えは止められない。

「香は、生きてるのに」私は、見多氏に言った。

見多氏が、さりとて言いきった。

「生きてる。そう、『生きてるだけ』じゃないか」

数秒の出来事だった。

言葉の代わりに、私の拳が、見多氏をふきとばした。一秒もしない間に、私は見多氏の前に、三步で移動して、彼の胸倉をつかんだ。そして見多氏の左顔面に、無言で渾身のフックをくらわした。私の感情と行動が、スムーズに働いて、見多氏に向かったんだ。私の怒りが、まず、私の脚を動かして、私の左腕を動かして、彼をつかみ、右の拳で見多氏の顔面を殴れと指示した。指示通り、拳は見多氏を完璧にヒットして、見多氏を床に突っ伏させたわけだ。

ほんとに、見多氏は勢いよく床に突っ伏した。倒れ込むとき、側に置いてあった、安定性の悪い、アルミの本棚に手をかけたせいで、それは大きな音を立てて、見多氏の側に横倒れになった。本棚には、ガラスの花瓶も立てられていて、それも、がちやりと音を立て、大きめの破片になって床に散らばった。あまり時間がたたないうちに、看護婦が一人、ドアを開けた。

「どうしたんです」と私達二人を交互に見た。私は何も言わず、ぼんやりと看護婦を見た。見多氏は、頬を押さえて、何が起こったのか、まだ分からないような表情をしている。目をぱちぱちさせて、首を少し傾けて、そのまま床から起きあがらない。起きあがれないか。

その間に、石詰先生とおばさんとおじさんと、それに、矢和田が控室に入ってきた。矢和田。留守電の私の伝言をきいて、来てくれ

たんだ。いつもなら、私はここで、たくさんのことを考える。絶対に考える。香の婚約者を殴り飛ばすということは、絶対にまずい行為で、それをみんなに見られたんだから、絶対に「どうしよう」と焦る。

でも、今日は、この状況で皆を見ても、まだ、少し頭がぼんやりしたままで、それよりも、見多氏の方に思考が一杯で、私は視線をまた彼に戻した。右の拳が、ちりちりと痛くなってきた。反作用の力だ。殴る行為は、殴られた相手も、殴るこっちも、痛い。

「出て行け」私は見多氏にゆっくり言った。

「香の前に、もう現れるな。ここから出て行け」今度は叫んだ。このまま、蹴りもいれてやりたい。矢和田が、すばやく私に近づいて、私の両腕を後ろからつかんで、私を全身で押さえた。諭すように、なだめるように、耳元で、「敬」と、私の名前を呼んだ。呼ばれて、私は、ぼろりと涙をこぼした。泣けてしまった。

見多氏が、やっと状況に対応できるようになったようで、私に向かって、やっと苦々しく、言葉を吐いた。

「出て行ってくれ。僕じゃない。あんたが出て行くんだ」私は矢和田に押さえられたままで。

「僕は彼女の婚約者だぞ」見多氏が叫んだ。だから何だ。矢和田が私を捕まえていなかったら、みんなの前であっても、もう一度、私は見多氏を殴っていただろう。私は、声を震わせて、言葉で見多氏を責めた。

「婚約者なら、どうして、あんなこと言うんだ」私はそのまま続けて叫んだ。

「どんな風になっても、香が好きなら別に生きていてくれるだけで、それだけでいいでしょう」私は、うっ、と体を曲げて、顔を下に落とした。後ろから、私を包んでいる矢和田も、体を少し曲げて、私をそのまま離さない。何であんなこと婚約者が言うんだ。やってられないなんて、どうしてそんなことが言えるんだ。もう、それで頭が煮詰まりそうだった。

車の中で、私と矢和田は無言だった。私が会話を拒否していたから。無言のまま、私のマンションの前に着いた。助手席のドアを開けて、車から降りずに上半身だけ少しのり出して、私は自分のマンションを、何となく見上げた。私のマンションは、ブルーが基調で、やっぱり気分が悪いせいだ、この建物がいつもより寒々しく見える。矢和田が、私の右太腿に触れた。

「向こうのコンビニに駐車してくるから、先行ってて」矢和田は少し微笑んで言った。

私は微笑み返せなくて、無表情で車から降りて、自分の部屋に向かった。余裕が無かった。エレベーターで、私の部屋の階に上がって、鍵を回して、部屋にあがり、矢和田が戻ってくる前に、部屋の乱れているところを簡単に整頓し直した。

十分後、矢和田がコンビニの袋を持って、ドアを開いて、玄関に入った。私は、玄関すぐの台所で、お茶の用意をしていたから、そこで矢和田から、お菓子入りのコンビニの袋をもらって、お礼を言った。

「紅茶いれるね」少し鈍ったままの頭で、私は、やかんに火をかけた。

かけて、奇妙な感じに気づいた。

矢和田が靴を脱がない。

私は、矢和田の行動が分からなくて、きょとんとした。

「敬」矢和田が、うつむいて言った。片手で頭を軽く掻きながら。次の言葉を探しているよう。

「あれは、やりすぎじゃないか」私は、矢和田の言葉を受けて、体がずしん、と重たくなるのを感じた。矢和田が、顔を上げて私の目

を見る。それ以上、何も言ってこない。私の意見を待っている。

「―でも、見多氏が、香のことを、もう、要らないみたいに」

私は、できるだけ、感情を落ち着かせながら話した。

「言って、それで、香のこと……やってられないって」

矢和田が、「分かる、それは分かる」、といったしぐさで、私の気持ちを理解していることを示してくれた。でも、私がやった行為に、納得はしていない。

「敬が香ちゃんを大事に思ってた、ああしてしまったのも、分かる」
矢和田は少し、間をつくった。

「でもな、見多さんは、香ちゃんの婚約者だろ」

「だから？」声が裏返った。矢和田、だから何？

「見多さんと香ちゃんの間、敬は入っちゃ駄目だったんじゃないか」矢和田が、はつきり言った。私の眉間がぴくりと痙攣した。

「二人の関係だろ」矢和田が、困ったように、言う。

「あんな人に、香が邪険にされたのが我慢できない」私は、右手を握り締めて言った。頭は、もうぼんやりしてない。

「私は、絶対、見多氏なんか、婚約者だと認めない」一瞬で、矢和田の表情が変わった。怒っているようじゃない。不思議そうな顔をしている。動揺している。矢和田の視線が定まらなくなっている。

「待て、敬。俺にも、昔からの友人は、いるさ」矢和田が、困惑を含めた口調で、私に言った。

「俺の友達が、こんな風に、事故に遭った経験はまだ無いから、分からない部分はあるけど……想像でも俺は、敬が香ちゃんにするようなことを、あんなことをする感じは……しない」

私は気づいた。

昨日の夜の、香の治療費の話。今日の見多氏への行為。矢和田は全部ひっくるめて言っている。

「友達は、確かに大事だ。でも、敬を見ると、何なんだ、一体――」
矢和田が言葉を詰まらせた。すごく、困惑している。けれど私も困惑していた。何？ 矢和田の言いたいことがつかめない。友達が

事なのが、香が大事なのが、何なの？

「敬、おまえ、俺といるのに。三年間付き合っているのに。なのに、香ちゃんに対しての敬を見てると」矢和田が、もう一度、頭を掻く。大きな動作で。私は、急に、ひゅっと、恐ろしい不安を感じた。なぜだか分からないけど、怖い。矢和田が、私の目を見た。

「レズーなのか？」認めたくないように、矢和田が言った。

私の体が、くらりと揺れる感覚がした。心が動揺したからだ。私は震えてきた体を、何とか矢和田に気づかれないようにしながら、言った。

「違う、と、思う」まずい。言つて、あいまいな答え方を、してしまったことに、気づいた。矢和田が浅く、そして長く息をはいた。玄関はヒーターから遠いから、矢和田のはく息は、白く、目に見える形になって、私たちの間をおよいだ。

「じゃあ、あれは、どう説明できる？」矢和田が、まだ分からないように言う。「見多さんは、婚約者なんだぞ。俺達だって……口約束でも、そう決めただろう」空気が張り詰める。矢和田の白い息が、一瞬、消えた。

「敬。敬は、一体、誰を一番に考えてるんだ」

矢和田！私は、突発的に泣きそうになって、焦つて、涙を抑え込んだ。今、矢和田は、私が一番、きいて欲しくないことを、きいてきた。ずっときかれたら困ると思っていた質問。

本気で、呼吸が止まりそうになった。少しむせるように、息を吹き返して、私は「どう言えればいい」、と頭を一生懸命働かせた。矢和田に早く、何か言うべきなのに、優しい言葉が見つからない。話せない。矢和田が私を見つめる。私の目頭が熱くなってきた。でも、ここで泣きだすのは、ずるい。私は髪に手をかけて、そのまま、手で髪を握りしめた。

泣くなよ。私は必死で涙をこらえた。

私は、矢和田の質問の意味も、矢和田が言つて欲しい答えも、分かっている。『もちろん、矢和田が一番大事に、決まってる』と言

えば、矢和田は安心してくれる。それは分かっている。でも、本音はそうじゃない。だから、この質問は、絶対されなくなかった。でも誤魔化せば、私は、香と矢和田の二人に対して、嘘をつくことになる。両方に対しての裏切りだ。引き換えに、平安は確保できるだろうけど。それでも私は、嘘は嫌。裏切りたくないと思った。破滅するかもしれないと、どこかで予感しながら、私は、言う方を選んだ。「香が誰よりも大事」あっさりと、私は偽り無く、矢和田に告白した。

矢和田の表情が、一気に落ち込んだ。それを見ながら、私は続けた。

「ゆずれない」この一言が、私の気持ちを表現しきった。

十秒なのか、十分なのか、沈黙の中、私はずっと、矢和田を見つめた。矢和田は目線を足元に落したり、首を少し横に傾けたり、言葉を搜してるようなしぐさをしたりして、とにかく、悲しんでいる。悲しんでいる。私が悲しませている。

「―帰るよ」そして矢和田は、ふいに言った。その瞬間、私は、我慢しきれなくなって、矢和田の前で、涙を流した。

「矢和田」そう言うしか、できなかった。

私に背中を向けて、矢和田はそのままドアノブに手をかけた。こちをふり向かない。ドアを開けたとき、矢和田が背を向けたまま、ぼつりと私につばやいた。

「お前が分からない」ドアは、ぱたりと閉まって、矢和田が、遠のいていくのが感じられた。私はそこから、動かなかった。動けなかった。ドアを開けて、矢和田を追うこともしなかった。できなかった。矢和田がドアを閉めたとき、矢和田の心も閉められた。言えばこうなるだろうと、半ば分かっていたいながら、私は、本心を矢和田に言った。私は、確実に、矢和田より、香が大事だ。

閉められたドアを、ただじっと見つづけて、何分経ったのか。私は、徐々に感情が抑えられなくなって、突発的に、嗚咽をはいて泣きだした。台所と、奥の部屋につながる段差の所にへたり込んで、

壁に頭をこすりつけて、泣きわめいた。嗚咽を吐きながら、私は、やっと自覚した。矢和田が、ここまで私の気持ちをかき乱す、そんな存在だったことを、今、痛烈に全身で感じた。そして、もう、うまく働かない頭で、私は怯えだした。今、私は矢和田をなくした。そして香もなくなったら、私はもう立っていられない。矢和田と香が、両方いなくなる瞬間。それが訪れるときを想像するだけで、怖くて、全身身震いがした。

12（後書き）

次から 第二部に入ります

第二部 1

矢和田。心の中で、そうつぶやく回数は、一日何十回だろうか。多すぎて分からない。矢和田が、私から離れてから、もう一週間経った。長い長い一週間。私の心は、あの日から、ぼろぼろと壊れ始めた。

朝起きると、憂鬱な気分で、頭が朦朧としている。眠たいわけじゃない。でもすっきりしない。コーヒーをいれるのも、億劫な感じだ。頭は、いつもどこかで、膜一枚がはりついているような、すつきりしない感覚。身体は、ジムで鍛えているのに、今は、カバンひとつ担ぐにも、深呼吸しなくちゃならない。階段を上るとき、二度はふらついて、その場にへたり込みそうになる。

何でよ。

私はそんなとき、悔しくて、ぐつと歯を噛みしめて、何とか、周りには不調を気づかれないようにしていた。

睡眠時間は、三丁四時間くらい。それだけ寝たら、勝手に目が覚めてしまう。多分、すっかり寝ると、頭が冴えて、矢和田のことを、はつきり思い出してしまうからだ。頭が働かないように、私の心がわざと睡眠をとらないように、そうしてるんだと思った。自己防衛本能だ。でも、それを繰り返していくと、今度は身体が辛くなってくる。限界だと感じたら、睡眠時間が少し長くなる。それで身体が少し元気になったら、また睡眠時間は三時間くらいになる。食事は、ほんとに、必要最低限しか食べられなくなった。少しムリしてでも食べようとしたら、ぺっと吐き出してしまう。口に含んでも、飲み込むことができない。

肝臓が、完全に弱ってるんだなあ。洗面所で、吐き出したチヨコレートを流しながら、そう思った。

そんな睡眠時間と食生活が、そのまま三週間続いた。この三週間の間でも、私は休まず大学に行って、塾講師のバイトも続けた。学

校もバイトも、休むのは嫌だった。恋愛のこじれで、自分の日常生活が全部壊れるのは、我慢ならなかった。

私は、恋愛は生活の一部だと思ってる。生活の一部が壊れたからって、他まで壊すなんて、そんな、なさけないことはできなかった。香に会いたかった。香にも、三週間会ってない。私は、香のいる病院に、行くことができなくなった。

あの後――矢和田が私の部屋を出て行った、あの後すぐに――おばさんから電話があった。私が、見多氏を殴ったことで、見多氏側の親類が、相当おばさん達に、文句を言ってきたらしい。香の友人は、何て乱暴で常識知らずだ、と（このことは、石詰先生から教えてもらった）。おばさんは、私を全然責めなかった。ただ、しばらくは、病院に來ないようにと、言った。

「ごめんね、香に何かあったときは、すぐに連絡するから」私は了解するしかなかった。それから、香の状況は晃君とのメールで、ちよくちよく教えてもらうだけになった。

『姉ちゃん、安定したみたいで、普通の病室に移ったよ』という、晃君のメールで、少しはほっとできたけれど、全然、満足はできなかった。香は、いまだ、起きる気配は見せていないらしい。あの状態で、心臓が止まれば、そこですべてアウト。香は、そんな不安定な場所にいる。全然健康じゃない。

香に何かあったとき、つまり最後のときしか、香に会いに行けないなんて、絶対に嫌だ。嫌でしょうがなかった。でも、こんな状況を作ったのは、私だ。私が感情に任せて見多氏を殴ったから、こんな状況を引き起こしてしまったんだ。殴ったことに後悔は無いけれど、今の状況は、耐えがたく辛い。

私は、おばさん達への申し訳なだけでも、体調を崩しそうだった。おばさん達の、今の立場も考える。香の友人だった私が、婚約者の見多氏を殴ったことで、おばさん達は、どれだけ、見多氏側から批判を受けたのだろう。おばさんが、私が病院に來ることを断るのは当たり前だ。私は、それを思うたび、すぐくおばさんに謝りた

くて、しょうがなかった。

でも、今は謝ることもできない。謝ることが、今回は有効な謝罪方法じゃない。私が今できること、した方がいいと思うことは、余計なことはいしないで、じっとしているだけだった。

分かってた。分かってるけれど……動けないというのは、果てしなくもどかしい。

矢和田にも、香にも、私はもう、何も行動することができない。だから私は、動けないかわりに、他の私生活に精力を注いだ。以前よりも、勉強時間を増やして、バイトも臨時で入り、夜まで生徒と問題集にとり組んだ。ある意味、充実している毎日だった。でも、それが欲求の代替である以上、本当に満たされることはなかったし、いくら嫌だと思っても、心身は、確実に不調になっていった。

大学の図書館で、辞書を探していたら、突発的に目の前がぼやけてきた。

あ、まずい。私は、もうすぐ、自分が泣きだすのが分かった。引き抜きかけていた辞書を、そのまま押し戻して、向こうのブースに置いてあった、私の荷物をかき集めて、何事もないように、周りに悟られないように、できるだけ、ゆっくり、落ち着いたそぶりで、図書館のトイレに入った。

便器の流水音で、私は、嗚咽を、周りにきこえないようにしながら、トイレの小さなスクウェアの中で、へたり込んで号泣した。どの奥から、心臓の鼓動を吐き出すように、「えっ、うっっ」と、泣き続けた。肩は激しく揺れて、痛いくらいに、上半身は力が入りすぎている。でも、足には力が全く入らなくて、立ち上がる気力さえ生まれない。

矢和田も、香も、私の生活の一部になっていて、一部は全体に及んでくる。今日、それを自覚してしまった。

日曜日―図書館のトイレで泣きはらした、次の日―。今日は、いっそう身体が重たい。休日だから、大学も、塾も休みだ。

することがなくて、余計に気持ちが不安定になった。

「何かしないと」そう言いきかせて、ベッドから起きようとしたのに、起き上がれない。どうしてか、身体が動かない。動けない自分に対して、どうしようもない、嫌気がこみ上げてきた。涙がにじんできた。悔しさが全身を覆って、なさけなさが私をけなしだした。

なさけない。何でこんなに私は、なさけないんだ。ベッドに横たわったまま、頭だけ動かして、私は天井を見上げた。悔しいまま、ぼんやりと天井を見続けた。天井は、長方形の板が規則正しく貼りつけられていて、迷路みたいに見える。涙は目じりから、こめかみをつたって、ぱたぱたと落ちた。

「香」声にして、私は香を呼んだ。

「香」今度は、香は助けに来てはくれない。

あ。私の頭の中が、香から、違う人に切り替わった。

お父さん。お父さんが頭の中に、フラッシュバックしてきた。こんなときに。私は余計、辛くなった。

ふいに電話が鳴った。あまりの大きな音に、私の頭が、一瞬はつきりして、身体が、びくりと反応した。私は手を伸ばして、受話器をとった。

「もしもし」

「もしもし、敬ちゃん？」お母さんだった。お母さんの声をきいたら、今度は急に、感情が高ぶってきた。

「石詰先生から電話があったわよ。大丈夫なの？」お母さんが、穏やかにきく。

「香のこと？　今は、安定してるみたいよ」努めて明るく私は答えた。

「敬ちゃん」

「私は、うちは、何にもできなくて、ねえ、お母さん」ああ、だめだ。自分の言葉がおかしいと分かっているけど、修正できない。徐々に感情が乱れてきて、私はまた、ぼろぼろと泣き出した。

「香が、香が死んだら、どうしよう！」私は泣きながら、お母さんに訴えた。

「待つて、今からそっちに行ってもいい？ 行くから、待つてなさい」

「いい、電話がいい」私は、固く拒否した。「ごめん、電話がいいの。このままが。ごめん」

私は、お母さんが気を悪くしないように、「このまま話をしていたいから、電話を切らないで」と懇願した。お母さんは、「そう」と同意して、「一体どうしたの？」とゆっくり尋ねた。

私は、矢和田との別れ以外、すべてお母さんに、話した。誤解が生まれないように、できるだけ、丹念に。

「私は、間違っているのかな？」私は、お母さんに尋ねた。全部話し終えた今は、さっきよりか、気分は落ち着いてきていた。

「正しいとか、間違ってるかなんて、すぐには分からないし、そんなものは相対的なものよ」お母さんは、言った。

「ただ、周りを乱したことは、事実ね」お母さんの言葉は重い。私は何も言えず、見えないお母さんに向かって、うなずいた。

「私は、どうしたらいいの」

「それは、私には、何とも言えないわねえ」お母さんは残念そうに言った。

「敬、でも大丈夫よ。悪意ない行為への誤解は、いつか正しく理解してもらえるときがくるわ。敬はそのまま嘘をつかないで、誠実にしていけば、それだけでいいのよ。香ちゃんを想って、見多さんを殴ったんでしょ。やり方はまずかったけど、その気持ちは、悪いことじゃなかったと私は思うわ」お母さんの言葉は、一語一語が心に沁みる。

「香ちゃんに、何かしたいと思ってるなら、まず、自分を整えなさい。敬が健康じゃなくて、誰を助けられると思ってるの」お母さんがぴしゃりと言った。

「ごもつともです」私は、頭が上がらなかった。というか、一番難しいことを言うなあ、とうなだれた。

「じゃあ、寝て、休んでいいかなあ」私は、涙をぬぐいながら言った。

「そうなさい」お母さんは付け加えた。「疲れてると、ネガティブなことしか、考えられなくなりがちでしょ」確かに。私は納得してうんうん、とうなずいた。

「何かあったら、いつでも言ってきたさい」お母さんが優しく言った。

「ありがとう」私は、感謝を込めて返事して、静かに電話を切った。切ると、部屋は沈黙に包まれた。私は、ばふんと、羽毛布団に、身体をうずめた。急に眠気が襲ってきた。身体も、じわじわ重たくなってきた。気分はずっと気持ちよくなっていた。

今日は長く寝られそう。起きたら、ご飯作らないと。私は、もう朦朧となっている思考回路で、そう思った。お母さんの言うとおりだ。そうだよ、まずは、私が元氣じゃないと。

矢和田の夢も、香の夢も、お父さんの夢も、今日は何も見なかった。私は一ヶ月ぶりに、熟睡というものを手に入れた。

香が病院に入ってから、もう二ヶ月目に入った。おばさんから電話で、「病院に来てくれない」と言われたのは、まだ寒さが残る4月頭の、ある日の朝だった。

病院の中の喫茶店で、おばさんに会った。二ヶ月ぶりで、おばさんは、少し髪の毛が短くなっていた。私は、コーヒーを、おばさんはココアを注文した。

「敬ちゃん、前より髪の毛、伸びたわね」おばさんが微笑む。

「おばさんは、短くなった？」私は笑って言った。気まずそうな雰囲気は、お互いに持ち込ませてなくて、私はほっとした。おばさんが、少し黙って、私に微笑んで言った。

「お昼の一時から、四時まで。いつでも会えるようにしたから」私の、コーヒーを持つ手が止まった。

「この時間、敬ちゃんがいいときは、香に会いに来てあげて」私は、言葉を詰まらせた。ただ、おばさんを見つめるしかできなかった。

おばさんはにつこり笑った。

「こんなに、遅くなつて、本当にごめんなさい。見多さんのほうと、色々相談してたりしたら、こんなに延びちゃってね」そして、申し訳なさそうな顔で、私に問いかけた。

「怒ってる？」怒るなんて。

「とんでもないです」私は、焦つて、バイト口調で返答してしまった。とんでもないです。私の常用語。

「香に、会いに行ってもいいんですか」私は、おばさんの立場が心配できいてみた。

「もちろんよ。香の側にいてもらえる？」おばさんは微笑んで答えた。でも、私は、まだ不安で、おばさんの好意を、すんなり受け入れられなかった。

「でも、見多さんのことで、私、すごく失礼なことをしたし。おば

さん、見多さんから止められていたんでしょう。私が病院に来ることを、見多さんはよく思っていないんでしょう？」

「あの人は一応、婚約者なんだから、いつでも来れるし、ほっといて大丈夫よ」あれ、おばさんの口調、皮肉がこもってる？ 私は、きよとんとした。

おばさんが、私の目をじっと見た。そのまま、少し唇の角を持ち上げて、ちよつと悔しそうな微笑をした。

「きいてたの、実は」

「え？」何を？ 私はいまいち、おばさんの言うことが、飲み込めなかった。

「部屋の外で。あのとき、私、ちょうど控室のドアを開けるとこだったのよ」私は、口を半開きにして、驚いた。「敬ちゃんが動いてなきゃ、私が殴ってたわ」

おばさんは、心底口惜しそうな顔をして、右の拳を、私のあごにちよこんとつけた。

「ずるいわ」そして、にこつと笑った。

私は、あの日の光景を思い出した。あの日、見多氏との口論を、おばさんは全部きいていた。控室の、ドアのすぐ前で。私と見多氏の会話を、やわなアルミの板一枚だけを隔てて、そこでおばさんはきいていた。

あごに微かに触れている、おばさんの拳をそのままにして、私は下向き加減に、「ほんとに、私、いていいの？」と、おばさんに尋ねた。ききながら、自分の頬が熱くなっているのが分かった。

「香には、見多さんより敬ちゃんが残ってくれるほうが、嬉しいの」私は、おばさんの言葉が、心底嬉しくて。今までの苦勞と悲しみは、誤解から生まれてたことに、心底恥ずかしさを覚えた。

私は拒まれていなかった。おばさんは、見多氏へと、多分その一族）から、私を弁解して、香に会えるよう、とりつけてくれた。ずっと私をかばってくれていた。

こんなに、優しくしてもらっていいんだろうか？ そう思えてし

ようがなかった。今のおばさんの一言が、私の気持ちを、大きく建て直してくれた。見多氏への遠慮は抜きで、香に会いに行ってもいい。

見多氏を殴ってから、ちょうど二ヶ月。長い長い二ヶ月だった。「嬉しい」の言葉しか、今の気持ちは表現できない。

「またね」おばさんは、笑って、私を見送ってから、また病院に入って行った。病院の正面玄関の向こうに、おばさんは消えて行く。私は、おばさんが完全に見えなくなるのを確認してから、病院に背を向けて、最寄り駅の方に、歩を進めた。

今日はもう、香には会えなかった。一時から四時までの面会時間は過ぎていたから。でも、晃君には会えた。久しぶりに見た晃君は、髪の毛が明るい栗色にかわって、ずっとカッコ良くなっていた。大学は希望通りのところを合格して、「今、楽しいよ」と笑う晃君を見て、私も嬉しくなった。

「敬ちゃん、見多は俺に殴らせて欲しかったな」晃君は、私が帰るまでに、何度もそう言っていた。ごめんね。あれは譲れないわ。

駅で、切符を買って、すぐに来た、帰りの電車にゆっくり乗り込む。空いた席を見つけて、隣の人に接近し過ぎないように、穏やかに腰を下ろす。今日は、入り口ドア付近の座席の端は、満員だった。私は空いているなら、必ず、シートの端に席をとりたくなる。頭を傾けて、すぐ側にある、鉄パイプの手すりに、頭をもたれさせるのが好きだ。そんな私は、疲れて眠たそうな、OLのように見えるらしい。以前、香につっこまれた。

香の家族に久しぶりに会って、あの穏やかで優しい空気の残り香が、まだ私の全身から出ていっていないのが、分かる。

香は現在、マンションで一人暮らしだ（った）けれど、おばさん達の住む実家とは近くて、週に二度は、三人の居る家に帰るらしい。「家が一番いいわ！」と、香はいつも豪語していた。

私も香の家には、よく遊びに行っていたし、香と、香の家族が一緒に居るのを見ると、香の、あの爽やかな雰囲気は、『ここ』から生まれているんだなあ、と実感した。軽やかで、穏やかで、澄

んだ空気を持つ香の家族。香の家に遊びに行くと、みんな、いつでも私を、ふわりと受け入れてくれた。

ここに慣れたら、自分の家族に帰るのが、辛くなりそう。いつか、そう思ったことがある。でも、「香の家族に加わりたい」と思うことはなかった。

香の家族は、私が入ったり―私じゃなくても、多分、他の人が入っても―したら、私が心地良いと思う、香の家族では、なくなってしまうだろうと、そう思っていたから。私は、香の家族の中に入るときは、「親しいお客さん」の位置をとる。そこ―香の家族の輪の中―は、私が「帰れる処」ではなかった。

だからかな、私は、早く本当に「帰りたい」と思える場所が、切実に欲しくてしょうがなかった。でも、家庭を持つという、「結婚」には、別にこだわりはなかった。社会的に認められている、形だけの場所なら、無い方がラクだと知っていたから。

《結婚したかったから、あの人を選んだんじゃない。あの人を愛したから、結婚したの》私の好きなセリフだ。

欲しかったのは、心から居心地がいいと思える処。そこは、安心できる人が、隣に居てくれる処。

夢みがちな私は、今もまだその夢を描いている。

マンションに着いて、暗い階段をゆっくり歩いて、私の部屋の前に着いた。今日は色々あった。でも、いつもより、気持ちいい疲れを感じている。私はゆっくり、カバンから鍵を出して、ドアの穴に挿した。

挿して、気づいた。鍵が開いている。

私は、無言で、ゆっくり、ドアを開けた。この雰囲気。二ヶ月ぶりに感じる矢和田の空気。部屋の奥の、テレビがきやあきやあと声を上げている。楽しそうだ。それを、ベッドに腰かけた矢和田が見ている。矢和田が私に気づいた。

「よ」矢和田はそう言っ、微笑んで、ゆっくりリモコンでテレビを切った。

「よ」私は、かすれ気味に、そう言うしかできなかった。なさけない返事。

「テレビ、何見てたの？」意味の無い質問しかできない。

「いや、バラエティー番組」矢和田がゆっくり答える。

「そっか……」どうしよう。

「うん」矢和田が私の目を見て答える。ベッドから立って、矢和田は机の椅子に座った。どうしよう、怖い。

「敬」怖い！

「ばあちゃんと話をしたんだ」

はい？

「この前。親父の実家の、福岡のばあちゃんと」要点がつかめなくて、私は目を泳がした。

「おばあさま……」

「俺、ばあちゃんっ子なんだ、知ってた？」

知らなかった。と答えても、意味がつかめない。私は矢和田の言葉の続きを待った。

「俺なりに考えたんだ」矢和田が、少し首をかしげて話す。

「仲いい友達に相談して、親父にもきいて、まだ訳分からないから、ばあちゃんに、話きいてもらいに行つたんだ」矢和田が慕う、福岡のおばあさま。どんな方か、想像もつかない。

「敬とのこととか、俺の気持ちとか。言つたら、ばあちゃん、すごい笑つてな」少し間を空けて、矢和田が言つた。

「そんなに誰かを大事にできる人と恋仲なんて、お前は幸せもんだねえ。つて言うんだよ」

おばあさまの姿は想像できない。でも、きっと素敵なおばあさまだ。

「俺も、それが分かつたから」矢和田が微笑む。ゆっくり、私の目を覗き込んで、矢和田が言つた。

「好きにやってみたら？ 最後まで離れないから」矢和田――

声に出して、矢和田を呼ぶつもりだったのに、私は声も出せずに、その場にへたり込んでしまった。へたり込む前に、もう泣きだしていたし。私は両手で顔を覆つて、無言で泣いた。矢和田は驚いたように、焦つて私の側に来た。

「おーい、敬？」声が私を呼ぶ。ああ、なさけない。返事もできないし、矢和田の顔も見れないなんて。

「あーあ、なさけないなあ」矢和田が、からかうように言つた。

なにおう。私は、ぱつと両手はずして、矢和田の顔を見た。私のすぐ前に、矢和田の顔が見えた。

「ぐちゃぐちゃだな」矢和田は優しく微笑んで、親指で私の涙を拭いた。

「うるさい」私はそう言つて、悔しいけれど、いつそう涙をこぼした。矢和田はなんて、優しいのだろう。もう、矢和田は、絶対私のもとは、帰つて来てくれないと思つてた。

でも、矢和田は帰つて来てくれた。何も動かなかつた、ある種ずるい私の処に帰つて来てくれた。

告白しよう。私は思った。気持ちを落ち着けて、少し涙を抑えて、

私は矢和田の目を覗き込んだ。今、言わなかったら、多分もう矢和田に言う気は起こせない。

「お父さんのこと」私は矢和田につぶやいた。

「お父さんね、事故で死ぬ前まで、お母さんと離婚でもめてたの」矢和田は、正直驚いているようだった。

「……そうだったの」

「言っでなくって、今言っで、ごめん」このことを知ってるのは、香だけ。私は、今まで、誰にもこの話はしなかった。できなかった。自分の中で、解決していない問題だったから。でも、今、矢和田には話したいと思った。

「今、矢和田に言いたいけど、きいてもらっていい？」私は不安で尋ねないわけにはいかなかった。

「俺はききたいけど」矢和田が言った。どこかで、肩の重荷がふつと降りたような感じがした。

「うん」私はできるだけ、丁寧な、感情が突っ走らないように、お父さんのこと、お母さんのこと、つまり私の家族について話した。

私の家庭内は、あまりいい環境とは言えなかった。でも昔は――私が中学生の頃までは――あったかい家族だった。でもそこからは、私の家庭は、坂道を転げ落ちる老人のようだった。

全身を強打しながら、どん底まで転がり落ち続ける、老人。坂道を転げ落ちる老人を、誰も、何も止めることはできなかった。

お父さんとお母さんの仲を壊したのは、間違い無く、お父さんとお母さんだ。でも、きっかけや、それを増長させたのは、お父さんの一族と、家の周りの隣人の人達だったと思う。

お父さんには、もともとお父さんの一族が薦めていた、『見合い相手』がいた。お父さんの一族は、医者一族で。大病院の後継ぎのパートナーは、『しっかりした人』をと、しきりに圧されていたそう。すっかりした人。権力と経済力を持った女性のこと。お見合い結婚と言うより、政略結婚だった。そんな中で、お父さんは、お母さんと結婚を果たした。恋愛結婚で。

出会いは、おじいちゃんの病院の職員控室で。お父さんは、その頃、見習助手を、お母さんは、アルバイトで受け付け・会計をしていた。

どうやって結婚までいったのか、詳しいことは知らない。親の恋愛話は、何となくきくのが照れる。とにかく、大恋愛ではあつたらしい。結婚することを、お互いの両親に報告したとき、両家とも、あからさまに反対した。お父さん側は「上流階級の息子には、上流階級の娘を」、と。お母さん側は、「医者の子は苦労する」と。

それでも二人は結婚した。反対されたまま結婚したのではなく、お互いの両親を何とか説得して、気持ちいい結婚式を行つたらしい。結婚式の写真を見ると、ウェディングチャペルの下、タキシードとウェディングドレスの二人は、とても幸せそうな顔をしていた。お

母さんはとても綺麗だった。

そして一年後に私が生まれた。そのとき、お父さんの一族の人達が、私が女の子だったことに不満を漏らしていたらしい。それから子供は生まれないで、私は一人っ子として育った。お父さんの一族が、「男の子がよかった」と、そんなことを言っているのをきいたとき、私は、なぜだか、悪いことをしてしまったような、妙な罪悪感を持った。それが無くなると、今度は「遺伝子操作はされないだろうか」と、本気で怖がった。小学生の頃だ。カワイイ思い出だ。

家族が嫌な雰囲気になりだしたのは、私が中学生の頃から。

お父さんの病院で、ある看護婦が医療ミスをして、人一人、死なせた。

お父さんの病院は、テレビに映され新聞にも大きく載った。病院の信用は一気に崩れた。近所の人達は、私やお母さんを見て、ひそひそと話をするばかりだった。内容はきこえないけれど、しぐさがあからさま。いやらしい虐めだと思った。その看護婦を雇ったのは、確かにお父さんだ。だからといって、お父さんや、私やお母さんを犯罪者扱いで見るのは、どうなのだろうか。何か矛盾を間違えていたような気がする。

今だから、あの頃の隣人の態度についても、客観的な見方ができるけれど、その頃の、情緒不安定な時期の中学生の私には、隣人のそんな態度は、ただ理不尽に苦しくて、耐えがたいものがあつた。

私だけじゃなく、そんな環境は、お母さんにも大きな悪影響を与えていた。

お父さんは、隣人よりも、病院やマスコミからのクレームで、相当心身を殺がれていたみたいだった。

家の中で、二人が口論する頻度が増えた。内容は、何で？ と思うような、つまらないこと。日常生活の些細なことから、喧嘩。相手のちよつとしたしぐさに対して、言い合い。ぴりぴりした空気が出てきたら、いがみ合う予兆だ。

ほんとにつまらない内容で、二人は口論していた。つまり、それ

らは、言い合う為の『理由』じゃなかったわけだ。それらは、言い合う為の『口実』であって、『理由』じゃない。「病院での一件からの、環境の変化に対するストレスのはけ口が欲しかった」、これが喧嘩の『理由』じゃないかな。私は、まだ中学生で、病院の経営がかなり危うくなっていたことや、裁判の問題とか、そんな詳しい話は、知らされていなかった。お父さんの一族の心無い誰かが、「あんたじゃなくて、見合い相手だった人と結婚したら、経済面で援助が得られたのに」と、電話で母さんに不満を漏らしたことも、その頃は全く知らされていなかった。

離婚しよう、と両親がお互いに同意したとき、私はもう、大学一回生だった。

五年間、お互いに、「何とかしよう」と、もがいてあがいて悩んで、坂道を転げ落ちて、お母さんはノイローゼになった。そうやってまでも、離れようとしなかった二人が出した、『離婚』という結論に私はもう、口をはさめなかった。むしろ、「よく五年間別れなかったなあ」、とどこか他人事のように、不思議に思う気持ちさえ、その頃には私の中に生まれていた。

離婚を決意しても、そのまま書類を書いて、判子をぼんと押して、「じゃあさようなら」、ということとはしなかった。

ここからが、また長かった。

お父さんは、カウンセラーに相談に行つて、まず、お母さんの心の治療を始めた。それに並行して、お互いに新しい幸せな人生を進んでいけるように、お母さんと協力して、『離婚』を進めた。

お父さんは、お母さんの就職口を探して、そこが、良い条件なのかどうか、一生懸命考慮していた。お母さんも、お父さんの風当たりが悪くならないようにと、実家に帰つて、お母さんの家族に話をつけたり、とにかく、そう、お互いにお互いを思いやっていた。

はたから見ると、不思議な光景だっただろう。私も不思議だった。あの頃の――離婚の準備をする――二人は、本当に、相手を優先して考えて、とても穏やかな空気で、仲良かった。「あの時期は、病院のこと、近所のこと、何もかも考える必要がなくなると思って、正直、肩の荷が下りた感じで、ほっとしてた」と、お母さんが、最近、私に告白した。

「お父さんだけを、あの人を一番に見つめることができていたのも、あのときね」とお母さんは言った。

でも、あの頃、二人は離婚をとり消そうとは、言い出さなかった。

言い出したのは、私。土壇場での、最初で最後のワガママを言った。「別れないと、これは解決できないの？」二人を見続けてきて、離婚を着々進める二人の側にいて、どうにも納得できなくなったからただ、とにかく離婚してもらいたくなくて、わんわん泣いていた中学生の頃とは違って、冷静に、客観的に二人を見て、このまま、こんな昔のような良い関係を保ちつつづけるためには、やっぱり離婚しなくちゃいけないのか、疑問に思った。別れなくても、もう一度、家族が直ることはないの？ そう思った。

ま、つまり、客観的だ、冷静だと言っても、なんだかんだいって、私は私の家族がばらばらになるのが嫌だったわけだ。できるなら、あの、幸せだった頃の『朝来家』をとり戻したかった。

私は、お父さんとお母さんが、二人で本を読んで笑ったり、食後のお茶を、緩やかに飲んでいる姿を見ているのが、すごく好きだったから。

私は二人の子供だ。本心から望んで、離婚がいいとは思えないだろう。

私の訴えに対して、二人は、すぐ答えは出さなかった。

「考えてみるよ」お父さんが、優しくそう言った。

お父さんとお母さんは、口だけじゃなくて、本気で考えてくれた。しかし考えがまとまらないなかで、お父さんは出張で、三日間家をあけた。お父さんがいない家の中で、お母さんは、そのまま考えていたらしい。私が大学から帰ると、どこか遠い目をして、物思いにふけるお母さんを見かけた。私は、お母さんから何か言い出すまで、その話題には触れないでおいた。

そして、お父さんが帰ってくる日の前日、お母さんが夕食の席で言った。

「離婚しないで済まないか、お父さんにきくわ」と。

私は心底嬉しかった。

その夜の夕食は二人で厳かにすまし、私はゆっくりおふろに入って、安心からか、ぐっすり眠れた。

次の日、お父さんが早くこの家のドアを開けることを、私は心待ちにした。

でも、お父さんがドアを開けることはなかった。

お父さんは、帰りの飛行機で他の乗客と一緒に、滑走路の果てに墜落して、ここには帰らなくなった。

老人は、どん底に、ずどんと落ちた。

朝、十時頃に電話が鳴る。受話器をとったお母さんの顔が、氷より冷たそうな表情になった。私は、お母さんの顔を見て、無言で驚いたけれど、何事が起きて、お母さんがそうなったのかが、まだ分からなかった。お父さんがそんなことになったなんて想像もつかなかった。当たり前だけど。

小刻みに震える手で、お母さんが、片手で受話器を胸に当てて、もう片手で、側にあったテレビのリモコンをとる。かちりとテレビの電源を入れた。私は、テレビ画面とお母さんを交互に見た。

まず、バラエティーが映った。甲高い笑い声を上げて、部屋がそんな電子音で一杯になる。でも内容は覚えてない。見る暇がなかったから。

チャンネルは、ニュース番組の、お父さんの乗った、飛行機事故の報道に切り替わった。こっちの内容もほとんど覚えてない。じつくり見る余裕はなかったから。暴れるお母さんを抑えるのに、私は必死だった。

一時間で、家の食器棚が二つ倒れた。勢いよく倒れるから、埃よけのガラス戸は、粉々に割れて、床に広範囲に広がった。私は手のひらを、お母さんは膝を切った。カーテンは破れて、花瓶は倒れて、テレビは淡々とニュースをつづける。一瞬のうちに、私の家は、空き巣に入られるよりも、残酷に、えげつなく、荒れた。

でも、私と、とりわけお母さんの心は、そんなものじゃなかった。割れたガラスの破片よりも、粉々に、ぱらぱらになった。それでいて、拾い上げようと触れてくるものには、すばつと切りかかり、血をこぼさせる。人の心は、いつでも修羅になれるんだった。

私達を初めて見つけたのは、お父さんの親友の石詰先生。電話回線が切れていたので、わざわざ家に訪ねて来てくれた。訪ねて来たのが、石詰先生でよかった。先生はすぐに、私達二人に適切な処置

をして、お母さんは病院に入院した。石詰先生が家に来たとき、お父さんのニユースを見てから、もう丸一日が経っていた。お母さんをつかみながら、壁かけ時計の二本の針をずっと目で追っていたから、時間は正確だったと思う。秒針が、規則正しく円を描く。止まることのない針を眺めながら、私は、働いているのか、いないのか、それすら分からないあやしい頭で、どうしてこんなことになったのかと考えた。丸一日、ずっとそれだけを考えていた。

この結末に至った理由を山ほど考えた。考えている最中、お父さんの顔は私の頭から消えることは、なかった。

あの日の私思い出すたび、今でも涙があふれてくる。でも、私も少しは大人になれた。「どうしてあんなった？」今は、「とにかく、あんなった。それだけ」と思えるようになった。とつてつけようと思えば、原因は幾らでも出すことができた。でも、そんなことをしても、後ろ向きなだけで、結局、何も前に進んでないことに気付いた。

だから、「理由探し」はやめた。最初は怒りをぶつける矛先が無くなって、イライラしたけれど、でも、それも越えたら、私は前向きに、ずいぶん元気になれた。

ま、それでも「あんなって、今の私がいる」。そう受け止められるようになるまでには、ずいぶん時間はかかった。かかったよ、ね。

私の顔のすぐ前に、矢和田の広い胸が見える。私は、つぶやいた。
「私もお母さんも、すごく後悔した」

「うん」矢和田がゆっくり返事する。

「お母さんは、『離婚はやっぱりで嫌で、お父さんがまだ好きだ』っていうことを伝えられなかった。私は、二人が憎いくらいになって、いがみ合ってるのを見てるのが嫌で、いつも現実から逃げてた。そんなとき、香が、ずっと助けてくれてたの」

二人が家で、のしり合うのが見るに耐えられないとき、私は香にメールをしていた。香は『そりや参るな』と返事を返してきた。香のメールを見ると、今の状況が、そんな大したことじゃないように思えた。結局最後は、笑ってメールを返していた。

「でも、お父さんが死んでから。変だけど、私も言いたかったことが、たくさん出てきたの。お礼の言葉とか、お父さんの好きだったところとか。お父さんと、もっと話しをすればよかった、って後悔した」

もっと、話しをすればよかった。それはお母さんの口癖にもなっている。

「そついうのって、後にならないと気付かないよなあ」矢和田は言った。

その通りだと思った。私も、こんなにお父さんとの良い思い出があったなんて、お父さんがいなくなるまで、気付きもしていなかった。

小学校のとき、お祭りで、お父さんが浴衣を着て、私と金魚すくいをした。そのときのお父さんは、「医者」のお父さんじゃなくて、私よりも無邪気に、金魚すくいを楽しんでいた。とった金魚は、静かに宇治川に放して、「元気に生きるといいねえ」と言った。

朝ご飯で、私はどうしても、お母さんの作る、ナスのお浸しが食

べたくなかった。いつもむすつとして、絶対に箸をつけなかった。最後までそれを残すのを見て、お父さんが、お母さんがいない間に、ひょいっと、それをつまんで食べた。食べて、「こんなに美味しいのに」と笑って言った。それから、ナスが食べられるようになった。他にも、お父さんとのいい思い出は、幾らでも思い出せる。家の中が荒れだしてからでも、お父さんとの思い出は、綺麗なものがいっぱいある。そう、いっぱいあったのに。

お父さんは、医者には、きつと向いてなかったんだ。優しすぎて、繊細すぎた。普通なら、飄々としていればいい世評にも、耐えられなくて、苦しんで、家庭も一緒に崩してしまった。優しすぎたんだ。そんなお父さんに、早く気付いてあげればよかった。

そんなお父さんは、私達二人の心を、毎日切なくさせた。お父さんとは、突然の死別だし、親類の、ある程度予想されての死別より、ずっと私達の心に、深い悲しみを残した。

だからかな、そんなことがあってから、私は、「自分も周りの人も、いつ死んでも、何も不思議じゃない」という、一種の危機感を持つようになった。今もそう思っている。だから、大事な人には、できるだけ、自分の気持ちを伝えて、後悔がないように、その人を大切にしたいと思った。

「香がいなかったら、今の私は、なかった」私は言った。「きつと、矢和田とも、付き合っていられなかった」

「香ちゃんはすごいなあ」矢和田が、感心するように言った。「敬が誰かに、そこまで固執するのって、香ちゃんだけだよなあ」

そうかな。私は矢和田を見た。矢和田にも、充分固執してるけどなあ。

「今から、後悔のないようにしたいよな」矢和田が私の頭をなでた。

「私は、香に何ができるかな」

「話したら。今、敬が言った通り」

「え」

「香ちゃん、喜ぶと思うぞ」

9（後書き）

次話から第三部にはいります

第三部 1

二ヶ月ぶりに会った香は、こんなに綺麗だったかな、と思うほどだった。目を瞑ったままの香を見て、泣けるくらいの愛おしさがこみ上げてきた。二ヶ月。長かったなあ。

香の病室は、普通病棟の小さな個室で、ICUのとき程じゃないけれど、身体にはまだ、たくさんのコードが全身から伸びていた。その先には、それを感知して動く心電図が、規則的な音をたてて、静かな病室全体に響く。単調な電子音は、私には一種の音楽のようにもきこえた。

命のリズムだ。私は思った。香の命の鼓動は、まだここに存在している。呼吸器も、そんなに大げさじゃないし、香も辛そうな顔をしてない。

私は香の顔を眺めた。閉じられたままの香の瞼が、微かに、震えている。両眼に反応があることは、おばさんからきいていたから、それが確認できてほっとした。ただ、香自身で目を開けるような、意識のある行動はまだないそうだ。

「手にも反応はあるのよ。握ったら微かに指先が動くの」おばさんは言っていた。私は、今日は両手が布団の中に収まっているから、触れずにそのままにしておこうと思った。反応があっても、それがただの『反射』としての反応なのか、どうなのかは、まだはつきりしていないのも、石詰先生からきいてあった。私がここに、香の隣にいないことを、今、香は感じているのだろうか……？

「……ま、そんなことはどうでもいいよな」私は少し頭を掻いて、そんなことは脇に置いて、香にまた会えたことを、とにかく感謝した。ほんとに感謝し尽くせないくらい。椅子を引いて、香の眠るベッドの側に据えて、私はそこに座った。

「久しぶり、香」香と会うときの決まり文句。久しぶり。この言葉

は、言うのも、言われるのも大好きだ。久しぶりには、「会えなくて寂しかった」のニュアンスが込められている気がするから。三日会わなかったら、私達は「久しぶり」を使っていた。

今日初めて入った香の病室。ここは本当に穏やかな空気に包まれていると思った。時間の進む速さがここだけ遅れているような。使っている消毒液においも、ここなら浄化されて、何か、花のにおいに変わっているようにも思える。香が居るからだ。そう思った。「眠ったままでも、『香効果』は顕著に表れるよなあ」私はつくづく感心した。

足を組み替えて、腕を前に組んで、私は静かに、香の顔を眺めた。あれ、そういえば。香の顔をこんなに、落ち着いて、ずっと眺めることができるのは、初めてじゃないかな。香と会うときは、たくさん話をして、遊んで、動き回って、ふざけあっていた。お互いに、表情がころころ変わって、じっとしていることは少なかった。だから、こうやって、一方が一方をじっくり眺めたことなんて、なかった。私は、見多氏を思い出した。見多氏。見多氏はこうやって、香の寝顔を、誰にも邪魔されずに眺める機会を、何度手に入れていただろう。恋人の特権のひとつ。そのときの香を見ていて、見多氏は何を感じていたのだろう。私は思った。香と、そうしていたのに、あんな言葉を吐けるものなのかな。……見多氏にしては、吐けるものなんだな。

考えることじゃないな。私は思考を切って、頭を香の方に戻した。「よし」

ベッドの端から少したれた、布団を整えて、丸椅子にかけ直した。私は香に向き直す。

「さて、香。何から話そうか」私は香との思い出を、丹念に綴り始めた。

香との出会いは、小学四年生の頃。香が徳島から転校してきたことから始まる。転校してきた当時、香は、私のいる「仲良しグループ」には入らなかった。だから、最初の頃はほとんど話はしなかった。でも、私の通った小学校は、小規模だったから、毎日、顔は合わせていた。「おはよー」と言い合う位の仲ではあった。好きでも嫌いでもない。そんな「知り合い」の関係だった。

小学校卒業近くになると、グループも変わってきて、私は、時々香の家に遊びに行くようになった。「仲良し四人グループ」の一人として。いつから私と香を含む、四人グループができたのかは覚えてない。分からないと言った方がいいかな。「仲良しグループ」っていうのは、本当に、いつのまにか、流れでできていくモノだと思う。

中学校に入学して、初めて香と同じクラスになった。そして、同じ陸上部に入った。香と二人で話すようになったのは、この頃からだ――

今日はここまでだった。

面会終了時刻がきたので、私は、名残惜しい気持ちを抱いたまま、病室を出た。

「また、来るから」そう言うてから、病室のドアを静かに閉めた。閉めて、私は額を、こつんとドアに当てた。そのまま数秒、ドアの向こうの香を思った。他の人に見られないうちに、ドアから離れて私は下の階に降りようと、エレベーターの方に向かった。一階に着く前に、【2】のランプが点灯した。もうすぐ誰かが乗り込んでくるのが分かった。乗ってきたのは石詰先生だった。

「先生」

「お、敬ちゃん！」石詰先生は、たくさんのカルテを片手に持って、私を見て笑った。

「ちょっと、これを出してこなくちゃいけないんだ」石詰先生は忙しそう。苦笑いをして、疲れを隠した。

「私はもう帰りますし。先生、お疲れ様です」エレベーターから出て、廊下で少し話した。先生がきいた。

「今日は布瀬さんに会いに来たの？」

「ええ」私は微笑んで答えた。

「お昼の一時から四時の間。あんなことしたのに、香のおばさんが話し、つけてくれて、会えるようにしてくれたんです」

「そっかあ」石詰先生の顔がほころんだ。「良かったなあ。まあ、ここだけの話、婚約者も、どうかと思っただし、俺もね」

私は何とも言えなくて、下を向いて少し笑った。

「評判悪いですねえ、見多さん」

「まあ、隠し事は、あんまり好い気はしないのは、当然だろう」私は、話にくい違っていることに気付いた。

「何のこと？」先生は、あれ？ という顔をして、「いらぬことを言っちゃったかな」という感じで、目線を泳がせて、むくつと顔を曲げた。「これ以上きかないでくれ」というサイン。問い詰めるのは、かわいそうだと思ったけれど、私はしつこい性格だ。きかずに帰れない。

でも、結局は同じ内容を、二日後におばさんからきくことができた。

香の面会の後、おばさんと一緒に、病院の食堂でご飯を食べた。

さばの煮物をつまみながら、おばさんと話をしていて、その話題が出てきた。おばさんは、怒り任せに言うんじゃないかって、『もう、過ぎたこと』のように、ある意味、報告として、私に教えてくれた。話は、香が階段から落ちた、あの日の銀行でのこと。見多氏が言っていた、最初の状況には、嘘があったらしい。

「見多さん、自分は下にいて、香が上で仕事してた、って言うていたでしょう。本当は、最初、二人で二階にいて、そこで口論になっていたらしいの」食器ののったお盆を横に置いて、プラスチックのカップで、お茶をゆっくり飲みながら、おばさんは話を続けた。私は、ご飯が食べきれなくて、食器に食べ物を残したまま、おばさんの話をきき入った。病院のご飯は、残念だけど、食欲を削がれる。

おばさんがきいた、見多氏からの告白の内容をまとめればこうなる。あの夜、見多氏は、最初の話では、一階で、その日の決算が合っているかチェックをしていた。そのとき、階段の方から、大きな音がして、駆けつけたときは、もう香は下まで落ちていて、意識が無かった。これが、見多氏が私達に報告した話だ。

でも、違った。見多氏と香は、その夜、銀行の二階の部屋で、最初、話し合いをしていた。結婚について、意見のくい違いがあったらしい。

日どりや、呼ぶ人、結婚式の規模、予算。見多氏の希望と、香の希望が正反対で、少し口論になったそう。お互いに意見を譲らなくて、口論が激しくなりそうなのを予感して、見多氏の方が頭を冷やすため、一階に降りて行ったらいい。見多氏が降りてすぐ、香も部屋から出て、階段の方に向かったらしい。見多氏と仲直りをしよ

うと、話しをしようと、急いで階段を降りようとした。そして、暗がりでは気が付かなかった、床のぬめりに足をとられて、そのまま、階段から落ちた。後は、見多氏の言った通り。彼はすぐに病院の救急センターに連絡をして、香をそこに運んだ。

そして、今、こうなっている。

「これは、もう、何も言えないわ」おばさんはそう言いながら、涙ぐんでいた。おばさんの声は、話している間ずっと、少し震えてて、かすれ気味だった。

「どちらが悪いとも言えないわよねえ」ぐつと口の端を持ち上げて、おばさんはいつもの笑顔を見せた。石詰先生は、見多氏がおばさんに、泣いて謝っていたのを見た、と言っていた。おばさん曰く、見多氏が最初から事実を言わなかったのは、当人同士の口論の結果、こうなってしまったと思われて、香と縁を切られるかもしれない、そう思うと、怖くて言い出せなかったそうだ。事実をきいて、おばさんは見多氏を許して、見多氏のことは、まだ婚約者として見ている。

「香のことが、それだけ大事だったから、ああやつちやつたんでしようねえ」おばさんは、「複雑だわ」と言葉をもらした。確かにそうだろう。私も同じだ。香を失いたくないために、彼は事実を隠した。香が大事なのは、本当だったとしても、そのためには嘘もつける見多氏。そこには見多氏のずるさが現れてる。おばさんの複雑な心境は、そういうことだろう。

でも、私は、それとは別に、見多氏に対して、不安な感じを持った。不信と言った方が、ちかいだろうか。

香と縁を切られなくて、それが怖くて、事実を隠していた見多氏。それだけ香を失いたくなかったのに、香が昏睡状態になったら、軽々と彼は、香に向かって、「やってられない」と、言い放った。人の気持ちに移り気なのは知ってるけれど、数日で、ああも変わってしまうのかな。見多氏の心境の変化には、ただただ驚くばかりだ。

ぬるくなつたお茶を少し飲んで、私は少し目を細めて、考えをまとめようとした。

変わってしまうものなのかもな。

もう、そう思うしかない、私は判断した。やるせなさと、悲しさと、責めたい気持ちは胸にしまつて、この話は、もう忘れようと思った。おばさんも、見多氏を許しているんだ。

食堂を出て、おばさんとはロビーで別れた。

「敬ちゃんまたね。身体には気をつけて」おばさんは、微笑みながらそう言つて、また香の病室の方に向かった。私は、おばさんが廊下の角を曲がつて見えなくなるまで、その場でおばさんを見届けた。私はロビーの、病院にしては立派なソファに腰かけて、どこを見てもなく、ただぼんやりと、しばらくここに留まつた。病院はもう、診察も面会も終わっているから、病院全体が薄暗くなつていて、私が今いるロビーも、転々と小さなライトがほの暗く点いているだけだ。薄く光るライトに床が照らされて、床に触れている私の靴とその先にある足首が、そのまま、さかさまに床に映る。揺れない水面に乗つたなら、こんな風に映るのかな。暗い床に、足が四本。するりとそこに映っている。

気付けば、ロビーには私しかいなかった。あたりは静かで、耳鳴りが起りそうなくらい。この温度は適温で、薄暗い中で、これといって目を凝らして見るものもない。このような状況は、五感への刺激を極端に乏しくしてくれる。そうになると、私の感覚は、外側からの刺激より、内側の刺激に敏感になる。私の、ぼんやりしていた頭が、徐々に働きたした。

忘れようとしても、忘れられない。見多氏の、あの、嘘。石詰先生とおばさんから、彼の話をきいて、私は見多氏のことが一層解らなくなった。見多氏は、どこか矛盾している気がする。どうしてだろう、見多氏が気持ち悪い。何なんだろう、私は座っていて、足元が『危うい』感じを持った。病院の、鈍く光るフロアに、うつすら

と映る私の足。私の、その両足が、そのまま床に吸い込まれて、吸い込まれながらどろどろと、溶けだすような、そんな感覚が足先から頭まで、ぞうつ、とうごめいて、そして一瞬にして逃げて行った。私は、背筋にその、ぞぞうとした、気持ち悪い余韻を残したまま、宙全体を睨んだ。

香との面会は、今日で三回目。今日も香の病室は穏やかで、私は、香がそこにいることでの安堵感を今日も強く持つ。今日は、香との中学校生活を過ごした話をしよう。

「この前までは、確か中学校に入学して、一緒に陸上部に入ったところまで話したよな？」

もう少し先に進むかと思っていたけれど、なかなかゆっくりだ。話しだすと、忘れていた記憶がよみがえってきて、膨大な量になって、私も正直驚いた。記憶なんてあいまいなものだ。香との思い出は、私が認識していた以上に、濃くて、深かった。

陸上部では、香は短距離。私は砲丸・円盤投げになった。顧問の先生が、部員それぞれの能力に応じて、種目を決定する方針だった。まあ、私は瞬発力がなかったし、肩の強さを生かした競技に充てられたのには、納得するしかなかった。ただ、砲丸投げは、つまらなかった。

「砲丸投げって、陸上で一番マイナーな競技だと思わない？」私は香に尋ねる。

「あれよ、だって、フィールドの隅のすみで、半径１メートルの丸の中で、円を縁どるみたいに、砲丸をかついだまま、ステップ踏んで、『うりやつ』って鉄球を飛ばす、だけなんやで。しかも夏場の鉄球は、ほんとに熱いんよ、これが」話しながら、陸上部の風景を思い出す。季節は夏だ。夏が一番きつかった。今、私の手が、妙にちりちりとしているような気にさえた。

「ほんとに熱いんやで」もう一度、香に念を押した。

私の中学校は、どちらかといえば、田舎なところにあつたから、周りは木だらけで、セミがやたらと五月蠅かった。暑い中で、低音の『う、いいーん』という声をだされると、少なからずイライラ

してしまう。砲丸投げの練習場所は、短距離の練習場所と比較的近かった。時々私は、短距離の方を眺めた。短距離は、見ていて、華があった。

「香が、フライングしてるの、見つけたときもあったよ」私は、思いつき笑いをした。

「クラウチング・スタートって言うんかなあ。あれは」香の走る姿は、京都独特のうだるような夏の蒸し暑さを一掃してしまうほど、綺麗で爽やかなものだった。

記録を測るときの、本気の香の走りは、今も印象的だ。スタートラインに短距離選手が五人並ぶ。香は、ゴールに向かって、右から二番目。ゆっくり、すべるように、スタートラインに顔を近づけ、フォームを固める。誰かが、ピストルを、晴れた空に向けて挙げる。一瞬、間が空いて、ぱーんと空気を貫くような、爽快な、乾いた音がグラウンドに響いた。

音が消える前に、選手達はもう、走り出している。香は、短い髪をさらさらと揺らし、腕と脚を見事なまでに、機械的に動作させ、ゴールに向かって走る。軽く顎先を上げて、遠くを眺めるような表情は、未開の土地へ歩を進める、旅人のもののよう。香が見ているその先の視界を、私も一度でいいから見てみたいと思った。ゴールした後の香の表情は、微笑が浮かんで、周りの空気を浄化しているみたいだった。そんな、澄んだ香に魅せられて、私は素直に、香は「綺麗だ」と確信した。

その頃からかな、学校で香を見かけると、つい、目で追ってしまうようになった。

「私はねえ、足がとことん遅かったから、香の走るところが、最高に見て良かったな」苦笑を含めて、香を誉める。毛布の下、今は隠れている、香の足を眺めて、私はもう一度誉めた。

「あの走りは、うちの憧れだったんよ」おっと。

言って、誤解がないように、もうひとつ、付け加えた。

「でも、走らなくても、香は爽やかよ」そう、何をしていなくても、

香は今も爽やかで、穏やかに、私を癒してくれる。

大学の、矢和田の研究室で、コーヒーを飲みながら私は自分の過去を話す。

ドアには『不在』のパネルがかけてあるから、他の学生は入ってこない。一応、矢和田と付き合っていることは、大学では内緒にしてある。

「中学校卒業間近は、お父さんとお母さんの仲の悪さが、過度に露見してた時期だったの。家の中、荒れるわ荒れるわで。私にあたったりもしたし。もう、家に帰りたくない、って思い詰めるときもあったなあ」

「ーそっか」矢和田は、少し微笑を浮かべて、私の話をゆっくりきいてくれる。

今だから、こうして矢和田に話すことができる、私の過去。それだけ、私の中で消化されて、「思い出」になったということだ。でも、矢和田だから、こうやって話すことができるんだと思う。矢和田以外の人に、この話をする気は、今のところ起きない。矢和田にも、以前は話す気はなかった。妙に同情されるのも、秘密を握られるのも、嫌だったから。

話しながら、私は思った。結局、私は周りをどこかで怖がって、信用してないんだ、きっと。他人に対して、私はいつも、どこかで有刺鉄線を張る。だから、これは進歩だ。矢和田には隠さず、きいてもらおう。そう思えるようになったのは、私にとっての進歩だ。

陸上部も引退して、三年生の秋から本格的に、高校の受験勉強を始めた。放課後、強制下校の時間ぎりぎりまで、私は学校で勉強をした。学校を出るのは、大体、夕方六時頃。そこから自転車で三十分かけて家まで帰る。秋から冬に近づくと、日が沈むのも早くなつて、帰り道は、暗い歩道を走るようになった。いつだったか、帰る

途中、信号待ちでおもむろに、私は空を見上げた。その日の空は、雲はなくて、星がばらばらと見えた。星の光以上に、月が、冴えるような白い光を反射させていた。その夜の月は、たまたま満月で、地表近くの冷めた空気と、上空の澄んだ大気から顔を見せるその月は、なぜか不思議と儚くて、私の心は、急に切なく哀しくなった。

その月を見て、そのとき私は、「このまま、どこかに行ってしまういたいな」と、思った。ごく、自然に、そう思った。ハンドルの方向を変えて、そのまま、違う道へ。どこかへ行ってしまういたい。そう思う夜だった。結局、そのまま、家に帰ったけれど。

「結局、そのまま、家に帰ったんだけどね」私は、自分が少し泣きそうなのに気付いて、コーヒーを長く飲んだ。矢和田は、何も言わないで、私を見た。その、気詰まりのない、穏やかな沈黙に気持ち満たされて、私は、矢和田に感謝した。ありがとう、今日、話せてよかった。

大学で、矢和田と別れてから、私は寄り道をしないでマンションに帰った。部屋に着いて、時計を見たら、午後七時過ぎで、八時から始まる塾に間に合うように、スーツに着替えて、髪をくくった。冷蔵庫を開けて、食べ物を見た。見ても、あまり食べたいとは、やっぱり思えなかった。とにかく、生徒には元気で話せるように、適当に、炭水化物をつまんで、頭が働くように準備した。

香が眠ってから、私は、ご飯があまり美味しいとは思えなくなった。矢和田と食べるときは、美味しいと思えるけれど、以前とは全然違う。「食いたい」という、食欲自体が減った。何となくだけれど、香が食べてないのに、私が食べるのが、どこか辛くて、申し訳ない気がしている。とにかく、悲しいんだ。精神的に参つてくると、私はまず、物が食べられなくなる。拒食症にはならないようにしないと。そう言いきかせているから、食べているだけだ。お母さんが

前、言ったように、まずは私が元気でないと、何も始まらない。
「よし、行こう」私は、気持ちを持ち上げて、部屋の扉を外側から
閉めた。

日曜日、香の病室に行く前に、私は石詰先生に会いに行った。日曜日だから、先生はまだ、時間に余裕があるはずだ。先生は手土産のパウンドケーキを、すごく喜んでくれた。先生は、ゴマ入りが好き。

「お茶を淹れよう。まだ面会時間まで間があるだろう」

「はい。ありがとうございます」私は職員控室のソファで、先生がお茶を淹れるのを待った。やっぱりここはちよつと、気詰まりするけれど。先生は、早速、ゴマケーキを切って、お皿に載せてきてくれた。自分が作ったお菓子を、誰かが私の目の前で食べるのも、誰かの前で自分が食べるのも、どちらも、なぜか照れてしまう。でも、先生が満足げにケーキを食べてくれるのは、嬉しい。

「布瀬さん、面会してて、どう？」先生が尋ねた。

「見た感じは、変わってない気がしますね」私は残念だけれど、答えた。

「うん。俺も、診察してて、やっぱり、顕著な変化は見つけられなくってね。でも、このケースは、本当長期戦だからね」

「うん」おばさんも先生も、私も、長期戦は覚悟してるし、嫌だとも思わない。ただ、香がどこまで耐えられるのかが、一番心配だ。

「階段から落ちて、こんな風になる事例って、結構あるんですか？」私は、何となく先生にきいた。

「布瀬さんは、打ち所が悪かったんだな。二度頭を強打して、側頭部なんて、階段の角にぶつけたみたいだね、鋭い外傷も見られたよ」「二回頭を打ったの？」初耳だった。

「そりゃ、一番上から、転がるように落ちたからね、二度打って当然じゃない？」先生が、弁護するように言った。流石、先生、私が言いたいことを、何となくでも感知している。

「敬ちゃん」先生が先手を打った。じつと私の目を覗き込んで、先

生は重たく言った。

「映画じゃないんだぞ」

「先生は、そういう可能性はゼロだと思うの？」私は、簡単には譲らなかった。

「この数ヶ月の間で、警察も、事故現場をちゃんと調べたよ。主治医として、報告書の一部も見せてもらったし、俺は事故だと納得してる。もし、仮にだ、押されて布瀬さんが落ちた場合、身体の打撲の仕方とか、落下地点とか、指紋の残る場所とか、全部が今とは違ってくる」

「じゃあ、香は、自分で階段を踏み外したって、ことですね」私は念を押してきいた。

「そうだと思う」先生は自信を持って、答えた。

「じゃあ、こっちはどうだろう。」

「先生」私は先生にもうひとつ、きいた。

「見多さん自身、先生から見ても、どう？」

「敬ちゃん」先生が困った顔をする。

「俺の専門は、脳外科兼、臨床心理であって、プロファイリングじゃないんだよ」

「分かってます。心理学者の立場から」私は少し、ねだるような、上向き加減の目線で、先生の意見を待った。先生は、真面目な顔になってしばらく黙った。そして、ひとつ小さなため息をついて、一言だけ答えた。

「まだ何か、隠してるね」

香の病室に着くまでに、密度の濃い話を先生と交わしたせいかな、病室のドアを開ける前まで、何となく、体と頭が重たくて、だるかった。でも、ドアを開ければ、その気分も切り替わって、幾分、ラクになった気がした。香は今日も同じベッドで、静かにそこで、眠りにについている。私はゆっくり香に近づいて、ベッドの横にたどり着いてから、

「よ、久しぶり。元気だった？」と、いつもの挨拶を交わした。

「君の彼氏は、何なのかなあ」私は、少し、かしげるしぐさをしながら、ちよつとふざけるように、香にきいた。あの夜の出来事の全ては、香と見多氏しか知らない。私が憶測してもしょうがない。

だから、ここに来たら、香との思い出話だけを綴ろう。

「さ、今日はどこから話すかあ」気持ちの切替は、昔よりは大分早くなった。香の前で、悶々と分からないことを悩んでいても、しょうがないだろう。

そうして今日も記憶を綴る。

中学生の頃は、家のごたごたを、香には言ったことはなかった。香にも、誰にも言わずに、自分の中に、気持ちを押しとどめてばかりだった。

「中学の頃から、家の中、結構荒れてたんだけど、でもね、香といると何でかな、すつごくラクだったんよ」今日、初めて香にそれを告白できた。香は、眠ったまま、私の話をききつつける。

本当にそうだった。香といるとき、私の家庭の悩み事は、それが一時的だとしても、どこかへ消えてしまっていた。それを無意識のうちに感じていたのか、私は時間があればすぐに香の側に行つて、二人で何でもない、お喋りを繰り返した。

あの頃の私は、周りとの付き合い方が下手すぎた。香にべつたりの関係になっていた。

「矢和田にねー、そのことを、一昨日話したんよ。そしたら、『そんなに、べつたりだったの?』ってきき返されたよ」私は、矢和田の不思議がる姿を思い出して、ちよつと、むくとした顔を、香にして、見せた。

「あの頃、香は、私のこと、うつとうしくなかった?」いつか、「うつとうしかった」と言われたら謝ろう。そう思いながら、私は香の頭をなでた。

中学生の頃は、はたから見ても、私は相当、香にべつたりだったと思う。後輩から、「先輩達ってレスなんですか」と冗談半分にきかれたこともあった。とにかく私は極端で、話したくない人とは、絶対話さないで、香とばかり話をしていたから。香に話したいことがあれば、すぐに行つて、話を続けた。そんな私の接し方が、よろしくないことに気付いたのは、中三の春。大勢の部員で、わいわい話していたとき、誰かが、「親友って、誰だと思つて?」といった質問を、おもむろにした。私は、軽く、「香やね」と言つたとき、

香はあいまいな表情をした。そして「そうよ、そうしとこう!」と言った。何気ない、一連の会話。

動揺していたのは、多分私だけだったろう。

「しまった! っと思っただね、あのとき」私は、眠る香の前で、しみじみとそう言っただけ、また、あのときの恥ずかしさを、ありありと思いついた。ものすごく一人百面相みたいなアクションをとりたくなかった。

そのときから、香への接し方を、考え直すようになった。

香に、意見を押し付けてはいないか? 私ばかりしゃべっていないか? きつい口調になっていないか? ……

それらが全部当てはまっていた、私はまた、すごく恥ずかしくなっていて、反省したのを覚えている。

「前よりかは、大分ましにはなったかな?」私は香にきいてみた。以前から何度か、香に同じ質問をした覚えがある。「よく今まで、うちと友達でいてくれたよなあ。中学のときなんて、もうダメダメやったやん」と。香はそう言うたびに、くすくす笑うだけだった。

でも大学三回生の頃、またそう言ったとき、香に、「いやいや、今だから言うけど、あの敬ちゃんらしさが大好きやったんよ」と言われて、本当に驚いた。短所が長所かなんて、相手のとり方次第で、決まるものなんだなあと思わされる一言だった。

親友と思える香の、親友になりたかった。

香を大事にしたいと思う気持ちは、時を重ねる毎に、強くなっていた。香を大事にすると、どうしてか、私は気分が落ち着いて、香と一緒にすることで喜べたときは、一人で喜ぶよりも、ずっと幸せな気持ちになった。

高校は、同じ学校を受験して、一緒に合格した。高校までは、バスで三十分かけて行く。学校の最寄のバス停から、さらに二十分歩く。毎朝、降りたバス停から、学校まで、香と二人でとりとめのない話をした。昨日のテレビの話題。学校生活。部活の話とか、とにかく色々。部活は、香は何にも入らないで、私は、テニス部に入っ

た。私は、香もテニス部に入って欲しかった。

「何回、テニス部に入ろう！って言っても、嫌だよ！って断ったよなあ」

私は、香の顔を見た。実家から持ってきた、高校のアルバムをめくりながら、香に話しかける。

引退試合になった、春の大会の応援席に、香がちゃんと居る写真が一枚。

高校生になったら、のんびりしたい。香が部活に入らなかった理由は、それ。残念だと思いながら、香らしい決め方だと思った。どこか、年寄りくさいというか、無理しない主義というか。

私とは正反対で、いつも穏やかで、のんびりとした空気に住む、香。家族円満で、弟の晃君とも仲良しで、二人が歩いていると、恋人に間違えられたこともあったそうだ。よく、家族四人で旅行に行つて、その話を、お土産のお菓子と一緒に香からきいて、私は、ねたましいとか、うらやましいと思ったことはなかった。

ただ、家族は、もういものだと思つていたから、そのまま、香の家族が仲のいい家族でありますようにと、一人願つた。「香と香の家族はそのまま」という思いだけが募つた。実際、私の心配は、ずっと気苦労に終わつていて、それが嬉しい。香の家族は、今もみんな仲良いし、それを見ていると、ほつとして、暖かな気持ちに包まれる。

ただ、香は、今は眠つてしまっているけれど。

「な、香」私は優しく、香の頭をなでた。「……」そのとき、私の頭の中に、ふつと記憶のひとつがリプレイした。

後輩に、「レズビアンなんですか？」と言われた話だけれど、実は私自身「そうなのかしら」と悩んだ時期があった。

でも、それは大学生になって、矢和田と付き合ってから、「やっぱり違った」と分かった。

同性愛を軽蔑視していて、無理にそう思い込んだとかではなくて、単に私はレズビアンではなかったと分かっただけのことだった。ただ、私の中で「友人」と「恋人」の境目は、とてもとても低いものだという自覚にはいたった。

少し前の話。

「本当に好きな人と『恋人』になるか、『友人』になるかの違いは？」大学で一度、こんな論題で討論したことがある。

「まずは、ときめくかどうかでしょう」何人かの学生は、そう主張した。そんな意見もありだけれど、私はそれだけじゃないのだと思っ

た。恋人になれるか、友人になれるかの違いは、「自分が相手と、どんな関係を築いていくかの、方向性の違い」だと思う。

自分が望む関係を、相手も受け入れてくれる。またはどちらかが相手の意向を尊重して、多少自分の意向とは違うとも、その関係に納得する。それが安定したとき、「恋人」ないし「友人」になる。私はそう思った。

そんな私の稀有な意見を、教授もゼミの人たちも、いまいち、ピンと受けとってくれなかったらしく、「面白いことを言うね」という、おざなりのコメントで、きってしまった。

別にいいけど。でも、私はこの意見は変えるつもりはない。だって、経験から、そうとしか思えなかった。香と矢和田と一緒にいて、私には、これが一番しっくりくる答えだった。大好きな親友、香がいて、大好きな恋人、矢和田がいて、二人のことを、くるくる考え

ていたら、「どうして私はこっちが親友で、こっちが恋人になったのだろう」と、時々困惑することだってあったのだから。

ま、そうになると、確かに最後の決め手は「ときめくかどうか」になるのかも知れない。でも、香といっても、すぐく舞い上がっちゃうときもあつたし、矢和田といて、すぐくすぐく落ち着く時間もたくさんある。

だから、今でも正直、分からない心境になるときもあるの。二人といると。だから、あんな答えが出てきた。

こんな心境で、人と付き合っているのは、私だけなのかな。みんな「恋人」と「友人」を、ばつさり分けて考えられるのだろうか。分けられるということは、はじめから、「こっちの方が大事にする人」って思っているのかな？

たいてい、私の友達は、「恋人よりも、友達が大事。だって友達は一生ものだもの」と言う。じゃあ、恋人とは、一生の付き合いになるかも知れないって、一片の気持ちもなく付き合い合ってるのかな。友人とは、何が起きても、一生つながっていられると、根拠もなくそう思えるのかな。私には、それが不思議でならない。

一生の人になってくれる恋人が、どこかにいるかもしれないと思うし、友人の仲だって、突然ぶつりと切れてしまうかもしれない、って、いつもそう思う。友人も、恋人も、当たり前に大事。

「こっち」だから大事、じゃなくて、「その人」が好きだから、私は大事と思いたい。さっきも言ったけど、私は多分、「恋人」と「友人」の境界線が低いんだ。だって私は、つい、その根底に流れる「愛情」に、いつも目を向けてしまうから。恋人とつむぐ「恋愛」も、友人とつむぐ「友愛」も、根本に潜む「愛情」は同じでしょう。私はいつも、愛情を感じながら、探しながら、その人達との関係をつむいでしまう。私はそういう者なのだ。

「……ごめん、香。暇だった？」独りで黙々、考えていては、香との話ができない。私は思考を止めて、目の前の香に意識を戻した。

香との思い出話にふける方に、ちゃんと頭を戻して言った。

「登下校の、話なんだけど」

高校に行くまでの、朝の二十分の徒歩の中で、私は自然に家庭の事情を話すようになった。いつも話す、テレビの話題のひとつのよう。香も、別段、驚いた態度は見せなかった。

「こんなことになってるの、どうしたらいい？」じゃなくて、「こんななんよ、ホント参るわー」という風に、「冗談交じりに、私は話した。冗談交じりじゃないと、話していらなかった。」

香は、そんな私の話に、全部、爆笑していた。本当に、けらけらと笑った。ディープな内容なのに、笑い飛ばしてくれる香はすごい。私は心底、香を尊敬した。それはまだまだ、香が分かっていなかった証拠。私も若かった。

「ほんとにね、『香は心の広い持ち主だ』って感心してたんよ」
私は、香に言う。もう一度、ここで香がけらけら笑ってくれたら、どんなにか幸せだろうと思う。

数年後、大学生になってから、香に、このことを話した。

今でも感謝してる、と改めて言ってみたら、「え？　ただホントに、けっちゃんの話し方が面白くて、笑ってただけやったのに」と素で言われてしまった。私は、改めて、別の意味で、香に尊敬の念を抱いた。

「天性の図太い神経と、適度な鈍感さを持つ布瀬さん。あなたすごいよ」香の上にかけられてる、布団の端をつつきながら、私はそう、香につぶやいた。

ほんと、私には真似できないわ。

面会時間は過ぎて、病院を出て携帯を見たら、矢和田からメールが来ていた。

《どっか近くで、食事しないか？》

病院から最寄り駅までの帰り道にある、小さなイタリアンのお店で、矢和田と待ち合わせをした。このイタリアンは、よく矢和田と食べに行く。商店街に、小さな看板が立っていて、お店は地下に潜んでる。石のモダンな階段を降りて、お店に入っていくとき、ここが京都だということを忘れるくらい、そこはイタリアの空気をもし出し始める。ひとつ、踊り場を曲がって、階段を降りきる。ガラスのドアを押すと、ホール全体は、暗くて、テーブルのひとつひとつに、ロウソクが、仄かな炎を揺らめかせながら立っている。

奥の方の、二人用のテーブルに、矢和田は待っていた。矢和田は手を少し上げて、自分の居場所を示した。私は、気持ちとは逆に、ゆっくり歩を進めて、矢和田の向かいの椅子に腰を降ろした。

「今日は何にする？」私が落ち着いてから、矢和田がきいてくれる。「今日のドルチェによるね」私は嬉しくて、顔がほころぶ。矢和田との食事は大好きだ。

今日は、矢和田は、バジルと六種のチーズのピザを。私はボンゴレロッソのドルチェセットを頼んだ。お互いに、注文した料理を分け合って食べながら、何気ないお喋りを綴った。

「今日な、研究生が、すごいミスしてな」矢和田が話す。矢和田の言う、「すごい」は、全然すごそうにきこえない。思いやりがあふれた愚痴をこぼす矢和田を見ると、私の顔は、自然とほころぶ。

矢和田と、日常の些細な出来事を語り合うのが、すごく好きだ。私が笑って、矢和田も笑う。私の塾の話、最近読んだ本の話、一緒に観に行きたいと思っている映画の話、何でも話す。

そうやっているうちに、ピザの大皿は、底の繊細な模様をあらわにして、パスタ皿の底は、曇りのない、綺麗な白を見せ始める。ワインも程よく、私の体に沁み込んで、矢和田もいつもより、顔がほころんでいるみたいだった。ほろ酔いで、私達は店を出て、帰りの駅に向かった。

お店は駅のすぐそばだから、少し話しているうちに、もう着いた。販売機で切符を買って、一緒にホームで電車を待つ。まもなく電車が、トトン・トトンと線路を滑ってきた。私達はそれに乗る。座席には座らないで、立ってそのまま、話を続けた。周りに、やかましくない程度の声量で。乗った駅から、三つ目が、私のマンションの最寄り駅。五つ目が、矢和田の最寄り駅だ。

私のマンションの最寄り駅に、電車が到着した。ドアが開いて、私はホームへ降りる。

矢和田は、降らない。

「じゃあ、また。気をつけてな」矢和田が優しく話す。

「うん、矢和田も。今日は楽しかった。ありがとう」私と矢和田は、こうやって、ほんとに気持ちよく、今日の二人の終わりを告げる。

ドアがゆっくり閉まる。私は、矢和田の姿が見えなくなるまで、電車を見送る。

見送ってから、私は、どこか、空虚な感じに包まれる。いつもそう。矢和田と楽しい時間を過ごせば、過ごした分だけ。あの日から、矢和田と和解できた日から、矢和田は、私には触れてこなくなった。矢和田は、私の側に帰って来てくれたけど、多分、どこかで、まだ私を納得していない。それとも、矢和田なりの、何らかの、けじめでもあるのか。そこはもう、矢和田にきかないと、分からない。

でも、今は、きかないでいようと私は決めている。矢和田から口を開くまで、私はそのままにしておこうと決めた。側にいて、一緒に話をしてくれるだけで、私は充分矢和田に感謝している。そして、幸福な気持ちになっている。側に居続けてくれていてだけで、私は、

それだけで今は満足だ。

でも……どこかで、覚悟の気持ちは、もう、あった。

今度、矢和田が私から離れるとき、そのときは、二度と矢和田は帰ってはこないと思う。

そうなったら、もし、そうなくても、私は矢和田を恨むことなんて、ないだろうし、そして、追いも、しないだろう。矢和田がいなくなったらときは、その状況を、ありのまま、受け止めようという覚悟。誰のせいにもしない。矢和田のせいにも、環境のせいにも、私だけのせいにも、しない。そのまま受け止めて、先を見よう。

後悔のないように。

お母さんの一言が、胸に響いて、夜の大気に余韻を残す。

香と面会できるようになってから、三週間目に入った。香には、週に三回ペースで会いに行く。今までも香とは、それくらいのペースで連絡をとり合っていたから、香が入院していても、それを崩さない方がいいと思った。

会えない時間が、次、会ったときの時間を、より充実させると、私は思ってる。矢和田とも、そうやって、今まで付き合ってきた。メールは用事のとくくらいにしか使わない。《今、何してる?》のような、何となくメールは、窮屈とさえ感じる。もともとメールがあまり好きじゃないというのも、大きいかもしれない。だって、メールは二次的コミュニケーションにすぎないから。

文字だけが相手とのコミュニケーション方法。メールだけで、相手の心境を適切に解釈するのは難しい。面と向かって話していても、理解のくい違いはあるのだから。それに嫌な話、メールで甘い言葉を打ちながら、隣で他の女性と浮気していたりだって、ありえない話じゃない(もちろん、矢和田はそんな男じゃありません)。

色んな意味で、メールだけで相手が分かるなんて、ありえない。電話なら声のトーンや抑揚で、相手の気持ちがメールよりかは分かる。会って話せば、当然、もっと分かる。表情やしぐさや雰囲気や、相手を理解するための要素がたくさんある。

私は、矢和田とは、メールより電話。電話より会って話したい。メール先の矢和田が信じられないからじゃなくて、矢和田と会って話するとき、矢和田と話せることへの感謝を忘れたくないから。毎日メールをしていると、矢和田のありがたみが、薄れてしまいそうだから。

そして、私は矢和田と、適度な距離を保ちたいと思って、必要以上の連絡を避ける。

きつと、私は人との距離のとり方が不器用なんだ。多分私は、一

般の人達よりも、周りとの距離を広くとっている。それが、私の中で、適度な距離感で、それ以上入ってこられると、私は、ひゅつと退いてしまう。不当介入されるのは大嫌いだ。

距離のとり方。そう、私は、お母さんとの距離のとり方も変えた。あのとき、お父さんの事故の二ユースをきいたとき、お母さんの心は、ぱちんとはじけて、カラカラと崩れた。

鬱から抜け出すのに、半年。そこから日常生活ができる程の安定に、持ち込むまでに一年間。回復はとても早い例だったと、石詰先生は言っていた。そして、今の元気になったお母さんは、何とか、深みをおびた人になった。暗いんじゃないかって、半透明の色フィルムを、何枚も重ねていつて、だんだんと、深みのある層ができていくような。そんな、落ち着いた人になった。

私は、お母さんが元気になった頃から、もう、お母さんを「母親」とは見なくなっていた。親じゃなくて、むしろ、「人」として見るようになっていた。母親も、普通の人なんだ。子供にあたるときもあるし、傷つくし、心が壊れることもある。私と同じ。同等で一個人だったことを、あの日を境に、実感し始めた。

そんな実感が積もる程に、「あそこ」は、もう私の帰る処じゃない、と思い始めた。私の「家族」は、お父さんとお母さんと、私の三人で居た頃が「家族」だった。お父さんは帰らなくなった。お母さんは変わった。そして、私は自立したいと思い始めた。もう、形だけの家庭は、窮屈なだけだと思った。お母さんを嫌いになったんじゃない。今も好きだし、尊敬している。ただ、私達には、もうあまり意味のない、「とらわれ」からはもう、離れたいと思っただけだ。

私は、家から一キロ離れた所の、学生マンションに住み始めた。お母さんは、今もそのまま、一人で、以前三人で住んでいた、あの家に住む。今も、月末は、お母さんと一緒に外食に出かける。二週間一度は顔を合わせる。

距離のとり方を変えて、私はずいぶん、ラクになった。お母さん

もそうだと嬉しい。ま隣に居ると、しんどいと思うようになってしまった。だから、離れた。ずっと好きでいたかったから。

でも、お父さんは、時間も距離も関係なく、私の心に、しばしば現れてくる。切なさで、心が裂けてしまいそうなくらい、綺麗で素敵な思い出で、私の前に現れる。お父さんとの上手な距離のとり方は、これからも苦勞するだろう。なにせ、お父さんとは、私の心ひとつの問題だから。これがなかなか厄介なんだよねえ。

こんな私を、矢和田はよく好きになったなあ。付き合いが長くなればなるほど、私はよくそう思う。香も十五年間、一度も離れず、隣にいてくれた。それだけで、ほんと、奇跡と言えないかな。

10（後書き）

次話から第四部にはいります

第四部 1

久しぶりにバイトが休みになって、部屋でのんびりする時間ができた。のんびりというより、荒れ始めた部屋の掃除をしなければいけなかった。

フローリングを箒でまず、さつと掃く。フローリングワイパーで細かいごみをとる。それから、雑巾を石鹼水に漬けて、硬く絞ってから、水ぶきをする。家具やテーブルの隅は特に丁寧に。

こういった頭を使わない作業に、熱中するのは、結構楽しい。一緒に、テレビやコンポの埃も全部払う。先にこつちからしておけばよかったかな、と少し悔やんだ。部屋を綺麗にしてから、洗濯物をとり込んで、ベッドの上でそれをたたんだ。

たたみながら、私は、ずっと、留守番電話をチェックしてなかったことに気付いた。

「しまった」いつから確認してなかっただろう？ よく覚えてなくて、とりあえず、最初から、残っている分だけきいてみた。もしかしたら、香が入院した頃から、全然チェックしてなかったかもしれない。

留守電の【巻き戻し】ボタンを久しぶりに押した。きゆるきゆるとナイロンが回る音が続く。がちり、と音がして、電話が報告を始めた。

「伝言は、全部で三件です」続けて、ききなれた声が、一方的に話し始める。一件目は、お母さんからだった。内容をきいて、かなり前の伝言だということが分かった。

「あらー」私は二件目を続けてきいた。二件目は矢和田からだった。春休み中の、大学の掲示板について。三件目は、無言電話だった。一分は続いてた。

何だったんだろう、これは。ちょっと気になって、もう一度巻き戻して、三件目の伝言に耳をすませた。

やっぱりただの無言電話。でもなかった。留守電の微かなノイズじゃなくて、きき逃すほどの、小さな雑音が入っていた。そして、終わり十秒前くらいに、何か、ががん、という鈍い音が、一瞬鳴って、その後、勢いよく、がちゃんと電話は切られた。

全部、注意しないときこえない、小さな音だった。私は、この伝言の電話番号が、留守電に保護されていないか確かめた。

残っていた。私の知らない番号だ。

妙な気分になってきた。私はアドレス帳を開いて、まず、香のマンションの電話番号を確かめた。知っていたけれど、やっぱり、違う。

ふうと息を吐いて、妙な気分と一緒に、留守電も消すことにした。でも、止めた。その前にもう一度、アドレス帳は横に置いて、タウンページに手を伸ばして、ページをめくった。

見多氏の銀行からの着信だった。

ダイヤルを回して、相手が出るのを、待つ。明るい声の、女性が出た。

「はい、MT信用金庫でございます」

「お忙しいところ、失礼します。私、朝来と申しますが、以前、そちらからお電話を承ったようなのですが」

「さようでございますか。どういったご用件でしょうか？」

「いえ、それが、留守電でして、私もよく分からないんです。夜、十時に入っていたので、緊急かと思いましたが」

「そうですか。ですが、こちらでは、夜七時以降の、お客様へのお電話は避けておりますもので……もしかしましたら、お電話番号の、間違いではありませんか？」

「ああ、なるほど。そうですね。多分私の番号間違いみたいです。お忙しいところ、失礼しました。ありがとうございます」

「いえ、とんでもございません。失礼いたします」

「失礼します」チン、と電話を切って、私は、頭をかしげて、肩の
コリをほぐした。留守番電話に残ってた、番号そのままをかけて、
見多氏の銀行につながったんだ、番号間違いじゃないだろう。

私の電話に向けて、夜の十時に、電話がかけられたんだ。店が閉
まった、見多氏の銀行から。

香を前にして、今日は全然、話しかける元気が出ない。私は、香の隣で丸椅子に座って、ただじっとしていた。三十分くらい、ただ、そこで香を見て、頭の中で、見多氏のことをぐるぐる考えてた。

でも、もう煮詰まりかけているのが分かった。私がこの先の考えを広げるには、今のままじゃ無理だ。他の情報が要る。

実はもう、香に会いに行く前から、決心してた。

私は香を眺めて、謝罪の気持ちを込めながら、椅子を立った。病室の小さなクローゼットを開く。そこには、病院のパジャマの替えと、香の私服が、何枚かハンガーにかけられていた。香のマンションは、もう引き渡されて、香の私物は実家に戻された。確かに、いづ目を覚ますか、分らないのに、マンションの家賃を払うのは大変だもんなあ。おばさんが、香の私服を何枚か、ここにおいていたのには、願かけの意味も込めてあるのだろう。

「突然起きたとき、着る物がなくてかわいそうよね」とおばさんは、切なそうに微笑んで、そう言っていた。私は、その中の、トレンチコートに手を伸ばした。コートの小さな内ポケットを、手探りで探す。

あった。その空洞への入り口のジッパーを、じりじりと横に滑らせた。去年の年末のバーゲンに、香と一緒に行ったときの光景を、私は昨日、改めて思い出した。

香は、このトレンチコートを着て、ベージュのマフラーをしてた。京都の冬は、雪が降らないのに、信じられないくらい、寒い冬で、芯から冷えて、骨に沁みるほどの寒さを放つ。二人で、手袋をこすりながら、「寒い」と文句を言っただけだった。買い物をするまで、カフェで、熱いココアとシナモンチャイを頼んで、シフォンケーキも食べた。飲みながら、話は、「鍵」になった。

「恋人の部屋の合鍵って、自分の部屋の鍵とか、車の鍵と一緒に

つないで持つてる？」「私がきくと、香は、「持つてないよ」と言った。

「もし、自分の鍵を落としちゃったとき、見多さんの部屋に駆け込めるように」香は、はにかんで、トレンチコートの一部を、人差し指で、とんとんと叩いた。「これは絶対落ちないところに、しまつとかないと、ね」

そう言っていた。

確信はなかった。「そこ」にないのなら、「これ以上首を突っ込むな」ということだろう。私は、そう思いながら、ジッパーの開いた、その奥を、三本の指でかき回した。

かちやりと、私の爪に、硬いものが、触れた。大き目の鍵は、そこにあった。

私は、香を直視しないで、そのまま、ゆっくり、病室を出た。

見多氏のマンションの、305のドアの前に立つ。標識には、見多氏の名前がちゃんと貼ってあった。私は貼らないから、「律儀にやってるなあ」と、ふと、そう思った。

ボストンバッグから、私は鍵を出した。香がもらっていた、見多氏の部屋の合い鍵。

訴えられたら、確実に捕まるだろうなあ。不法侵入か？ この場合。そんなことを、ドアの前で、しばし考えた。でも、気持ちはすくんでいなかった。もう、そんな後始末も、訴訟も、全部ひきつける覚悟は出来ていた。

「お邪魔しますよ」小さくつぶやいてから、私はドアの鍵穴にそれを差して、がちやりと横に回した。ドアの向こうの、鍵が外れる音が分かる。私は、他の人に見られないうちに、さっさと部屋の中に入った。

男の人の部屋らしい部屋だった。玄関のすぐ右側にドアがひとつ、左側には、曇りガラス戸がひとつ。左の方は浴室とトイレだった。右の個室のドアを開けた。オーディオ機器と、小説や雑誌がいつぱいに詰まった木製の本棚が、壁三面に聳え立っている。ベッドソファと、ガラステーブルが中央にある。書物のジャンルを見て、見多氏の趣味、満開だなあと思った。

ここを細かく調べるのは後にして、残りの部屋を確かめようと、次に向かった。廊下の突き当たりの、ガラスの扉を開けると、ダイニングキッチンに拓けた。十畳ほどもある大きな部屋で。インポートもののようだ、豪華な絨毯がフローリング全体に敷かれて、ホームシアターセットは、部屋の隅に慎ましやかに置かれている。黒の皮のソファが、コントラストの役目を大きく果たしている。そして、ステンレスの脚のガラステーブル。木が多い私の部屋とは正反対だなあ、と感じた。

私は、キッチンの方に目をやった。戸棚には、整頓された食器やグラスが並んでいる。調理器具は、壁にかけられて、鍋は綺麗に洗ってあり、ガスコンロの上に置かれている。シナモンや、オレガノや、ブラックペッパーなどのたくさんの調味料が、埃よけのガラス戸の向こうに見えた。その隣に、カレーパウダーの缶と、紅茶の缶があった。香の好きな、アールグレイの紅茶の缶だ。缶の模様が、クラシックで好きだと言っていた、あの紅茶缶。

私は急に涙腺がもろくなった。悲しみは、ところかまわず、急に押し寄せてくるから、困る。

でも、揺さぶられてる場合じゃないぞ。私はぐつと歯を噛みしめて、気持ちをもう一度、持ち直すよう努めた。

気持ちを治めてから、私は、次の行動に移った。

さて、ここからだ。

ダイニングルームの真中に立って、私は軽く目を閉じた。沈黙と闇が全身を包み込む。こうすると、第六感が冴えてくる。探すモノは、見多氏の『秘密』。彼はまだ、何か私達に隠している。多分、それは、知られても、別にかまわない程度のものじゃない。知られると、絶対にまずいモノのような気がする。憶測だから、証拠が欲しい。それを今日、見つけて帰りたいものだ。何時間ここに居座って、部屋をひっくり返すわけにもいかない。

さて、どう探そう。

そこまで意見をまとめて、私はゆっくり目を開けた。もう一度、部屋の中をゆっくり一望した。うん、そうだ。

見つけ方は、簡単。ここには香も頻繁に来てたんだ。だったら、香が決して、手を出さないところを、探してみればいい。

香は機械に弱い。皆知ってる。

今日のこの銀行は、お客でごった返していた。私はそれを眺めながら、ナイロンのソファに座り、この店長を待つ。銀行のアナウンスで、見多氏を呼び出してもらう。時刻は、午後四時過ぎだった。見多氏のマンションから出て、私はすぐに、ここには来なかった。気持ちを静めるために、近くの店で、コーヒーを飲みつづけてた。

店に入ったとき、多分、私は、挙動不審者に見られたかもしれない。とにかく動揺していて、自分が可笑しいことが自分でも分かる程だった。とにかく気持ちが落ち着くまで、二時間。カウンターで、コーヒーを、ただ、ぼんやりと飲みつづけた。

一度、ピークまで気持ちが揺れて、それが過ぎれば、あとは大丈夫。動揺と焦りと、苛立ちは、店に捨ててきた。

ここに来たのは、見多氏と話をするためだ。

「店長は、応接室でお待ち下さい、とのことです」受付の女性一人が、立ちあがって、しぐさで私を呼ぶ。

「すいません、ありがとうございます」私はお礼を言って席を立つ。女性はにつこりと笑って、奥の方の応接室に案内してくれる。胸のネームパネルには、『白石^{シライシ} 礼子^{レイコ}』と書いてあった。この銀行に勤めてから、長いのかな。そんなことを、一緒に歩きながら、考えた。応接室で、出してもらったお茶を少しすすって、見多氏が来るのを、待った。待つ間、香の顔が、私の頭から消えなかった。香の気持ちを想像する。香が思っていたことは何だったのだろうか、と考える。見多氏が、ドアを開いて、私の視界に現れた。

「待たせて申し訳なかった」銀行での見多氏は、とても礼儀正しい口調と、雰囲気醸し出している。店長の風格だ。見多氏と直接会うのは、あの日から、三ヶ月ぶり。もう、私の殴った左頬も、元通り綺麗になって、痕も残ってなかった。

見多氏は、テーブルごしに、私の向かいのソファに座った。

「それで、どういった用件で？」ビジネス口調に、拍車がかかってきてる。

「あなたの違法行為に関して」率直に言っておこう。その方がよさそうだと思う。小細工も、もういらぬ。

見多氏の表情が、無になった。ぴたり、と止まって、そのまま。

私は、拍子抜けした。私の一言で、こんなに動揺して、それを隠せない、その程度の男だったのか。私は見多氏を、過大評価していたみたいだ。

「君は、一体、何なんだ」見多氏が、やっと口を開いた。開いたら、見多氏の舌は、猛スピードで、言葉をつなぎ始めた。

「この前といい、君のあの行動、常道を逸してる。僕の歯は、あれで一本、さし歯になったんだぞ。香の昔からの友人だから、何もなかったことにしてやったが、今からいくらでも、そう、暴行罪で訴えてもいいんだぞ。そして、今日は何だ？ 自分のことは横に置いて、僕を犯罪者扱い？ 何の犯罪者だ？ 香のことか？ 香と口論して、落ちる香を助けられなかっただけで、僕は犯罪者か？ え、そうなのか？ 君は何て非常識な人間なんだ！」

もう一度殴って、そのぴーぴーうるさい、口先を詰めてやろうかと、一瞬、本気で考えた。でも、余計うるさくなりそうだし、止めた。それに、あまりの見多氏のなさけなさに、私の気持ちは、極めて冷め始めていた。

私は、そのまま、カバンの中から、B5サイズのチラシを数枚、見多氏に見せた。見多氏の顔色が、すうつとひき始めた。本当に動揺してるんだなあ。私は、そのチラシと、見多氏のマンションで見つけた、『契約書』を一枚出して、テーブルの上に、静かに置いた。

私は見多氏を見つめた。

「詐欺に、荷担したんですね」私は言った。

見多氏は返事をしない。そうと思ってはいたけれど。

「関東の方で、一時、はやった詐欺ですね。友達もかかって、多額の借金を負ったから、よく知ってるんですよ」私は、言つて、見多氏の前に広げた、数枚のチラシと、契約書に目を落とす。これを見多氏の部屋で見つけたときの衝撃は、忘れられない。

チラシには『ポスティングスタッフ募集!』と書いてある。そして、化粧品広告のチラシ。これを、各家に、ポスティングしていくバイトの募集。ピザのポスティングと、仕事内容は変わらない。

ただ、給料のシステムが違う。契約書にその内容が、詳細に書いてある。給料は、歩合制と、出来高制の両方から、支払われる。ポスティングするだけで、一枚につき、三円支払われる。そして、その商品が注文されて、売れば、褒賞金が出る。褒賞金は、注文一件につき、四千元。つまり、一度ポスティングしておけば、後は、チラシを見た人からの、注文が入る毎に、自分の懐に、お金が舞い込んでくるという、オイシイ、バイトだ。

巧妙な詐欺だ。

ここまでは、バイトする側に有利なことしかない。でも、このバイトを始めるにあたって、研修料が必要になる。チラシなどの諸経費も、最初は、本人負担でなければならない、そう契約書に書かれている。研修と、諸経費の為に、まず始めに、十万円、銀行の指定口座に振り込むよう、指示される。このバイトを選ぶ全員が、現金振り込みは出来ない。小銭を稼ぎたい、お金のない人がこのバイトを選んでいることを、「向こう」はよく分かっている。

「バイトを始めたら、借りた分なんて、すぐに返せますよ」と、向こうが『信頼できる』という、ローン会社から、十万円借りるように、促す。

信頼？ 信頼じゃなくて、それは信用というんだ。それに、借り

る会社は、信用も何もない、サラ金会社だ。借りた瞬間、利子は韋駄天よりも速く、膨れ上がって、気付いた頃には、三桁だ。

その、振り込み先の口座番号が、見多氏の銀行の口座番号だ。私はこっち方面、詳しくないから、どうやったらこんなことができるのか、不思議で、ただもう、奇妙な感じが持てない。ポステイングバイトの指定口座の銀行名は、見多氏の銀行とは、全く違う名前にしてある。見多氏の銀行は、このあたりじゃ、特別信用がないわけでもなく、一般的な利率でお金を貸す、普通の信用金庫だ。

表向きは、ご近所に優しい『MT信用金庫』。一方で、サラ金会社。ひとつの建物の中で、天と地ほども変わる利率で、金が動いていた。

いつから、見多氏はこんな商売をしていたのだろう。香は、いつ頃から、これに気付いたのだろうか。

あの夜、口論の内容は、結婚のことじゃなかったんだ。

私は、暗く、鈍い光を反射させるテーブルから、目線を変えて、震える見多氏を見た。

「だから香をつきとばしたんですか？」私は静かに問いかけた。

「違う。香は自分で落ちたんだ！」見多氏が、大声で反論した。知ってる。香は自分で落ちたのは、もう分かった。

「じゃあ？」私はきく。もう逃げられないんだ、言ってしまった。見多氏の体は震えたままだ。言いたそうで、でも、言えば、もう終わりだという顔。でも、見多氏も、多分、分かっている。もう言うしかないことを。

「あの日」

見多氏の口が一気に滑り出した！

「香は、僕に、話があると僕が帰るのをひきとめて、それで、二階で、言われた。この話を言われて、僕は否定したのに。したのに香は逆上して、隣の部屋にこもって、出てこなかった。待ったけど、出てこないから、鍵を使って、開けて、香は、あいつは電話をかけてた」銀行からの留守電。かけたのは香だったんだ。

「香を廊下に引っ張って、『警察にかけたのか』ってきいても、あいつは『警察にはかけてない』って嘘を言い張るんだ」

見多氏の歯が力チ力チと鳴り出して、顔には、憎しみのようなものが浮き出てきた。私は、何も言わないで、そんな見多氏の言う、話の続きを待った。

「怖かった。怖くなつて、じゃあ誰にかけたんだって、香にきいた。香は、僕からどんどん離れて、離れるから、僕は近寄った。そして、香がぐくつと倒れ込んで、あいつ、廊下のアルミ柵まで倒して、そのまま、階段を落ちてった」

私は、耐え切れなくなつて、目を瞑った。見多氏と、香のやりとりが、気持ち悪いほどリアルに頭の中に映し出される。

見多氏の詐欺に気付いて、見多氏に問いただしている香。香、少しパニック状態になつて。見多氏も、指摘されて、あからさまに言い返す。その反応で、香は、もつと確信を持つただろう。そして、隣の部屋に、逃げ込んで、内側から鍵をかける。しばらく出てこない。六畳位の、四角い箱の中で、香は何を考えていたんだろう。きつと、香なりに色々考えて、たくさん考えて、泣いていただろう。

そして、私に電話をかける。でも、私はいなくて、留守電に言葉を入れるつもりだったのか、そうでなかったのか。電話をかけてすぐに、見多氏がマスターキーで鍵を開けて入ってきたから、それは、分らない。見多氏も、相当焦つてたんだな。電話が切れているか確認しないで、まず香を部屋から引っ張り出した。そして、廊下で香に問い詰める。見多氏の言葉と雰囲気、香は圧されて、圧されて、階段の前で足を獲られた。こらえようと、近くのモノに手を引っかけたけど、香の落下を止められるだけのシロモノじゃなかった。香と一緒に、アルミの柵も落ちて、大きな金属音を立てる。

見多氏が、案外抜け目ないと思うのはここだ。後になつたけれど、彼女を階段の下に残しておきながら、もう一度、部屋に入って、電話を確認する。そして、まだつながっていたことに気付いて、思いつきり、受話器を定位置に、押し込む。そして、私の留守電は切れ

る。

それで、その先は？

まだ、私の疑問は全部解けていなかった。

「それで」私はきいた。

「香をどうしたんです？」見多氏が、また黙りこくった。こいつは、その先は私に言っただけなのかい？

下唇を噛んで、私は言った。

「香の、二度目の頭の強打。あなたが、やったんでしょう」見多氏が、あからさまに顔を背けた。言葉を使うより、分かり易い答え方って、あるもんなんだな。当たり前だけど、分かっても全然、嬉しくない。

見多氏は、香を殺そうとした。事故死に見せかけて、自分の罪を隠すために、香を殺そうとしたんだ。

香が、階段の上から、一番下に落ちるまでに、頭を打ったのは一度だけ。そのときは、もしかしたら、意識があつたのかもしれない。でも、きっと、逃げるだけの元気は無かつたんだろう。電話を切つて、降りてきた見多氏は、香を観察して、どう思っただろう。ああしたんだろう。『念には念を』？ 彼は、香の首から下は、なるべく動かないようにして、自分の指紋が階段につかないように、注意して、香の髪をつかむ。

香は、抵抗できなかった。

私の表情は、見多氏が応接室に入ってきたときのままだ。保っている。私が崩れたら、見多氏はそこに付け込んでくる。私は、見多氏を見て、言葉を続けた。

「香は冷静な子です」そう、香は、私より、ずっとずっと冷静だ。

「特に、お金に関しては。自分の職場で、そんなことが起っていたのを知ったら、香はすぐに警察に連絡できる子です」見多氏の顔が真っ青になった。

そんな見多氏を見て、私は、どうしようもなく、悲しくなった。悲しくて、やりきれなくて、胸がきしむ。

「どうして、香を信じなかったんですか」見多氏が、少しだけ、私の方に顔を向けた。さっきより、眼の下が、一気に落ち窪んでる。

「香がかけてた、電話の相手は私です。香は、ずっと部屋で考えてたんです。どうやったら、あんたを助けられるか、ずっと考えてたんです。だから、私にも相談しようと、電話をかけたんです」矢和田は法学部教授だ。それは香も、もちろん知っていた。

「どうして、香を信じきれなかったんですか」私の声が、さっきよりも震えてる。見多氏は、私から、ぱっと目を反らした。見多氏の肩が、がくがくと揺れてて、横顔から見える眼は、今にも涙がこぼれそうで、潤んでいる。私も、ずっと目元が熱いままだ。でも、冷静さは保つ。

「もう、香には近づかないで下さい。あなたに香を会わせるわけにはいかない。二度と病院には現れないで下さい」私は見多氏に言った。

「そうする」見多氏が、すんなりと、あっさりと、そう、言っただけ。

私の目から、一気に涙があふれた。こいつ、これだけ、腐った男だったんだ。

私はぎゅっと、もう一度、強く下唇を噛んだ。でも、これで終わるわけにはいかない。

私は、小さく深呼吸して、見多氏を見た。冷静に、彼を促すために、私は言葉をはいた。

「自首しましょう」にがさない。

線が切れたようで、とたんに見多氏が、ぼろぼろと涙をこぼしだした。涙をこぼすだけで、何も言わない。何も言ってこない。

「見多さん。悪事は遅かれ早かれ、いつかは必ず、ばれるんです」私は言った。「あなたは、今がそのときだ」冷静に話すことは、のしるより、ずっと難しい。全身が重たくて、頭がぐらぐらし始めているのが分かる。もう一度、今度は深く、大きく息を吐いて、私は、もう一歩、彼に踏み込んだ。

「けじめをつけてください。私から警察に連絡したくないんです」
決して認めたくないけれど、こいつには、これは言ってやらないと
崩れ落ちる見多氏を見て、私は言った。「あなたは、香が、結婚し
ようとまで思えた人なんだから」

応接室から、銀行が出るまで、誰も私を不審そうに見る人はいな
かった。銀行を出ると、もう外は薄暗くて、私の表情も、暗がりの
おかげで、周りの通行人には分からないようだ。

銀行から、香の病院まで、案外近かった。病院に着いたときは、
午後七時前で、一般面接の時間ぎりぎりだった。約束は四時までだ
ったのに、今日はそれを破って、もう一度、香に会いに行った。今
日、二度目の面会。夜の香の病室は、電気は点いていなくて、心電
図の白い光だけが、病室で仄かに光っている。私は、ドア付近の、
電灯のスイッチを入れた。蛍光灯は点かないで、オレンジ色の豆電
球だけが点いた。今はこの方が、いい。

ゆっくり、私は、香の側に近寄った。仄かな光の中で、眠る香の
表情は、本当に、穏やかだ。本当に穏やかな顔。全てを知ってから
だと、いつそう、香の穏やかな顔に、驚かされて、切なくなる。

階段から落ちる瞬間、香は何を思ったのだろう。何を思いながら、
階段を落ちていったのだろう。そして、何を思いながら、意識を遠
のかせていったのだろう。見多氏を恐怖して、恨みながらで意識が
切れたなら、こんなに穏やかな顔には、ならないだろう。

私は、立ったまま、手を伸ばして、香のおでこに触れた。そして
ゆっくりなでた。ねこっ毛の、さらさらした髪が、私の手の甲に、
少しかかる。

ばっか。私は心の中で、香に言った。

「ばっかだよなあ」口に出して言うと、声が震えてるのに、気付いた。

でも、そんなバカな香が、大好きだ。最後まで、見多氏をかばった香が、本当に、好きだ。

もうここなら、存分に泣いていい。私はもう、我慢しなかった。

「今度はもつと、いい男、選べよなあ。矢和田みたいな人をな」私はずっと香に触れたまま、気の済むまで、香の分まで泣きつづけた。

次の日、私はすぐに、矢和田とおばさん呼んで、昨日の見多氏との出来事を報告した。合い鍵を勝手に拝借したと、勝手に見多氏の部屋に侵入して、証拠を押収したことも。

喫茶店の中だったから、二人はそれほど、感情を外には出さなかった。悪いかな、とは思ったけれど、だから喫茶店を選んだ。この喫茶店は、オープンカフェのように、ガラス張りの喫茶店で、開けた感じが良い、と人気が高い。今日も、カップルや、オシャレな服を着た女性客で、にぎわっている。

「身近で、そんなことが起るもんなんだな」矢和田が、半分呆然とした感じで、つぶやいた。

「香、すごくショックだったと思う」私はつぶやいた。

「敬はどうして、そうやって、時々、ものすごい無茶をやらかすんだ」矢和田が苛立ち半分、怒り半分で言った。やっぱり言われてしまった。

「共犯者扱いになったら、私、矢和田に一生、申し訳なくなる」私は、目線を下にして言った。誰かに迷惑をかけるくらいなら、自分で全部、背負う方が、よっぽどラクだ。

「信じられないわ」矢和田の隣で、おばさんが、半分、呆れ顔で、何回目かのため息をついた。テーブルに置かれた見多氏のマンシヨンの鍵を、おばさんは、つい、とつまんで、目を細めながら、それをひらひらと、顔の前で泳がせた。

「私が、香の私物をとってきてもらうために、これを敬ちゃんに渡したの」棒読みで、おばさんが、さらりと言った。

私は、一瞬、何のことだか分からなくて、言葉を返せなかった。

次は、やっと意味が分かって、それで、言葉が出せなくなった。

おばさんは、さっさと、自分のカバンに鍵を詰め込んで、そして微笑んだ。

「私が、『見多さんのマンションに、行ってきて』と、敬ちゃんに、お願いしたの」そう言って、矢和田の方も見て、きいたわね？と目で確認を求めた。

私は顔が熱くなった。矢和田は、軽く頭を掻いて、「そうですね」と返事した。「今回はね」と付け加えて。

私は、つくづく皆に守られてる。ホントに、感謝し尽くせないくらい、皆から助けられてる。私は、まったくもって、底無しの、幸せ者だ。強運な人間だ。

じゃなきゃ、こんな人生、送れない。

喫茶店から出てすぐ、矢和田が、財布から名刺を一枚出して、おばさんに手渡した。

「見多さんのことは、この法律事務所に相談してください。私の友人も勤めているし、良心的な事務所ですから。私からも連絡しておきます」

おばさんは、微笑んでお礼を言った。

おばさんと別れてから、私は矢和田に言った。

「矢和田の友達が勤めてるなら、安心ね」

「友達というか、元同僚って言った方がいかなあ」歩きながら、矢和田が、言った。

「矢和田……弁護士だったの？」

「とおーい、遠い昔な」矢和田は、照れるような感じで言った。

「色々めんどくさくなって、嫌になって、それで大学に雇ってもらったんだ」今度は目を少し細めて、遠くを見るように言った。知らなかった、矢和田の過去。

矢和田がこっちを見て、はにかんだ。

「秘密を打ち明けるって、勇気が要るんだなあ」と言って、笑った。矢和田は、きつとまだまだ、秘密をたくさん持っている。

いつか、今みたいに、私にまた、ひとつでも教えてくれるかもしれない、ずっとと言わないでいるかもしれない。でも、一部でも、矢

和田の知らなかった部分が知れて、今日ここで、私はすごく、嬉しくなった。

今日は雲の少ない真っ青の空で、そんな澄んだ空の下、私は矢和田と最寄駅まで、タップを刻むように歩いた。

ショックというのは、いつまでも後引くものだ。見多氏の真実はしばらく、私の睡眠と食欲を阻害した。

香が落ちる。見多氏は、それを見送る。見多氏は、落ちきった香を見つめて、もう一度、香の頭を、階段の角に、打ちつける――めりこまず――。

ゴゴン

電車の手すりに、こめかみをくつつけたまま、私はいつのまにか眠っていた。近鉄電車は、もう私のマンションの最寄り駅、ひとつ手前まで来ていた。そのままの姿勢で、電車が駅に着くまで、ぼんやりと時間を過ごした。

左のこめかみは、鉄の手すりに、熱を奪われて、ひんやり冷たくなっている。そこが少し、じんじんして、痛いような、気持ちいいような、妙な感じになっている。

私は見多氏のことを考えた。見多氏は、新聞をしばらく賑わしてはいたけれど、日々の情報の流れと共に、自然と社会から消えていった。

「ゴゴン、と香の頭が、鈍く鳴る音を想像すると、たまらなく、今からでも「見多氏を殺しに行こうかな」と思う。もちろん、本当に行ったりはしないけれど。こんなとき、いつも思う。私は、行動には現さないけれど、内では、結構、残酷で、残忍な事を考えていたりする。今も時々、ここにはいない見多氏に、殺意を抱く。本気の殺意。

《思うことと、思ったことを実行することは、重さが違う》

誰の言葉だったのか。まあ、確かにそうだとも思うし、もっと言えば、考えすら起こさないのが一番良いとは思っただけけれど、それはなかなか難しい。

今は、思うだけなら、それなら、許してもらいたい。誰に？ 誰に・何に・どこから許してもらいたいのか、自分でもよく分からない。

けれど、私はよく、そう思う。矢和田が、他の女性と食事に行くときの、嫉妬感。以前、矢和田が付き合っていた、女性の写真を見たときの、妙な対抗心。以前、矢和田が、この人と付き合っていたから、今、私と付き合っているんだ、と分かっているけど、以前の彼女に気持ちは混乱させられる。

香が、見多氏と旅行に行っているときの、切なさ、寂しさ。見多氏が羨ましいと思う気持ち。そんなことが、たくさんある。

私は、表には出さないけれど、結構どろどろした、それらの気持ちを抱えながら、好きな人達と付き合ってきた。そういえば、いつだったか。そんな私を見つけた誰かが、私に「感情を押し殺してばかりで、損してますよ」と言った。「もつと、自分の感情を、相手に出して良いんですよ」って。

損。はたから見れば、損していると見えるのか。確かに、自分でも、時々、「損しているのかな？」と思うことはある。でも、突き詰めて考えてみれば、人って結局、自分が一番したいことしか、しないんじゃないかな、って思う。

選べる環境が整っている限りで、人は、何だかんだ言って、一番したいこと、それが、一番「まだまし」なものを、選んでいるんじゃないのかな。

塾の生徒の子が、「時間がなくて、宿題できなかった」と言うとき、私は、「できなかった、じゃなくて、したくなかった、の方が合っているんじゃない？」と、きき返す。子供はうなづいてしまう。私は、意地悪かな。

人は、無意識に言い訳をしている。そんな存在なんだ。気を抜くと、私もいつも、無意識に言い訳をしてしまう。大学で、アドラー心理学を勉強していて、「can notの裏には、will not 有り」という名言をきいて、成るほど思った。

「できなかった」んじゃなくて、「しなくなかった」って、ことね。

私が、好きな人達に自分の嫌な感情をぶつけないようにしてる理由は、そう、したくないからだ。私が、矢和田を束縛しないように――幾分我慢してでも――そうするのは、そっちの方が、まだラクだから。わがままを言って、矢和田を困らすのは、嫌だからだ。

突発的に出る感情に任せて、矢和田にあたって、彼を困らせて、そしていつか、彼と離れてしまう結果を招くかと思うと、束縛なんて、怖くてできない。する気も、起きない。

あっさりしているようで、私は結構、執着心が強い。誰にも気付かせないぞ、これは。

今日は、香の面会の前に、私は、自分の部屋で、一通の手紙を探した。手紙がたくさんしまつてある、引出しの隅のほうに、その手紙は、隠されていた。

それをカバンに入れて、私はマンションを出た。今日は五月晴れで、とても爽やかな風と、心地いい日の光が注いでいる。

昨日で私は、二十四歳になった。自分じゃ何となく、実感がわかない。本当に二十四歳になったのか？ 多分、この先、どれだけ歳をとつても、「ホントに**歳か？」って言っていそう。

「あ」病室に入つて、カーテンが替わっているのに気付いた。この前までは、少し黄ばんでた白のカーテンは、今日は純白になっている。そのカーテンを通して、さしこむ光は、いつもの数倍、綺麗に見えた。香の頬に、日差しが適度に注がれていて、今日は顔色がいいな、と思った。

「香、お久しぶり。今日は良い天気やね」鉢ごと持ってきた花と日持ちするお菓子を、香の側の、小さな木製テーブルの上に置く。

「昨日、二十四歳になっちゃったよー」椅子に座りながら、冗談めかして、香に言った。

「香は、あと四ヶ月後か」私は、少し目を細めて、香を眺めた。四ヶ月後の香の誕生日。そのとき、香は、もう起きているのだろうか。「時効かな、と思って」言つて、私は、顎を上に向けた。座ったまま、足を伸ばして、両手で、股のあたりの、椅子の端を持って、はあっと息をはく。ある映画のワンシーンで、苦悩する男が、こんなポーズをとっていたのを、真似してみた。そう、私は苦悩しながら、今日、ここに来た。

「香に渡してなかったものが、あるんよ」カバンから、今日の朝、部屋から持ってきた手紙を出す。封は糊で、しっかり貼られてる。

宛先は、昔、香が住んでいたマンション。

この手紙、書いたのは、三年前の私。私の二十一歳の誕生日に、香に向けて書いた、手紙。

「何で、自分の誕生日に、手紙を書いたかといいますと、何となく、二十一年間、生きたことをね、改めて感謝したくなりまして。んで、香に、お礼の手紙を書いたのですよ」私は、言って、手で強引に、その手紙の封を切った。書いたけど、三年前、この手紙、香には送らなかった。送らずに、引出しにしまって、今日まで触りもしなかった。この手紙を書いたことは、一生、秘密にしよう、と、そう思っていたから。

「お父さんが、死んだときさー、結構危なかったよなあ、私」封を切っても、中身は出さずに、私はそれをテーブルの脇にぼんと置いた。

「あ那时候、香がいなかったら、どうなってたのかなあ」

お父さんの事故のニュースを見て、お母さんは入院した。

私は、そのまま、荒れた家に残った。その頃は、病院になんて、近寄りたくもなかったから。カウンセリングも、まっぴらだった。初対面のカウンセラーに、その人のお給料の為に、私の悩みを打ち明けるなんて、ばかばかしくて、やってられるか、と思っていた。仮に、医者にかかって、それで、「うん、分かるよ」なんて、言われたら、「何が分かるの」と、きき返して、患者の特権をフルに使って、カウンセラーに何をしでかすか、自分でも分からないとも思っていたし、とにかく、私は頑として、病院もカウンセリングも、拒否した。

そして、お父さんのお通夜とかお葬式とか、一通りやるべきことが終わったとき、私の緊張の糸が、ふつつと切れた。

心身が一気に、落ち込んで、前に進めなくなった。

自分でも、こうなるとは思っていなくて、何で？ と、びっくりした。私はもう少し、強い人間だと思っていたから、それもショックだった。一週間、私は部屋に閉じこもって、ベッドから起きあがれなかった。悲しくて、辛くて、苦しくて、もう、誰とも会う気力がわいてこなかった。

部屋にこもりだしたその日から、香から、一日何通もメールが入った。内容は、すごく単純。

《今日、夕食に炊き込み御飯作ったで 美味しくできたぞ！》とか、《今から犬の散歩行ってくるわ！》とか、《この前借りた小説、読みきったわ》とか、本当、日常のことばかり。

《大丈夫？》や、《今、何してる？ ご飯は食べてる？》などの、私に問いかけるメールはなかった。部屋から出られなくても、香のメールを読んだと、外とつながってるような気がして、安心感を持ったのを今でも鮮明に覚えている。

部屋にこもって、三日目に、私は、《今、しんどくて、部屋から出られない。でも、会いたい》ってメールを送ったら、香はすぐに私の家に、訪ねて来てくれた。オレンジと、お菓子を持って。

携帯のバイブが、ガッガガ！と、アルミの椅子の上で、着信音以上に、大きな音を立てて、私を呼んだ。香からの電話だったので、驚いたけど、すぐ、とった。

「もしもしー、けっちゃん？　今、けっちゃんの家の前に来てるんやけど、玄関、開いてるんかなあ？　あ、開いてる？　じゃあ、もう勝手に入るで、てか、もう入ったし」こんな風に、マイペースに、香は私のところに、やってきた。そして、私を見たとき、まず最初に、「おいおい、敬ちゃん」と言って、困った表情も混ぜ合わせながら、笑った。だだっこをあやす、保母さんのように。

私の心の有刺鉄線は、香には、見えてもいなかったようだ。

「香には、勝てない。ほんと」眠る香に、感謝の気持ちを込めながら、私は言った。

ほんと、香はすごい。お父さんが亡くなって、私がひきこもってそこから抜け出して、元気になるまでの、半年間、周りの人達は、絶えず、私に「頑張って」と言った。

「……『頑張れ』って、限りなく無責任な励ましだと思わない？」私は、少し、頭を傾けて、香に尋ねてみた。「頑張れ」と、周りから言われるのは、私には、プレッシャーにしかならなかった。「頑張れ」と言われると、「私は一切関与しないし、援助もしないよ。あなた、今より努力して、何とかしなさいね」と言われているように、孤独感と疎外感が強くなった。普段は、「頑張ってね」と言われても、「ありがとう」と言って、そこで終わっていたけれど、弱っているときに、そう言われると―これ以上頑張れないときにそう、言われると―その言葉が、どれだけ残酷で、無責任な言葉なのかが、分かる。

香は「頑張れ」とは言わなかった。それより、

「私に何か、できることがあるなら、ゆってな」と言った。安っぽい励ましの言葉より、行動で私を助けてくれた。中途半端な同情も、表向きだけの言葉かけも、香は持ち込んでこなかった。実際、隣人より、親類より、そう誰よりも、一番私の側にいてくれたのは香だった。

あるとき、香がいなかったら、今の私はいない。あの時期を思い出したび、いつも私はそう思う。

「お礼が言いたかったんだ、ずっと。だから、手紙を書いたんだけど」私は、手紙をとって、静かに、中身を出した。数枚の、二つ折りされている便箋を、ゆっくり開く。三年前、香に宛てた手紙。

「……………」

手紙を見ながら、私は自分を滑稽に思った。

実は、書きながら、最初から香に渡す気はなかった。香が、これを読んだら、私を嫌うかもしれないと思って。読めば、香は私を拒むかもしれない、と恐れて。そんな危険なものを、意気揚揚と、見せるわけないだろう。

だから、香に宛てていながら、これは、私の井戸になった。

何かの童話だったかな？ 本音を言えない男が、家の裏の井戸の蓋を開けて、そこだけに自分の気持ちをぶちまける。そして、蓋をして、誰にも悟られず、また皆の前に、飄々と出て行く。でも、井戸の中の言葉は、井戸の中で、延々とこだまして、そこに留まり続ける。音声による言葉として、そこに残る。私も、ここなら、自分の本音を綴ってもいいだろう、と。そう思って、自分の気持ちを、正直に書いた。

でも、井戸の中の、男の本音は、誰にもきかれず、ひっそりと、静かに井戸の底で、その身を潜ませていけたのだろうか？ そして、男は、実のところ、それで満足していたのだろうか？ そのへんの結末は、昔の話だから、覚えてない。

私もこの手紙は、一生、香にも、他の誰にも見せないつもりだった。けど、香がこうなって、私の気持ちが、少し変わった。

後悔のないように。その言葉を内にしまいながら、私はこうやって、香と会って、今まで言えていなかったことを、ずっと香に伝えてきた。

じゃあ、この手紙の内容は？ 伝えないと、私の香への思いは、まだ不十分だ。だから、今日、この手紙を持ってきた。

三年前の手紙を、三年ぶりに読み返す。自分の手から一度離れたモノは、もう、自分のモノとはなかなか思い難い。この手紙も、他人が書いたモノのような気にさえなっている。三年前の自分なら、もう、他人と書いてもいいかもしれない。そんな風に、客観的に、自分の書いた手紙を読み返すと、私の今朝の決意は、もろくも崩れ落ちた。

読みながら、私は、泣きそうになった。三年前、私は、こんなことを書いてたんだなあ。

これは、やっぱり、無理だ。

「ごめん、ちよつと、飲み物買ってくるわ」涙が出る前に、私は、病室を出た。感情つてのは、ほんと、いつ高ぶるか分からないから、困る。

売店で、パックのジュースを飲んで、気持ちを落ち着けてから、香の病室に戻った。もう一度、椅子に座り直して、テーブルの上に置かれた手紙を見て、それを元あった場所に、丁寧にしまいながら、香に言った。

「手紙、読めるものじゃなかったわ。昔のやし。ごめんな」微笑んで、香に言った。

言いながら、何だろう、私は急に、悲しさと、やるせなさが募った。そして、何なんだろう、この、口惜しさは？

私は、どこかで、残念で仕方ない、と思っていたらしい。

井戸の男をもう一度思った。もしかしたら、井戸の男も、本当は、自分の気持ちを、周りに伝えたかったんじゃないだろうか。いつになっても良いから、きつと、本当は、自分の気持ちを、皆に伝えたかったん、だろうなあ。きつと、そうだろう。今、そう思った。

でなきゃ、言葉として、残さないだろう？

第五部 1

何だろう、何かおかしい。最近、私は、妙な『違和感』に気付きました。何に違和感を感じているのか分からないけど、とにかく、何か不思議な、奇妙な感覚が、頭と体に宿り始めている。ここ、最近のことだ。

昨日、私は、何ヶ月ぶりに一人で宇治橋に散歩をしに行った。暖かくなった京都の昼間。ぼんやりと宇治橋を歩いた。

JR宇治駅の方から、橋を渡り切って、そのまま、京阪宇治駅近くの、さわらびの道に進んだ。さわらびの道は、隠れた小道で、道の両脇に立つ、延々と続く木々には、新緑が見事に茂っている。映える碧だ。葉は光沢を持って、日の光を鮮やかに反射させている。生き生きと茂る、木々が創りだす木漏れ日に、私は魅せられて、しばらくそこに立ち止まって、ペットボトルのお茶を飲んだ。

目をつぶって耳をすませば、近くの川の流れる音や、鳥のさえずりや、虫の羽音もきこえてくる。これだけ、五感がすっきりしているのは、どれだけぶりかなあ、と思った。気持ちは、さらさらと、穏やかな感覚を持つ。久しぶりの感情だった。

香に今度、報告しよう。そう思って、香を思ったとき、ひやりとまた、あの「違和感」が襲ってきた。何だ？ 私は、とっさに目を開けて、胸をさすりながら、私自身に疑惑を持った。

今日、お母さんに電話をかけた。色々、ばたばたしていて、お母さんとは、なかなか話す機会が持てなかったから。見多氏のことはもう話題には出てこない。お母さんは、昔の話題を掘り返すことはあまりしないから、ありがたい。大学の話や、お母さんの習い事の話や、お互いの近況報告を、笑いながら話した。お母さんは、終盤になると、いつも私の健康をきく。今日もやっぱり、きいてきた。

「体はどうなの？ ちゃんとご飯食べなさいよ」

「大丈夫、ちゃんと食べてるよ」私は答えた。「ほんと、最近、食べる量も増えてきたみたい」前までは、食べてなくても、一応、「ちゃんと食べてるよ」と答えていたけど、今日の返事に、ごまかしはなかった。最近、やっとともに、食事がとれるようになってきた。

「明日、久しぶりに、一緒にご飯食べない？」お母さんが言った。

「明日？ ごめん。明日は新歓コンパに行かないといけなくなったから、駄目だわ」私は残念だけど、断った。

「シンカンコンパ？」

「ああ、新人生歓迎コンパ。飲み会よ」

「変な略語使うのねえ。かつこ悪いわよ」お母さんが少し、呆れ声で言った。そうか？ 言われて、そんな気もしてきた。

「とにかく、ごめんね。幹事になって、絶対出席なん、今回」

「そう、いいんじゃない」お母さんが嬉しそうな声で言った。

「そう、かな」私は、何となく、申し訳なく思った。

「じゃあまた、今度。と電話を切ろうとする前に、お母さんが、私を呼んだ。

「敬」

「何？」

「あんたは、お父さん似よ。優しいんだから」

「何？」いきなりで、よく分からない。

「元気でいいのよ。楽しくなって、いいのよ」お母さんが、優しく言う。

「うん……？ まあコンパだし。場がしらない程度には、もちろんするよ」

「ええ、じゃあまたね」お母さんは、電話を切った。少し、妙な余韻を残しながら、私は受話器を置いた。お母さんの言うことは、よく分からない。

新歓コンパは、三条の居酒屋で、夜六時から始まった。

私の学部は、比較的、人数が多いし男女の比率も半々だから、助っ人を頼む必要はなくて、ラクだった。しかし、どうして院生の私が、新入生の幹事役を任されたのか、そのいきさつは、いまだによく分からない。

今年の新入生は、まだまだ、若くて、元気で、ビール一気飲みなんて、どこの席でもやっていた。私は、適当にしときなよ、と言いながら、皆に、お酒と料理がいき渡っているか、確かめながら、席を移り歩いた。

でも、この妙なハイテンションの空気の中にと、それだけで皆の楽しい気分が私にも伝わって、それに感化されてくる。

「せんぱーい、先輩も飲んでくださいよぉ」と、ほろ酔いの後輩一人が、私に焼酎をすすめてきた。この子、結構、飲めるクチだな。その子の隣の席が空いていたし、そこに腰を降ろして、一緒に飲んだ。他の新入生とも、たくさん話をした。新入生は嬉しそうに、大学の印象について語っていた。その子達は、ちゃんと夢があつて、将来のビジョンを持っていた。元気があつて、話をきいてて、私も楽しくなった。

九時にその居酒屋を出た。後はそれぞれ好きなように、二次会に行くなり、カラオケに行くなり、好きにして、と言つて、各自解散の形をとった。私は、来ていた二・三回生に後を任せて、京阪三条駅に向かった。

駅で、【丹波橋乗換】のボタンを押して、マンションまでの切符を買う。頭が少し鈍っていて、小銭を出すのに手間どった。電車に乗って、マンションに帰るまで、あまり時間を感じなかった。一応、本はいつも一冊は持ち歩いているけれど、読まずに、窓の外をばーと見ていた。

マンションのドアを開けて、すぐ手前にある電灯のスイッチを押して、台所を明るくした。鍵は忘れずに、ちゃんとかけた。足元がふらついているのが分かった。「まっずいな」と、言つて、私はくすくす笑えてしまった。上着だけ脱いで、そのまま、ベッドに落ち込んだ。こうやって、羽毛布団に、勢いよく倒れ込むのが、好き。ベッドに寝転んで、そのまま、ぼんやりして、両腕を頭上に伸ばした。天井と、それを一部遮る、自分の手の甲を見つめた。それだけで、くすくすと笑いが止まらなくて、それがまた面白くて、私は、そのまま、ふふつと吹きだした。

今日はすごく、気持ちよく酔つてる。頭がまだ、ふわふわして、ただ、面白い。

「今日は楽しかった」ふつと、独り言で、そう言つた。言つて、一秒、間が空いた。酔いは、その一秒で醒め切つてしまった。醒めて、もう一度、私は、自分の気持ちを反芻した。

今、確信できた。自覚したら、涙が込み上げてきて、どうしようもなく、果てしない、切なさが、私を包んだ。我慢なんてできなくて、私は横向きになって、号泣しだした。

今、分かった。私が最近抱いていた、『違和感』が。どうしよう。携帯に手を伸ばして、涙をこぼしながら、私はお母さんに電話をかけた。

電話がトゥルルルと鳴る間、私は何度も心の中で叫んだ。どうしようと思ひながら叫んだ。

私、確実に、元気になつてきてる！

お母さんが出た。「もしもし」

「お母さん」私は言つた。泣いてても、声だけは普通をよそおつた。「敬ちゃん？ どしたの。今日、飲み会は？」お母さんは、少し眠そう。

「うん、今終わって帰ってきた。お母さん、お父さんのこと、ききたいことがあるんやけど、いい？」

私はお母さんの返事を待った。

「……いいよ、何？」お母さんが優しく言った。ほっとして、私は尋ねた。怖いけど、きかずにはいられなかった。

「お母さんは、お父さんのことが今でも好き？」

「好きよ」お母さんは、きっぱり答えた。分かる。じゃあ—

「お父さんのことを、変わらずに思い出せる？」

沈黙の余白が数秒。電話での沈黙はとても長い。余白・余白・余白……。

穏やかで、あきらめたような声が、ぼつり、と返ってきた。
「忘れていつてるわね」

「忘れていつてるわね」お母さんの言葉が全身を駆け巡る。
やっぱり。

私は、たまらなくなつて、携帯を持った右手手首の少し上の部分で、顔の右頬を強く押した。こめかみのすぐ下で、顎骨に当たって痛くなくても、力は緩めなかった。

「嫌いにならないのと、忘れないでいるのは、違ふのよ」お母さんは、ゆっくり、淡々と言った。お母さんは、もう知ってたんだ。

そう、私もお父さんのことは、今でも好き。それどころか、お父さんが死んでからの方が、お父さんを愛しい存在だと、そう思う気持ちが強くなった。じゃあ、それだから、お父さんがずっと、私の記憶に留まりつづけるか、といえば、そうじゃない。お父さんが亡くなってすぐのときは、毎日、その日の半分以上を、お父さんの記憶と一緒に生活していた。死んだお父さんと、私は「今」を生きていた。

でも、二ヶ月経つて、半年経つて、一年が過ぎて、時間の経過に反比例して、お父さんは、確実に、私から離れていった。お父さんの記憶が、私の現在の生活に関わってきて、そこに占める率は、どんどん下がった。

今もお父さんのことは定期的に思い出すけど、最初の頃と比べたら、確実に、思い出す頻度は少なくなってきた。

それでも、お父さんは他の思い出の人達に比べたら、ずいぶん長い期間、そして沢山、私の記憶に留まっている。それは、「家族」として、そして「父親」として、お父さんを思い出す機会が、日常生活で多く存在しているからだ。

そう思ったら、ふと気付いた。この世にいなくなった人を、自分の記憶の中に、長く、多く、留めておけるかどうかは、その人との

生前の関係の深さと、その人を思い出す「刺激の量」で決まるのかもしれない。

今まで私には、仲良かった、たくさんの人がいた。学生の頃の友人。部活仲間。学校の先生。その人達と一緒にいたときは、その人達を「忘れる」感覚なんて覚えなかった。だって、すぐ隣にいたから。

でも、部活をやめて、学校が変わって、会う回数が徐々に減って、最近では、もう全く、会わない人も出てきた。

そうになると、私の中で、その人達を思い出す機会は、確実に少なくなっていく。その人達を忘れていつてるんだ。アルバムを開かないと、名前も思い出せない人もいる。仲が悪かったわけでもない。良い友達だった人がそうなる。

以前、いくら仲が良かった人でも、会わなくなつて「現実」から離れた存在になっていけば、いやでも私は、その人を忘れていく。そして、時折、「ああ、そういえば、そんな人がいたな」と、思うだけの存在になる。

夢い。

それを、私が冷たいからとか、淡泊だからだとか、人柄に説明を持つていくのは、多分、あまり意味がないと思う。事実として私達は、あらゆるもの忘れて生きていく。ただ、それだけなんだ。

お母さんの愛情と、お父さんに関する刺激の量で、お父さんをどれだけ多く覚えていけるかどうかは、お母さんにしか分からない。でも、お母さんも、いつかはお父さんを「ある人」として思うようになるかもしれない。

それは、私だって例外じゃない。香が死んで、この世界にいなくなつたら……私は確実に、記憶から香をこぼしていくだろう。香は私の心から、さらさらと、ゆっくりゆっくり、離れていくだろう。私だけの力じゃ、もう、どうしようもできない。

「お母さんが、お父さんを遠くに感じたときは、いつ？」私は、涙

をぬぐいながら、きいた。

「お父さんが亡くなってから、初めてご飯が『美味しいかな』って思ったときと、お父さんがいなくても、心から笑えるようになったときね」

「お母さん、しばらく鬱だったもんね」私は言った。

「あの頃は、一生こうやって、泣いて暮らすんだ、って確信してたわ」お母さんは、昔話を語るように、遠い感じで言う。

「ほっとした？」私は鼻をすすって、きいた。

「ほっとしたというより、一層、悲しくなったわね」

分かる。その感覚は、今ここで、私を感じている、そのものだ。悲しくて、切なくて、いつそ、壊れてしまいたい。

肩を丸めて、携帯に吸い込まれるような姿勢になった。母親のお腹の中にいる、赤ちゃんのようにも見えそう。本当に、赤ちゃんが羊水に守られるように、今、私も何かに包まれて、安心させてもらいたい、と切実に感じた。

こんな孤独感。生きていて、こんなに切ないことってあるものなのか。

そのまま、お母さんの言葉をききつづけた。お母さんの言葉は、孤独感を、さらに、大きくする。

「『あの人がいないと、私は生きていけない』と思っていたのに、『あの人がいなくても、生きていけるものだ』って、思えたとき、すごく、寂しくなったわ。人って、案外丈夫で、結局最後は独りで何とかやっていけるものなのね」お母さんは、少し悲しそうだけど、淡々と語った。

「その、『寂しさ』ってゆうのは、お父さんへの罪悪感も含めて？」私はきいた。

「罪悪感はなかったわね。私は、そういうところ、冷たいから。単に、人っていうのは、そんな風に生きるのかしらって、そう思っただけ。『永遠の変わらぬ愛』は、独りだけじゃ、つづけられないって、分かっただけよ」

「うん……」もう、何も言えなかった。多分、お母さんの言っていることは、真実だ。

香や矢和田が、もし、死んだりして現実に二度と私と顔を合わせることが出来なくなったら、多分、私は、一度は発狂するか重度の鬱になるか。とりあえず、心は粉々になるだろう。でも、かかる時間は置いておき、自殺をしない限りは、きっと私は、徐々に元気になっていって、また、現実を生きていくだろう。

毎日の矢和田は、いつか、二日に一度の矢和田になって、一日何十回、思い出す香は、一日数回の香に変わっていくだろう。

二人を思い出す瞬間は、私の人生において、確実に少なくなっていくだろう。

そして、いつかは「大好きな人がいたの」と、誰かに切なく話す、そんな日が来るのだろうか。

そのときは、もう、私の中で、矢和田も香も完全に「思い出の人」になって、私と現在を歩くことは、決してない。

そのときの私は、幸せなのかどうか。それはなってみないと分からない。でも、二人の居ない世界は、多分、すごく味気ないんじゃないかな。きっと淡白で、味気ない人生になる。

もちろん、これは私にも当てはまる。私が居なくなった人を忘れていくように、離れれば、私だって周りの人達から、忘れられていく。それはとても寂しくて、辛い。私の周りにいる人達は、私がその人達から疎遠になれば、確実に私を忘れていくだろう。もし、私が「死別」として疎遠になったなら、インパクトが強い分、多少は長く、多く覚えていてくれるかもしれない。でも、それすらも時間の問題だ。だって、私は、その人と一緒に「現実」を生きていないもの。一緒にいない人と、「心」だけで一緒に生きていくのは、大丈夫なのだろうか。いつまでも、もう居ない人を引き連れて、それで現実を生きていくのはどうなんだろう。そんな人生、生きていながら、死んでる気がする。あまり幸せだとも思えない。不健康な人生で、「人生」と言ってもいいのかどうかも朦朧としてくる。

「私は、好きな人とは、一緒に死にたい」携帯を耳に押しつけて、私は泣きながら、ささやいた。

「忘れるのも、忘れられるのも嫌だから？」

「うん」

「でも、それは偶然にするには難しいわねえ」

「うん……」お母さんは、普通に、怖いことを言う。

「そうでもない」と、これは解決しないのかしら」

「どういう意味？」私は、目をうつすら開けて、少しぼんやりした頭で、お母さんの言葉を待った。

「忘れる寸前まで、その人の思い出が素敵なら、それはそれで幸せじゃない」お母さんの口調は、優しく、静かで、落ち着いていて、今までお母さんと話をしてきて、一番穏やかな物言いだと思えた。

そうか、そうなのかな。私は、ぼんやりしながら、そのまま涙をばらばら落とした。

思い出は、美化される。これも、そういうことなのかな。

もう少し、これは自分で考える必要がありそうだ。

私が、それひとつばかり考えていては、日常生活は回らなくなる。気のせいだろうか、矢和田の態度が、何かおかしい。

そう思うようになったのは、ここ最近。何かおかしいか、分からないけれど、何となく、矢和田が変に見える。矢和田の研究室で、コーヒーを飲みながら、私は首をかしげて、矢和田をまじまじと見つめた。

「何だよ」矢和田が笑ってきく。

「……」何と答えればいいんだろう。「何となく矢和田がおかしい」なんて、言ってもいいんだろうか？

「矢和田、最近元気？」矢和田が「？」を空中に泳がせた。そして、「元気だよ」と、つくり笑いをして答えた。わざとおちゃらけて、う、うん、そうだね。みたいな。

「敬。最近、香ちゃんのお見舞い、行ってる？」矢和田が、ふいにきいてきた。

「うん？ 先週木曜に行つて、新歓コンパで忙しかったから、それから、しばらく行けなかったし、それは残念。明日、会いに行こうと思ってる」私は、嬉しくて、笑って言った。一週間ぶりか、香に会うのは。

「そっか」矢和田が微笑を返してきた。

「あの日から会ってないんなら、香ちゃん、久しぶりで、喜ぶだろうなあ」

矢和田が言った。

「うん。うちも会えるから、嬉しい」私は言った。と、研究室のデジタル時計が、授業開始の知らせに、ぴぴぴと小さく鳴った。

「おっと、行かないと」矢和田が言った。

「じゃあ、先に出るね」私は、椅子から立ち上がって、バッグを持って、ドアの鍵を横に回した。ドアを開けながら、斜めに矢和田を

見た。矢和田は椅子に座ったまま、微笑んで、左手を軽く上げていた。いつもの、別れのあいさつ。

廊下に出た。普通にドアを閉めて、いつも通り。私は、右手のエレベーターの方に足を向けて、そっちに進みながら、今度、矢和田とお好み焼きを食べに行こうと考えていた。

今日は、5月のわりに少し肌寒くて、上着を羽織って香に会いに行こうかどうか、少し考えながら、私は朝のコーヒーを飲んでいた。十時頃、テーブルの上に置いてあった携帯が、震えているのに気付いた。私はもう着替えて、化粧もして、朝食の食器を洗っているところだった。三回以上バイブがつづいたから、着信だと分かってすぐ側にかけてあった、タオルで手をふいて携帯をとった。携帯電話は、水気にほんと、弱いから。

矢和田からの着信。めずらしいと思った。

「もしもし」私は電話にでた。

「おはよう、起きてたか？」矢和田の声。いつも通り……？

「うん、もう起きてたよ。どしたの」

「……ごめん、敬。電話つても、悪いと思ったけど」矢和田の前置きは、フロアーになってもいない。私は、部屋の温度が、三度下がったような感覚を持った。矢和田、耐えられなくなったんだ。

矢和田が続けた。

「香ちゃんへの手紙、読んだ」予想外の内容に、私はほんとに、安堵感を持った。でも、そんなものは、一瞬にして、次に来たショックに打ち消されて、そのまま、恐怖と恥辱が、ずどんと両肩に、落ちてきた。あの手紙！

そして、さらに、追い討ちが。「香ちゃんにも、読んできかせた」「何で」私は、思わず叫んでしまった。何で、何で矢和田があの手紙を？

「あの日、敬が面会に行ってるの、知っていたから、俺も香ちゃんに会いに行こうと思ったんだ」私の頭は、急激に醒めだした。

あの日。

そうだ、確かに矢和田は、昨日、「あの日」と、言った。手紙を読めなかった、あの日。共通の話題として、私は無意識に了解して、

矢和田と会話を続けてた。手紙の話、矢和田には言っていなかったじゃないか！

「俺が思ってたより、敬の気持ちは、すごい深くて、大きかったんだな」矢和田が淡々と言う。感情がよみとれない。

私の頭と全身が、一瞬にして冷めだした。5月じゃないぞ、ここは。

「矢和田、矢和田。切らないで。お願い、きいて欲しいの」私は焦って、矢和田に懇願した。嫌、これだけは止めて。誤解されたまま、別れるのは、それだけは絶対嫌。

「うん、大丈夫。きいてるよ」矢和田はゆっくり、言った。

「私は、香と、手紙にあった、希望通りの関係になれなかったから、矢和田の側にいたんじゃない。そんなんで、矢和田と付き合ってたんじゃない、ない」

「うん。それは分かっている」矢和田が静かに言った。やっぱり、電話だけじゃ、矢和田をしっかりと理解できない。会って話せない気持ちも分かるけど。

「敬がそんな性格だっていうのは、もう、よく分かっているよ」矢和田が言った。「俺だけに対してじゃなくて、他の誰に対しても。誰かの『代わり』として、人付き合いすることを嫌っていることも、分かっている。それって、すごい難しいのに、敬は優しいから、それで孤独になっても、それに耐えているんだよなあ」

――何で？

言葉は詰まって、視界が潤んできた。部屋が、水槽の中みたいに見え、揺らめいて見える。

何で、矢和田はそんなに、私のことが分かるの。

「矢和田、矢和田がすごく大事。大事なん、絶対」

「うん」矢和田がうなずく。

「誰の代わりでもない」

「だから、俺はお前の一番になれない」言葉が、空気ごと、私の心を、刺した。刺された。息が、止まった。矢和田の言葉が消えるの

と、同じ位に、電話もぶつり、と、切れた。

そして、玄関のドアから、遠ざかる足音がきこえた。かつーん、という、冴えた音。私は矢和田だと分かった。矢和田としか思えなかった。矢和田じゃないと、ダメだ。

思ったと同時に、脚は、もう玄関に向かって、何も考えなくても足はサンダルを捕まえて、手はチェーンを外して、鍵を横に回した。ドアを開いて、私は叫んだ。

「矢和田」階段を降りようとしていた男性の、後姿。矢和田は、ほんとに、グレーが似合うなあ、と思った。矢和田が、こつちを振り向いて、「何で分かるのかな」と言いたげな、軽く、悲しそうな笑みを浮かべた。そのまま、黙ってる。

動いた距離は五メートル？ たったそれだけで、私の息は、八百メートル走の直後のように、乱れていた。このまま別れたら、絶対一生、後悔してやる。私はもう、半分意地になっていた。

「矢和田、うまく伝わらないことは、もう分かってる。でも、言わせて欲しい」私は、荒れた息を抑えて、精一杯の懇願を込めて、矢和田に言った。矢和田は目で「いいよ」と、私を促した。私は、少し、ほっと息を小さくはいて、そして、思いを伝えた。

「手紙は、三年前のままで、止まってるのよ」矢和田が、不意をつかれたときのような、そんな顔を一瞬見せた。

「うちは、世の中で、変わらないものなんてないって、そう、思ってる」私はゆっくり言った。感情が、高ぶってくると、私は早口になってくる。それに、涙腺が、ゆるんでしまう。でも、泣くもんか。泣いて、感情で矢和田に訴えるなんて、嫌だ。

「香への気持ちだって、三年前とは、確実に変わったよ。今は三年前より、香のことが、好き」正直に言った。そう、私は三年前より、確実に香が好きで、大事になった。

もちろん、変わったのは香だけじゃない。

「矢和田に対しても、三年間でかなり変わった」声が震えた。「一緒にいて、あんなに楽しかったのに、三年前から、矢和田への気持ちと同じだなんて、ありえない。そんなんだったら、じゃあ、私と矢和田のあの三年間は何だったんだ、って話でしょ」

言って、一層実感がわいてきた。そう、そうなんだ。知り合ってから、三年間。矢和田は、私にとって、確実に近い人になって、と

ても大事な人になっていった。香への気持ちとは、少し違った『恋人』の矢和田への気持ち。香への愛情と並行して、矢和田への愛情も、着実に大きくなっていった。

そう、そうなんよ、矢和田。

「一生ものだと、思える友達は、香。最高の恋人だと思えるのは、矢和田なん」今、はつきりした。

「もう、二人を比べるなんて、無理！」

身勝手の発言だと思った。私、この前まで「香が一番大事だ」って、矢和田に豪語したクセに。どうなんよ、おい。でも、今は、本当に二人とも同等に大好きで、大事なの。

矢和田が一度私から離れて、また戻ってきてくれたから、私は、矢和田に、今まで以上に、心をゆるすようになった。矢和田が、心ゆるしても、大丈夫な人になった。私は、矢和田がもっと好きになった。

私はどこまで、この人を好きになるんだろう。以前、そんなことを考えて、私は、独り、怖がっていた。人を好きになりすぎると、なぜかどこかで、怖くなる。香だけに抱いていた、この感覚。矢和田にも抱くようになった。

「香と十五年、一緒に生きて、三年前に矢和田と出会って、一緒に、過ごして」

言葉が詰まる。

「人生において、本当に愛しいと思える人は、何も一人じゃないって、思えるようになった」

もう、声は大きくなって、涙がこぼれる。ああ、もう！これ以上のうまい言葉が見つからない。もっともっと、言いたいことが、伝えたいことがあるのに。全部、矢和田に理解してもらいたいのに。もどかしくて、悔しくなる。

「敬、敬。あとひとつだけ、教えてくれ」矢和田がつぶやいた。目が赤い。

私は矢和田の質問を待った。

「敬は、それでも、叶うなら、誰の側に一番居たいと、思ってるんだ？」私の涙がするすると退いた。矢和田が言わんとしていることが、よく分かった。確かに、今の私の話だけじゃ、それはハッキリしていない。私は、ありったけの気持ちを込めて言った。

「矢和田と結婚したい」

「本当にそう思ってる？」矢和田が、さらりときき返した。矢和田の返事が、胸に、さくりと、ささった。うう、矢和田の前じゃ、誤魔化しなんて、無意味だ。

「敬、正直でいいんだ」矢和田は、もう、覚悟を決めているみたいだった。どんな表情とも言えない、読みとれない表情で、私の返事を待っている。

私は、適切だと思える言葉を頭の中で必死に探しながら、もう、矢和田の言うように、素直に告白しようと思った。矢和田は、本当に私を理解してる。さっきの答え、私の本音を語るには、不十分だった。言おう。私は覚悟して、かすかに、こくりと唾を飲んだ。

矢和田と、私の視線は、お互いに交わっている。私は、目をそらさず、矢和田に言った。

「ごめん。両方と結婚したい」言えた！

感激と同時に、私は「？」と思った。矢和田が、キョトンとしている。

やっちゃった！私は、もつと良い言い方はなかったのか、と今更、後悔しだした。

「……つまり？」矢和田が、ゆっくり、きき返した。明らかに動揺してる。

「形式的な形としては、まず、香とは、養子縁組を組んで。その後、矢和田と結婚したいと、思ってた」ちょっと女の子らしく、言ってみた。「えへ」みたいなジェスチャー、込みで。

矢和田は全然、動かない。

「夢があつたのよ」私は続けた。これだけだと、誤解されそうだから包み隠さず、全部伝えようと思った。

私には、極上の、わがままな夢があった。こんなこと、香に話せないことは分かっていたし、叶うはずないのも知っていた。私のわがままさの集大成。言ったのは、今が初めて。

「いつか、自分が、結婚することになるなら、香と、香のダンナとも一緒に、ひとつの家に住んで、四人で一緒に暮らしたい、と思ってたん」

一生誰にも言わないで、私の内に、理想としてしまっておくつもりだった。こんな形で、言うことになるなんて。予想もできなかったな。

四人で住むなら、土地はどこでもいい。北海道でも、沖縄でも。でも、離れ小島はちょっと嫌だな。できれば、少し田舎で、おっとりした空気の中だと、すごく嬉しいなあとまで思っていた。やっぱり、空気は澄んでいる方が良いでしょう。

私と、私のダンナ。隣には、香と香のダンナ。香が、香のダンナとばかり話していたら、私は、冗談半分で香のダンナに嫌味を言うやきもちをやく。私はもちろん、自分のダンナも、香も平等に接する。難しそうだけど、努力する。

香のダンナについては、私は別にどうでもいい。知ったことじゃない。香をヨメにできただけで、ありがたいことだと、思ってもらわないと、私が許さん。だから、私のダンナと、香のダンナが親友だったら、これは解決するから、そうだといいなあ、とまで想像してた。

何て、身勝手な奴なんだろう私は。それに、まず、ありえない。百パーセント実現しない。でも、私は、現在完了形で、そんな夢をこれから見つづける気が、満々だ。このバカな夢は、今までも、そしてこれからも、私の理想の夢でありつつける。

「バカでしょ」

言葉にすると、一層自分が、バカだと思える。私は、矢和田をじっと見て、矢和田の反応をうかがった。矢和田、今、あなたは何を考えてる？

声をかけようと思ったら、そうする前に、矢和田が、しゃがみ込んだ。アスファルトの廊下に、ぐったりと。そして、ぶふっと、吹きだした。次は大笑い。

矢和田が大笑い。

どないしよう。私は冷静に焦った。予想外だ。

とりあえず、そのまましばらく、矢和田を見守って、矢和田の次の行動を待ってみた。でも、矢和田がなかなか笑いを止めないから、私は、段々、何だか、すごく恥ずかしくなってきた。顔が熱い。

「あきれないで」私は、矢和田にストツプをかけた。矢和田は、まだ体を震わせて、小刻みに笑ってる。そんなに、私は面白いことを言ってしまったのだろうか。矢和田と私の、笑いのツボの違いについて、真剣に、悩んだ。

矢和田が、顔を下に向けたまま、手招きをした。私は、近づいて、矢和田の前に、しゃがんだ。矢和田が近い。矢和田がぼんぼんと、私の頭―何ヶ月ぶりか―に、触れて、そして、優しく抱きしめた。懐かしい。矢和田のセーターから、矢和田のにおいが、あふれる。そのとき、やっと気付いた。気付いて、私は、血の気が引いた。「矢和田、矢和田ごめん」矢和田は、泣いてた。矢和田の涙が、私の肩を濡らした。にじんで、私のストラップが、うつすらと、服越しから透けて見えた。

やっぱり、困らせてた、傷つけた。私は震えた。

「や、違うよ、敬」矢和田が、震えだした私の両肩を持って、顔を上げて、私の目を見た。「今、ほんとに、敬の彼氏でよかった。って思ってたんだ」

やられた。今度は私が、泣きだしてしまった。しかし、何だろっ、泣くのがこんなに嬉しいことって。こんな涙があるなんて。あるもん、なんだなあ。私はぼろぼろ涙をこぼして、矢和田を抱きし

めた。矢和田も、そのまま、強く抱きしめてくれた。

帰ってきた。矢和田との、こういう関係。

「帰りがかった」ホント、小さな呟きだったけど、矢和田はききとったかも。

やっと帰れた、心やすまる、この処。やっぱり、矢和田は恋人だ。「人が来たら、『何してんだ』って思うよ」しばらくして、私は今いる場所が、マンションの階段前だということに気付いた。

「そうだな、俺等、バカップルだな」矢和田がくすくす笑った。

「とりあえず、立つ？」

「このままでいたい」矢和田が、だっこのように、言った。あなた矢和田さん？ 最初、びっくりして、信じられなかった。こんな矢和田は初めて見た。大人で、冷静で、思慮深い矢和田に、こんな一面もあったんだあ。何だ、矢和田も、結構、自分を出さない人なのかも。

私は、すごく、嬉しくなった。三年目にして、矢和田の別の一面が見れた気がして、もう、それだけで、今日は周りのことは、まあ、いいか。という気になった。ま、なにせ、今、私達がいるのは、私が住むマンションの敷地内だ。他の住人が来ても、もう、気の済むまでアスファルトの上で矢和田とくっついていよう。

アスファルトに、ずっとくっついたままの、私の脛はひんやり冷たい。矢和田の懷は、穏やかに温かい。そんなアンバランスな温度差を身体に感じながら、私は、改めて、矢和田と居て得られる、このほっとした空気を、ゆっくり、全身に沁み込ませた。

季節は、もうそろそろ初夏に入る。悲しみも大気に溶けて、陽光となつて、地上に降り注ぐ頃だろう。

今朝は、いつもより時間をかけて、朝食をとった。ゆっくり、何を考えるでもなく、ただゆっくり食事をとって、ゆっくり、香に会いに行く準備を整えた。

病室に入る前に、一瞬立ち止まって、そしてゆっくりドアノブを回した。まず、体半分だけ香に見せて、「よ」と、言葉をかけた。香は、返事はしない。私は目を細めて、微笑んで、ドアから離れた。香の前に来て、「借りますよ」と言って、側の丸椅子を引き寄せて座った。今日も、天気は快晴だ。香に直接、見せてあげたいと思った。

「久しぶり。来る間隔が開いたけど、元気やった？」私は香にきいた。顔色はそんなに悪くないから、ほっとして、香の頭を少しなでた。

本題に入ろう。私は静かに、心の準備に入った。

「矢和田にねえ、あの手紙、読まれちゃったわ。香も、もう、矢和田からきいたんだってね……きいて、引いた？ 香……」私の声はもう、震えてきていた。恥ずかしさと、切なさ、怖さが、それぞれ私の中で独立して、交互に私に襲いかかってくる。

私は、バッグから、封の切られた香への手紙を出して、もう一度、自分でこの手紙を黙読し直した。

香へ

今日で、うち、二十一歳になったで〜！実感はわからないけど、とりあえず、二十一歳です。

二十一歳になって、今、普通に、よく二十一年、生きたな〜って

思うわ。それで、二十一年生きて、香にお礼を言いたいことが、いっぱいあるから、これをチャンスに、香に感謝の気持ちを伝えたいと思って、この手紙、書きました。

今まで、一緒にいてくれて、ありがとう。

香と出会ってから、もう、十一〜十二年になったけど、出会ったときは、香が、これだけ大事な人だと思えるようになるとは、もちろん考えてなかったですな、当時はな。友達になったのは、小学校からだし、こちらは、八〜九歳か。

その頃は、まだ香は、私の人生の十分の一も関わってなかったけど、今は、私の人生の二分の一に、香が関わっていることになるんやね。

このまま、うちが順調に生きていけば、三十歳には、うちの人生の三分の二に、香がいてくれたことになるワケだ。なんて幸せなんだろうって、思うよ。

時間を重ねる毎に、私の人生において、香の占める割合が増えていくんやで。これは、もう奇跡やろ。

とね、うちがこうやって、香にメッセージを綴ってて、「幸せ者だなあ」って思えることが二つあるん。

まず、こうやって、思いを伝えたいって思える人が、私の人生において、こんなに早い時期から現れたってこと。

そして、この伝えたい思いを「伝えても、許されるかな」という可能性を感じることができるということ。

この二つがあるから、うちは、いつまでも香が好きで、香と一緒にの人生に幸せを感じることができると、そう思う。

香が、私と、もっと一緒にいたいって言うってくれるんなら、喜んで、香の近くにいたいよ。もし、うちと結婚したいって言うてくれたなら、即、結婚するで。んで、そのときのうちは、多分、すごい幸せやと思う、なあ。

まあ、つまり、香が大事なんですわ。社会的立場も、経済力も、外見も内面も、全部ひっくるめて、香が好きなんですな。もっとゆ

っちゃえば、香に関わる全てのモノも、大事で好きだと思えるんですわ。香が就く職業なら、それが一番、崇高な職業に思えるし、香がいるなら、どんな場所でも、そこが一番贅沢な環境だと思えてくるんです。香がいるから、周りが良く見えるん。つまり、香が周りを綺麗にしてくれてるってことよ。

自分でも、なんて鼻^{ひいき}分なんだろうって思う。でも、それで幸せ感じられるなら、別にいいんじゃないかなあって思う。あとは、社会に迷惑かけないように注意して生活してれば、うちもハッピー、皆もハッピー！いいじゃんねえ、これ。

そもそも、価値観ってそういうモノだと思うしね。自分が好きなモノだから、それが素敵に見える。自分の好きなモノだから、それが美味しい。自分にとって必要な人だから、その人が、限りなく大事。価値観ってそういうもんじゃないのかなあ。

だから、人それぞれ、幸せの感じ方が違って、幾千通りの幸せを感じることができるんじゃないのかなあ。

それで、幸せをたくさん感じられる人って、きっと、幸せの振り子幅が大きいんじゃないかなって思う。私も、そうなのかなあって最近思った。なんだかんだいって繊細やし（笑）。でも、周りとか、自分の感情に敏感なのは、良いことだと思う。傷つきやすい分、幸せもいっぱい感じられるし。ただ、過敏になりすぎると、自分がしんどくなっちゃうから、そこは微調整やんな。

そうやって、私は敏感に周りと付き合ってきて、それで香を、ここまで想うようになったんよ。うちにとって、香は絶対、必要だって想えるようになったんよ。

「助けて欲しい」って言わなくても、助けてくれる人が、この世の中にいてくれるって、分かったとき、うちは、どれだけ幸せな環境にいるのかが、分かった。実感した。香が助けてくれなかったら、私は、きっと、こんな私になってなかった。

束縛は、窮屈でいかと分かってるけど、ごめんやけど、固執させて。譲れませんわ、これは。

香、私は香が本当に大事。

十二年間、一緒に居てくれてほんとにありがとう。

敬より

あつぱれ。

読み返して、あらためて自分を誉めた。すごいよ、ここまでくれば、もう、バカも滑稽も乗り越えて、天晴れ。だ。

ほんと、なかったことにできないのかなあ。私はうなだれた。

でも、あの手紙の内容、あれは私の本音で、誤魔化しは一切ない、私の本心だった。それは間違いない。だから、今日は、香に「付け加え」を言いに来た。黙って過ごすより、言うことに決めた。言いたい、香がまだ、私の隣に居てくれるうちに。

「手紙は、三年前やん？ だから、あの内容が、今もそのまま、私の気持ちってワケじゃないんだ」言うのに、ためらう。本人に面と向かって言うってのは、ほんと、恥ずかしいし、難しい。

「三年前より、私は香のことが、もっと大事になったよ」私は、言った。「今までずっと、泥沼みたいな場所で、もがいてばかりだった最低なうちに、変わらずに笑いかけてくれて、一緒に考えてくれたり愚痴きいてくれたり……『助けて』って言えなかったときでも、香から助けに来てくれた」

私は、今まで、香に助けられてばかりだった。香なしで、問題解決したことってあったかな？ ない。どんなときでも、間接的であっても、香は、私の心を支えていてくれた。

信仰みたいなものか、ある意味。ふとそう思った。絶対的な「何か」に対して、揺るがない信頼を寄せて心の平安を求める。じゃあ、これは、「香教」か。私はふきだした。悪くない。

ただ、香は当たり前、人だ。いつか消える。この違いは果てしな

く大きい。香がいなくなったら、私はどうなってしまうのだろう。そんなことは、以前からつらづらと考えていた。でも、香がこうなってしまうてから、真剣に考えるようになった。四ヶ月間、私は切実に答えを探していた。

「香がいなくなったら、うちはどうなるんだろう、って、ずっと考えてたんだ」椅子に座ったまま、香に向かって左側から、私は香を眺めた。香の左手を軽くとって、香の手の甲を、ゆっくりなでた。

手につながる、香の白い手首を見る。

以前より、ずっと白く、細くなつた手首。でも、手にはまだ、ぬくもりはあるし、脈は、心電図がぴつぴつという機械音で、「まだ続いていますよ」と、垂れ流しにその情報を伝えてくれる。まだ、ここにある。いつまで続くかは分からない、命の証拠は、まだここにある。儚いけれど、まだちゃんとここにいてくれている。

香が生きているという実感だけで、涙がにじんできた。でも、言いたいことを、ちゃんと言うまで、ぐすぐす泣いてるワケにはいかない。ちゃんと言わないと。

「うちらさ」私は香に話す。「なんだかんだ言つても、別々の人間だから、ほら、いつかは、どっちかが先に死ぬときがくるよ、なあ？」

香は、穏やかな表情のままだ。

「で、もしな。香が私より先に死んだら？　って、考えたんだ」思つてるままだを言おう。私は決心した。

綺麗ごと、誤魔化しもやめよう、と。

「もし、香が、今死んだとして、私がこの後、何十年も生きることになったら……私は、少しずつだとしても、香を、忘れていつて、しまつかも、しれない」香の左手を握る右手に、力が入ってしまった。こわばつて、次は、震えが襲ってきた。

「もちろん、忘れたくないから。色んなことで、香を思い出して、思いつづけて、いくで。写真とか、思い出の場所とか、香の好きだった物とかで……でも、ここに香が居ない限り、きつと、多分、そう、限界はくると思うんよ。私の現実の生活が、きつと昔の記憶を、少しずつ追いやつていくと思うんよ。そやつて、香が押しやられて……そうなるんじゃないかって思つて……」眉間にしわが寄った。下唇を噛んで、泣きそうになるのをこらえて、私は、そのまま、やり

きれない気持ちに包まれた。

現実つて、どうしてこうも残酷なんだろう。

「そんなことない、違うよ」と、否定したい。でも、多分これが将来起ることだろう、と、今は思えて仕方ない。まだ起きてないから、確証なんてないけど、否定される可能性より、そうなる予感の方が、大きい気がして仕方ないんだ。

何を冷静に。親友のことなのに、何冷静にそんなこと考えてるんだ。

「世界で一番、ひどい、友達やろ」

一生ものだと誓う親友を、忘れていくだろうと予感する自分。私つて、一体何なんだ。

気付かない方がよかったのかな。何度もそう思った。でも、こう思えてしまった。そうなるだろうと思うようになってしまったんだ。思ってしまった以上、じゃあ、そこから私はどんな風に生きていけばいいのか。そう考えるようになった。悲観するだけじゃ終われない。そんな人生、人生として、どこか歪んでいる気がする。

どんな風になっても、人生つて、人が幸せになるためのものだって、そう信じてる。大切な人が死んでも、幸せにはなれないのかな。私は、背中を少し曲げて、前かがみの姿勢になって、香の左手を、私の両手でとった。香のひじを曲げて、ひじから手までを浮かせて私の顔の前まで、持ってきた。ひじはちゃんと曲がることは知っていた。だからここなら、動かしても、香は痛がらないだろう。私の両手に支えられて、左腕はベッドから浮いていても、香の顔は、天井に向いたままだ。

香は決して動かない。その香の、眠る顔を、斜め上から少しの間、私は眺めた。眺めて、またすぐ、私は、香の左手に視線を戻した。私の両手にすっぽり収まる、香の小さな左手。

「何か、ミサでの、お祈りみたいだな」私は、少し笑って、香に言った。でも、ほんとに、祈りに近い気がした。祈りと、そして懺悔。香への懺悔を、香に告げるんだ。

愛しい人を忘れていく中で、人はどうやって生きていく？　こんな予想における、仮定から導いた、私の結論は、こうだ。

「もし、本当に、香を忘れていってしまったても……香、これだけは、今、確信してる」私は、目を閉じた。「段々、思い出す回数は減つても、その都度思い出す、香の記憶は、全部、世界で一番、綺麗な記憶ってことよ。記憶からこぼれ落ちる、その一瞬間前まで、香の記憶は、何よりもあつたかくて、いいものに決まってる。それで、うちは、それを思い出すたびに、きつと、そのあつたかさのせいで、泣くに決まってるんよ。『香効果』は、スゴいんよ、だから」

言いながら、勝手に涙があふれてるのに気付いた。涙は、香の左手を握る、私の両手の甲に零れ落ちる。泣くほどに、頭がはつきりしてくる。私はまた切なくなつて、やりきれなくなつて、今まで生きてて、一番、香の存在を感じるのは、今だ。と、確信した。一度深呼吸して、しばらく流れるままに、私は涙をそのままにしておいた。でも、何で泣いているのか、よく分からない。とにかく、涙が、ほとほと落ちて、落ちた分だけ気持ちが悪われていく感覚だ。

「香」香の左手に、私の右頬をつけて、もう一度、私は香を、呼んだ。「香」

「愛していくから」言つて、言葉は、私の一生の、誓いになった。私は、香を愛してる。そして、愛していく。

だから――『だから』の次は、もうない。

ただ、愛していく。

香がこの先、眠つたままでも、目覚めたとしても、目覚めて半身不随になつていても、記憶喪失になつてても、また新しい彼氏をつくつても、もう、どんな風になつても、香が私を受け入れてくれるのなら、私はそのときの香をそのまま愛して、そして、記憶の果てまで香を思い続ける。そうすると、決めた。

愛するって、決断するものなんだなあ。私は目を瞑つて、閉じられた視界に広がる細かな砂金のような光をずっと見ていた。

もちろん、私にとって、香は「愛せて当然」の人だ。
「だから、もう覚悟しろよ、香。香は、うちに一生、愛されて死ぬんだ」私は、はにかんで、香と一緒に泣き笑いした。

今日は、朝から、矢和田と京阪宇治駅で待ち合わせ。デートだ。初夏の宇治橋は、本当に気持ちいい。矢和田と少し、ドーナツシヨップで時間を過ごしてから、三室戸駅みむろとの方にある、有名な茶房で、抹茶づくしのお昼を、食べた。

もう一度宇治橋の方に戻って、二人でのんびり、橋島たちばなに架かる、朱色が映える朝霧橋あさぎりを渡った。穏やかな天気が心地良い。この橋から見る宇治川は、宇治橋から見る宇治川より、綺麗に見える。水面は、さらさらと、銀のしずくをまきながら、緩やかに、先へ先へ流れていく。橋の位置が、川に近いせいだね、きっと。そう、二人で話した。

宇治川先陣の碑は素通りで。橋橋を渡って、あじろぎの道に入っただ。そこから、矢和田と、宇治川と宇治橋と一緒に眺めた。とろとろと過ぎる時間。ただ、一緒にそれを見ていた。

幸せだと思った。こんな日があることに、感謝した。

「俺も、いつかは死ぬんだよなあ」矢和田が、ぽつりと言った。

「長生きしてね」矢和田の方に軽く向いて、私は言った。「できれば急病とかも、嫌よ」

冗談交じりで、私はお願ひした。

「病気かあ。病気つてのも、ほんと怖いよなあ」矢和田が、目を細くして、つぶやいた。

言えるかな。私は思った。

「矢和田」

「ん、何」

「矢和田が倒れたときも、ずっと一生、側に居る」矢和田が少し、間をつくった。そして、ゆるやかに、微笑んで、矢和田は丁寧言葉を返した。

「離れていいんだぞ」

「離れる方が辛い」私は微笑んでみせた。最後まで一緒が、いい。

矢和田が、私の手をとった。私の指先に、矢和田の指先をあてた。矢和田の親指の腹で、私の薬指の爪を、ゆっくりなでる。そして、そつと手をつないで、一緒にはにかんで、微笑んで、表参道の方に、二人でゆっくり歩き始めた。

「ソフトクリーム、食べに行かないか」矢和田が言う。

「うん、いいね」私は答える。

「敬は今日も抹茶？」矢和田がからかう。

「今日は、ほうじ茶アイスにする……矢和田、抹茶にしない？」そうして表参道を歩いていると、携帯電話が音を立てた。いつもは留守電にしてあるから、ほおっておくけど、なぜか、今日はとる気になった。矢和田に謝って、携帯を開いた。

おばさんから。

「もしもし。敬ちゃん」おばさん、焦ってる。

「……どしたの？」私は、鼓動が速くなった。

「ちよつと、きいて、きいて」おばさんはそう言っ、黙りこくった。何？何をきくの？そう思いながら、耳を携帯に押しつけた。

押しつけた、スピーカーの先から、その先から、途切れるような、音が響いた。

「あう……」とつさに左手で、口元を押さえて、そのまま私は、一氣にむせび泣いた。

香！

「きこえた？ 敬ちゃん！香、さっき、起きたの！」おばさんは、もう感情を隠さないで、私に、喜びを伝える。

突然、私の体が、がくんと動いた。矢和田が、私の手を引いて、私ももう、走り出していた。

「矢和田」おばさんの声、矢和田にも、つつぬけた。

「行こう」矢和田はさらに、私を引っ張って、スピードを上げた。

私は、止まらない涙はそのままにして、笑って、矢和田と京阪宇治

駅に向かって走る。

宇治橋を疾走しながら、横目で宇治川を見送って、ほらもう京阪
宇治駅はすぐそこだ。

エピソード

「俺の彼女はレズビアン」

「何かの映画？」

「ノンフィクション」がやがやとやかましい居酒屋で、俺は同僚の笹地を、テーブルの下で、ガツンと蹴った。

「おいおい」

「う、すまん」こんなに酔って、態度が荒々しくなるのは、何年ぶりだろう？ 笹地も驚いていた。

彼女の危機は、俺の危機。

こういった考えは、どの彼女に対しても、以前から持っていた。自分の彼女が困っていたら、精一杯助ける。彼女の愚痴も、弱音も、全部きいて、俺なりにできることをやる。今まで付き合い合ってきた彼女に対して、それが当たり前だった。

彼女の親友の危機は、俺の危機。

そうなってしまう彼女は、敬だけだろうと思う。

敬ほど、人付き合いに不器用で、敏感で、優しい女の子はいないと思う。

付き合い始めた頃は、社交的で、快活で、賢い女学生だなあと思っていた。

恋をして、恋人になって、ゆっくりと近づいて、「敬は普通の女の子じゃない」と、やっと気付いた。

いつ、誰と話すときでも、最大限の気を使って、言葉を選んで、毒をはかない。どれだけ仲良くなっても、一線引いて付き合い合っ感覚。それは友人でも恋人でも変わらないようだった。

恋人に対して、そんな付き合い方をするなんて、そんな感覚、俺には無くて、最初はとも戸惑った。

だから、俺は戸惑いを隠すためにも、頑張って頑張って頑張っている種の紳士を装っていたのだ（敬は、あれが俺なのだと思ってい

るかもしれない」。

あんまりくだけてくれないから、俺は、敬は実は誰も信用していないんじゃないかな、なんて思ってしまうときも（少しだけ！）あった。

でも、今はそうは思わない。敬は全面的に人を信頼できる子だ。信頼するだけに、相手から、何か嘘をつかれたときとか、誤魔化しをされたときの反動はきつくて、それに耐えている感じた。

敬は繊細なのに、頑なに鈍感になろうとしない。

俺は、敬の気持ちを、もっと知りたかった。親友に、あそこまでかけられるのは、実はとんでもなくすごいことだと思えてきた。

「俺はお前と親友か？」

笹地が気持ち悪そうな顔で、俺を見た。

「いまさら、何を言ってるんだ？」俺はビールジョッキ越しに笹地を見て、ふふつと笑った。

あ、今、俺、ほっとした。

友人ってのは、ラクな関係だけど、あいまいな関係でもある。

「お友達になりましょう。今日からあなたと私は親友です」

といって友達になった（と仮定した）って、それは「お友達ごっこ」であって、「友達」ではない。

俺は今まで、そんなに、「友人の定義」なんて考えたりはしなかった。

でも、最近は考えて考えて、考えすぎて頭が痛い。法律に、「友人とは法律でこれこれと決まっております」なんて定義しておいてもらいたい。

俺には、敬ほど自分なりに物事を深く考えるような習慣が無かった。

敬は、隠れ哲学者だ。自分で「哲学してるのよ」なんて言わないし、自覚も薄いみたいだけれど、少しじっくり話をしたら、すぐに分かる。

敬は一般の常識を知っていても、それを鵜呑みにして自分の行動

の指針にしたりはしない。自分で考えて、思考の底に根を下ろして、自分の意見つてものを、がちり持っている。で、今回は、俺との関係を崩してまで、意見を言ってくれたわけだ。

言われてよかったと、今なら思える。あのとき、その場限りの繕いで、「誰よりもあなたが大事」なんて言われていたら、きっと俺はもっとシヨックが大きかった。

敬は正直だから、すぐに雰囲気で分かる。俺は、敬の真正直さが大好きだったから、真正直に言ってもらえてよかった。それに、敬がどれだけ言うために、ためらっていたかも知っていた。

言いたくないことをききだしているのも、分かった。

それだけで、俺は充分に、そっぽ向かれたっていい男だったと思う。

俺は、少し酔いの回った頭で、これからの指針をうんうん考えた。

「……ばあちゃんのところに行こう」

言葉は言霊になって、俺を衝き動かしてくれた。

「久しぶり、ばあちゃん」

「あんれまあ、また来たのかい」

「ふふっ。来たよ、ばあちゃん」俺は笑いながら、ばあちゃんの好きな京漬物のお土産を手渡す。

福岡のばあちゃんは、俺の「大好きなばあちゃん」で。以前から俺は仕事の合間、暇を見つけて帰っては、ばあちゃんに、敬の自慢話をしていた。

ばあちゃんは結構、ぼけているから、俺の彼女を時々、俺の妹に勘違いしたり、俺の子供に勘違いしたりして。でも、「敬」って名前はちゃんと覚えてくれるようになった。

ばあちゃんは今、大正時代に作られた大きな屋敷に、ひっそりと独りで住んでいる。部屋の維持はどうしているかときいたら、週に

一回は、家政婦さんが来てくれて、掃除と、おばあちゃんの話し相手になってくれているそう。それをきいて俺は安心した。

「おばあちゃんは飄々として、「別に寂しい思いはしてない」と言っていて、俺の実家への同居を、断固拒否した。

「おじいさんとの思い出の中がいいんですわ」そう言っばあちゃんは、すごく純粹できれいだった。

「ばあちゃん、敬のことなだけどさ」縁側で、お茶と柿の種をつまみながら、俺は話す。

「ああ、敬さん。どうしたに、最近はお元気ですか」

「ああ、元気でやってるよ。多分」

「なんじゃ？」

「しばらく会ってないんだよ、ばあちゃん、きいてよ、今、すごい大変なんだからさ」

「なあにさ」

「彼女の親友の危機は、俺の危機なの」

「ふっふ、ほら、庭に植えた朝顔の種が、少しだけ芽を出したよ」
「ばあちゃんは、あっさりと会話を变える。

「まじめに話そうぜ。ばあちゃん、俺の彼女はレスビアンなのかもしれないんだよ」

「れずびあん」

「そうなんだよ、どうするばあちゃん」話なんて、通じてないのは分かった。でも、とりあえず俺は何でも、ばあちゃんに報告してしまう、おばあちゃんっこなんだ。

「俺の彼女、綺麗なんだぜー。しかも喧嘩強いんだ、知らなかったけど」

「ほうほう、おなごも強くなければねえ」

「ふっ飛ばすんだぜ、親友の彼氏を」

「からし？ からしせんべいの方が食べたいのかい、困った子だねえ」

「彼氏だつて。……ばあちゃん、俺は敬の彼氏なのかな」

「どれ、とつてきてあげようか」俺は笑つて、立ち上がるうとするばあちゃんを座らせた。

「ここに居てよ」

俺は、どこまで、ばあちゃんが、ぼけているかなんて、別にどうでもよかった。「ばあちゃんは、ぼけている」と、俺以外の家族は信じてる。だから、ばあちゃんを独り、大きな屋敷に住まわせるのは、結構心配で、反対していた。でも、汚い話、ばあちゃんがもらった、じいちゃんからの莫大な遺産を、自分達の家ローンにちょこつと使いたがつてるのも、俺はまざまざと知っていた。

本当にぼけた老人が、週に一度の家政婦の面倒だけで、ちゃんと生活できているなんて、少し冷静に考えれば、「おかしいな」と分かる。でも、ばあちゃんは、とりあえずぼけている。

俺と話しているときでも、他の家族と話しているときでも、とりあえずぼけているんだ。とりわけ、遺産と土地の話になると、大昔の話しかなくなる。

「俺が、法律事務所に入ったから、よけいに警戒したの？　ばあちゃん」俺は、本音が返つてこないと分かつたうえで、ばあちゃんにきく。

「……………」

「俺は、ばあちゃんっ子だよ。ばあちゃん」俺は、ばあちゃんの背中をパンパンと叩いて、「孫の俺」に戻った。

「きいてよ、ばあちゃん、俺はこれからどうするのがいいと思う？」

俺は、ばあちゃんに尋ねながら、自問自答する。

「敬のために、何ができると思う、ばあちゃん……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8489d/>

愛と追憶の日々

2010年10月8日14時48分発行